

福島県西白河郡

矢吹町文化財調査報告第9集

南 町 E 遺 跡

発掘調査報告書

昭和63年 2 月

矢吹町教育委員会

福島県西白河郡

矢吹町文化財調査報告第9集

南 町 E 遺 跡

発掘調査報告書

昭和63年2月

矢吹町教育委員会

福島県西白河郡

矢吹町文化財調査報告第9集

南 町 E 遺 跡

発掘調査報告書

昭和63年 2 月

矢吹町教育委員会

序 文

南町E遺跡発掘調査報告書を、この度矢吹町調査報告書第9集として刊行することとなりました。

南町地区は矢吹町西部天栄村との境、隈戸川流域に位置し、周辺には数多くの文化財包蔵地が確認されており、早くから文化が開けたと考えられています。

今回は隈戸川局部改良工事全体計画に基く開削築堤及び水衝部護岸工事の施工に伴い発掘調査を実施しましたが、実施に当たりましては、日本考古学協会会員永山倉造氏に依頼し調査を進めていただくと共に、須賀川市博物館長はじめ関係者の方々に御協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げる次第であります。

今回の調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物、土坑などと、それらに伴い土師器、須恵器が発見されました。土師器の杯の調整技法の特徴などから、これらは奈良～平安時代のもものと推察されます。

現在、町教育委員会では埋蔵文化財調査をはじめとして、文化財案内板の設置、文化財めぐりの実施、民俗芸能の掘りおこしと伝承などの文化財の保護・保全を進めており、今後も町民の方々に文化財について一層のご理解とご協力をお願いするものであります。

この報告書が今後の調査・研究にご活用いただければ幸いに存じます。

昭和63年2月

矢吹町教育委員会教育長

円谷行雄

例 言

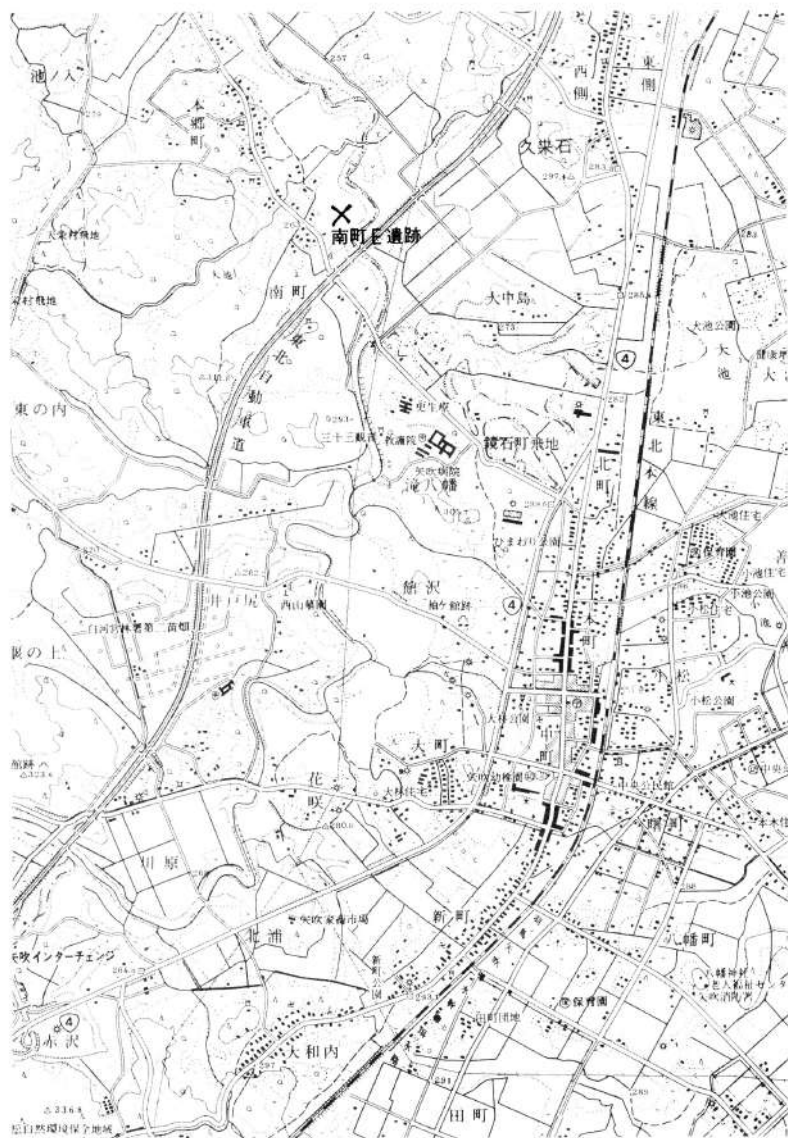
1. 本報告書は、矢吹町南町E遺跡発掘調査報告書である。
2. 本調査は、隈戸川河川局部改良工事に係り、記録保存のため緊急調査を実施した。
3. 発掘調査は矢吹町教育委員会が実施した。発掘担当者は永山倉造(日本考古学協会員)が当った。
4. 本書に収録した遺構・遺物の実測図、拓影は次の縮図を原則として、それぞれスケールを付している。遺跡全測図 $\frac{1}{300}$ 、中央ベルト $\frac{1}{80}$ 、遺構 $\frac{1}{60}$ 、 $\frac{1}{80}$ 、カマド $\frac{1}{30}$ 、溝 $\frac{1}{80}$ ・ $\frac{1}{100}$ 、土坑 $\frac{1}{40}$ 、土器その他 $\frac{1}{3}$ 。
5. 発掘調査及び、遺物整理、実測、報告書作成には執筆者の指導のもとに次のメンバーが参加した。
調査員：関根保夫(矢吹町文化財保護審議委員)、大野昌子(阿武隈考古学研究会会員)、柴田令子(阿武隈考古学研究会会員)、大内順子(阿武隈考古学研究会会員)。
6. 本書の執筆、編集は永山倉造が担当した。発行の責任は矢吹町教育委員会にある。
7. 発掘調査に際して次の方々の協力を得た。
小林日出丸、樫村多利、安田義男、須藤源一、須藤正、安田新一、岩崎辰儀、小林タカ子、加藤ラク、須藤まち子、須藤八重子、須藤サト子、須藤久美子、佐藤治郎、矢吹武、仲西由佳(宮城学院女子大生)、岩崎浩幸(東北学院大生)、西間木健二(青山学院大史学科)、矢吹明美。
8. 今回の調査によって得た資料および記録は、すべて矢吹町教育委員会が保管している。
事務局：教育長 円谷行雄、教育次長 大木豊、主幹兼学校教育係長 青木修一、社会教育係長 遠藤大、社会教育主事 阿部正人、主事 熊田真由美、社会教育指導員 佐藤隆、中央公民館長 星圭之助、前教育次長 大竹光典、前社会教育係長 長岐敬一、前派遣社会教育主事 中野英二、前主査 矢部静。

目 次

序 文 例 言

第1章 周辺の環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査日誌概要	2
第3章 遺構と遺物	5
第1節 竪穴住居跡（第1号住居跡～第11号住居跡）	5
第1号住居跡（S I-01）	5
第2号住居跡（S I-02）	10
第3号住居跡（S I-03）	13
第4号住居跡（S I-04）	19
第5号住居跡（S I-05）	22
第6号住居跡（S I-06）	25
第7号住居跡（S I-07）	30
第8号住居跡（S I-08）	39
第9号住居跡（S I-09）	42
第10号住居跡（S I-10）	51
第11号住居跡（S I-11）	42
第2節 溝跡（第1号溝跡～第6号溝跡）	55
第1号溝跡（S D-01）	55
第2号溝跡（S D-02）	59
第3号溝跡（S D-03）	61
第4号溝跡（S D-04）	62
第5号溝跡（S D-05）	64
第6号溝跡（S D-06）	64

第3節 掘立柱建物跡（第1号建物跡～第11号建物跡）	65
第1号建物跡（S B-01）	65
第2号建物跡（S B-02）	65
第3号建物跡（S B-03）	67
第4号建物跡（S B-04）	69
第5号建物跡（S B-05）	70
第6号建物跡（S B-06）	71
第7号建物跡（S B-07）	74
第8号建物跡（S B-08）	74
第9号建物跡（S B-09）	75
第10号建物跡（S B-10）	76
第11号建物跡（S B-11）	77
第4節 土坑（第1号土坑～第8号土坑）	79
第1号土坑（S K-01）	79
第2号土坑（S K-02）	79
第3号土坑（S K-03）	79
第4号土坑（S K-04）	80
第5号土坑（S K-05）	80
第6号土坑（S K-06）	80
第7号土坑（S K-07）	81
第8号土坑（S K-08）	82
第5節 その他の遺構（第1号遺構～第3号遺構・第1号棚列）	83
第1号遺構（S X-01）	83
第2号遺構（S X-02）	84
第3号遺構（S X-03）	87
第1号棚列（S A-01）	88
第6節 遺構外出土遺物	89
第7節 ま と め	93



第1章 周辺の環境

第1節 地理的環境

矢吹地方は福島県の中通りに位置し、西部に奥羽山脈があり、東部を南北に走る阿武隈山地の間をぬって、栃木県境那須火山東山麓に源を発する阿武隈川が三城目地区を北流している。

南町E遺跡は矢吹町の西端にあり、旧岩瀬郡広戸村柿之内地内に所在する。この南町E遺跡は矢吹丘陵が、阿武隈川支流の隈戸川によって形成された河岸段丘にある。この隈戸川は隣村の大信村、信夫地区の山中に源を発し、町屋、中新城、下新城をへて柿之内に至り、遺跡の所で北流している。遺跡のある地形は東北に傾斜しローム層が発達している。

第2節 歴史的環境

南町E遺跡は、古代は岩瀬郡に属しており、隈戸川、広戸川沿岸に遺跡が発達していた。古墳時代には、天栄村白子の竜ヶ塚古墳、矢吹町神田の鬼穴古墳、谷中古墳などの、巨大な横穴式石室を有する大型古墳がある。律令時代に入ると東北地方の開発が進み、養老2年に陸奥国は分割され、陸奥、石城、石背の三ヶ国が置かれ、矢吹地方は石背国に組入れられた。南町E遺跡はこの頃の古代集落跡と考えられる。この石背国も間もなく廃止され再び陸奥国に統合されている。

柿之内が歴史上にその名が出るのは江戸時代前期で、岩瀬郡児渡荘広戸郷に属し、もとは高林村うちであったが、白河風土記によると寛永20年から柿之内村として、村高 833石であったとされている。

第2章 調査経過

第1節 調査に至る経過

矢吹町南町地区には、奈良・平安時代の集落跡であるA～E遺跡があることが確認されている。

ここに、福島県が隈戸川河川局改良工事を行う予定となり、南町E遺跡の現状保存が困難であると認められるので、文化財保護法に基づき、昭和54年7月、予備調査を行った結果、遺構

第2章 第2節調査日誌概要

のあると思われる部分（南町120番地を中心に3,000㎡）を、昭和61年7月2日から、調査担当者、須賀川市立博物館学芸員、永山倉造氏（日本考古学協会会員）の指導により、矢吹町教育委員会が地元の地権者及び作業員の協力を得て発掘調査を行った。

第2節 調査日誌概要

- 7月2日（水）～4日（金） 南町E遺跡発掘調査区内の南西部を、重機による表土除去作業開始。
- 5日（土） 南西部に遺構を確認する。住居跡2基（S1-01、02）、環状遺構1基。
- 7日（月）～8日（火） 遺構を東西にのびる中央ベルトを設定。
- 12日（土） 器材、用具、テントを搬入。
- 14日（月） テントを設置し、本日より作業員による遺構検出作業開始。
- 18日（金）～19日（土） 中央ベルトのセクション実測、写真撮影。南北にA～K、東西に1～15のグリッドを設定。
- 23日（水）～26日（土） C、D-4、5グリッドにかけて溝状の遺構（SD-01）を確認し、掘り下げると多量の石が出土。南西部確認面の精査。
- 28日（月）～31日（木） 南東部を重機による表土除去作業開始。SD-01より須恵器、土師器数点出土。SD-01レベル測量。南東部に多数の柱穴、ピットを確認。S1-01の掘り下げ作業。
- 8月1日（金）～6日（水） G、H-9グリッドに楕円形状の遺構らしき落ち込みを検出し掘り下げる。S1-02よりつぶれた形で甕が出土。
S1-01、02の柱穴、セクション実測。
- 7日（木）～9日（土） B、C-11、12グリッドにかけて住居跡（S1-03）を検出し掘り下げると、切り合って住居跡（S1-04）が検出される。F-11グリッドに住居跡（S1-05）を検出。
- 11日（月）～19日（火） C～E-9～11、G-9グリッドの表土除去作業。S1-03より硯片が出土。D、E-3グリッド精査により柱穴多数検出。
- 20日（水）～23日（土） S1-03、04のセクション実測。GH-9グリッドの遺構セクション実測。H-12に住居跡（S1-06）を検出。D-12グリッドに環状遺構検出。F-11グリッドに溝状遺構（SD-02）を検出。
- 25日（月）～30日（土） SD-02掘り下げ作業。C-14グリッドに溝状遺構（SD-03）を検出し掘り下げ作業。E、F-14、15グリッドに住居跡（S1-

N32
W54 E
N30

K

N24

J

N18

I

N12

H

N6

G

N500

F

N6

E

S12

D

S18

C

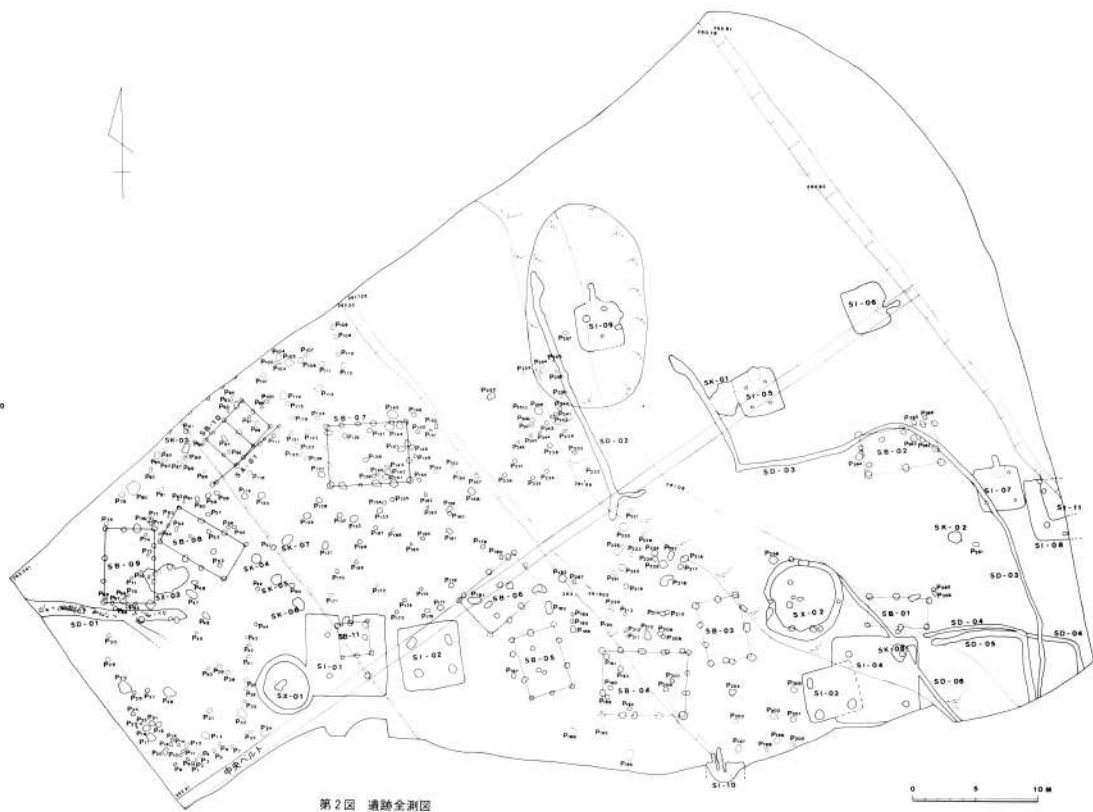
S24

B

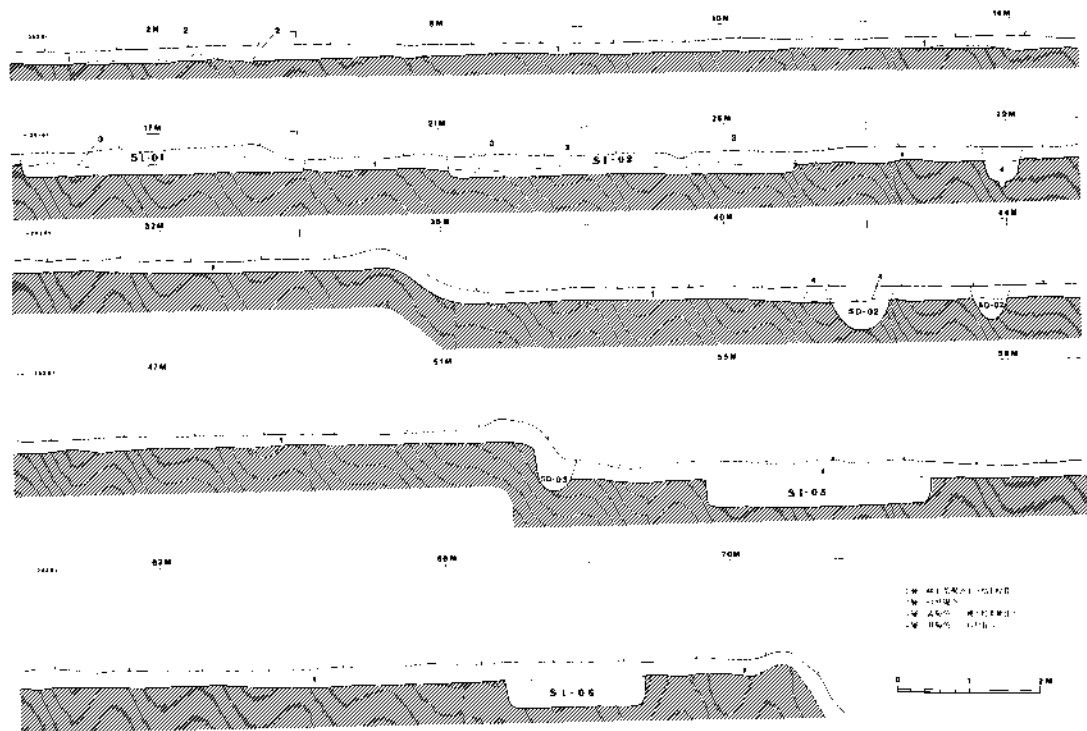
S30

A

W54 1 W48 2 W42 3 W36 4 W30 5 W24 6 W18 7 W12 8 W6 9 EW00 10 E6 11 E12 12 E18 13 E24 14 E30 15 E36



第2図 遺跡全測図



第3図 中央ヘルト断面図

第3章 第1節 竪穴住居跡

- 07、08)を検出し掘り下げ作業。G、H-9グリッドの遺構は住居跡と確認、S1-09とする。D、E-13、14グリッド表土除去作業。
- 9月1日(月)～6日(土) S1-05、07、08、09の精査。柱穴群のセクション実測。
- 8日(月) S1-05柱穴、セクション、エレベーション実測と写真撮影。B-10グリッドにカマド検出。南東西壁は調査区外の為、北壁とカマドのみで住居跡(S1-10)とする。遺跡全体の精査及び清掃をもって、本調査の作業員全員による検出作業を終了。
- 9日(火) 調査員と残りの作業員によるセクション、平面、エレベーション実測を開始。
- 10日(水)～20日(土) F-3グリッドのビット、柱穴セクション実測。S1-03～08の平面、エレベーション実測。S1-08と切り合う住居跡(S1-11)を検出。
- 24日(水)～30日(火) S1-09、10のセクション、平面実測。柱穴群の平面実測開始。柱穴群の中で、建物遺構として全体の規模が推測されるものを建物跡(SB)としてNOを付ける。
- 10月1日(水)～4日(土) SB-01、02の柱穴、エレベーション実測。建物跡の柱穴エレベーション及び平面実測。
- 6日(月) 建物跡の柱穴、エレベーション実測終了。本日をもって南町E遺跡の現地発掘調査を終了。器材、遺物等の運搬作業。
- 7日(火) 本日より報告書作成のための遺物整理、図面整理等にとりかかる。

第3章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡

第1号住居跡(第4図、第5図、第3図版、第1表)

〔検出状況〕 C、D-5～6グリッドにかけて検出された住居跡である。本遺跡の西南端に位置する。稲作の開田により遺構がほとんど削平された状態ではあるが、原形はかろうじて破壊を免れた。遺構は粘土層を掘り込んで構築されている。又住居跡をわずかに切って意味不明の円形遺構が検出された。又第11号建物跡と重複関係にある。

〔プラン・規模・方向〕 東西6.5m、南北6.4mの方形プランを呈する。第4号住居跡に次

第3章 第1節竪穴住居跡

ぐ比較的大形の竪穴式住居跡で、西南コーナーが第1号遺構（S X—01）に切られている。中心線は南北軸方向N—1°—Wを示しほぼ直交する。

〔覆土〕 深さは約20cmあり、砂質黄黒褐色土の第1層、壁側、床面と全体に焼土粒を多量に含む黄褐色土の第2層が堆積している。

〔壁・床面〕 両壁とも削平された。床面は東南コーナーが削平されたがその他は割合保存状況は良く、ほぼ平坦で、若干叩きしめられている。床面全体に焼土ブロックが検出され、火災によるものとも考えられる。

〔ピット〕 住居跡内からは14個のピットが検出された。このうち本住居跡に伴う柱穴と推定されるものはP₁、P₂、P₄、P₆、P₁₃である。P₃、P₇、P₈、P₁₁、P₁₄は柱痕の間隔から想定して建物跡（S B—11）と推定した。P₁～P₄の主柱痕間隔は3.1m～3.2mとほぼ等しい。断面観察の結果、柱痕も明確に検出され、又P₂の柱穴の中から多量の焼土が検出された。

〔周溝〕 カマド左袖付近を除いてほぼ全周している。幅は床面で約15cm～30cm、深さは15cmである。断面形は舟底形を呈し、周溝内覆土は黄褐色土の砂質である。

〔カマド〕 北壁の中央に構築されているが、上部はほとんど削平されている。住居跡の規模の割には浅い掘り込みで、燃燒部は熟変し焼土化しており、焚口部は掻き出されたと思われる焼土、白灰、木炭が見られる。煙道部はすでに削平を受けているため観察不能である。右袖部はP₉の柱穴によって破壊されている。

〔遺物〕 本住居跡南西の溝付近床面より甔がつぶれた状態ではあるが完形で出土した他、土師器の杯、甕、須恵器の甕等、復元実測できたものが6点、実測不可能なものが数点出土した。

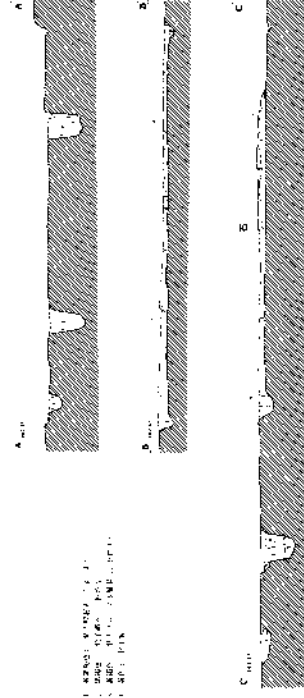
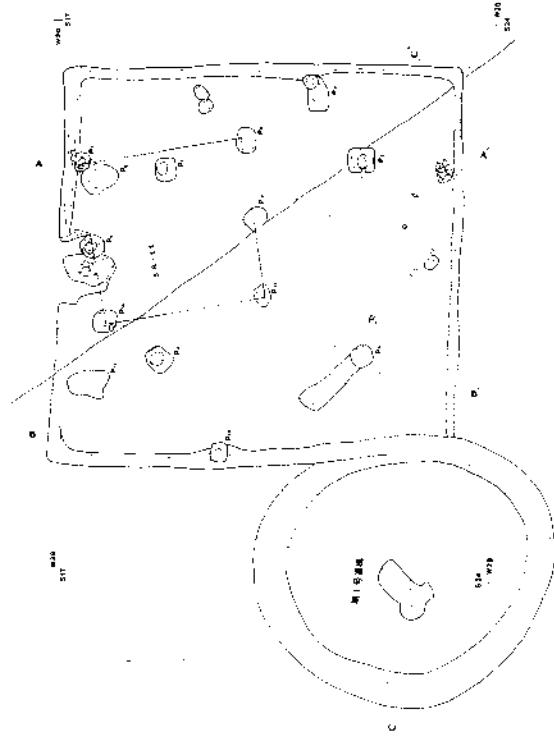
土師器（第6図、第25図版）

杯（1） 床面直上層より出土した完形品である。体部下半に角張った段を有する丸底の杯であるが口縁部は内彎しながら直立気みに立ち上がる。外面、体部上半には、ヨコナデ痕が観察され、底部は不定方向へのヘラケズリ調整が施されている。内面は外面の段に対する稜線を持ち、ヘラミガキ調整が施され、黒色処理がなされている。口径13cm、器高3.6cmを測る。

甕（2） 床面直上から出土した、底部を欠く胴部上半から口縁部にかけての $\frac{1}{6}$ を復元実測した。直線的な胴部から緩く外反する口縁部を有す。内面には、まきあげ痕が観察される。外面口縁部はヨコナデ、胴部は縦方向の細かな擦痕が観察されるが、痕跡は浅く、ヘラナデと判断される。推定口径19.5cmを測る。

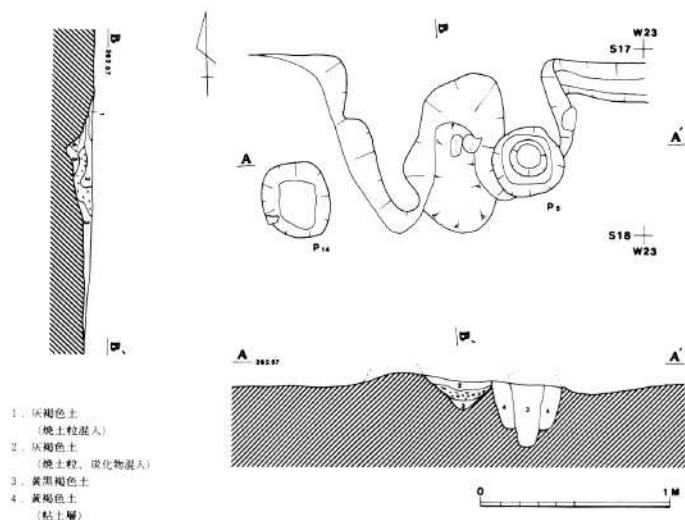
甕（3） 床面壁際から出土した底部破片を復元実測した。底部には木葉痕を残す。内外面共に手持ちヘラケズリ、底部外面にはヨコナデが観察される。推定底部6.5cmを測る。

甕（4） 床面南側壁際より出土した長胴型で無底式の大型の甕である。つぶれた状態では



第4图 1号房屋 - 1号窑

第3章 第1節竪穴住居跡



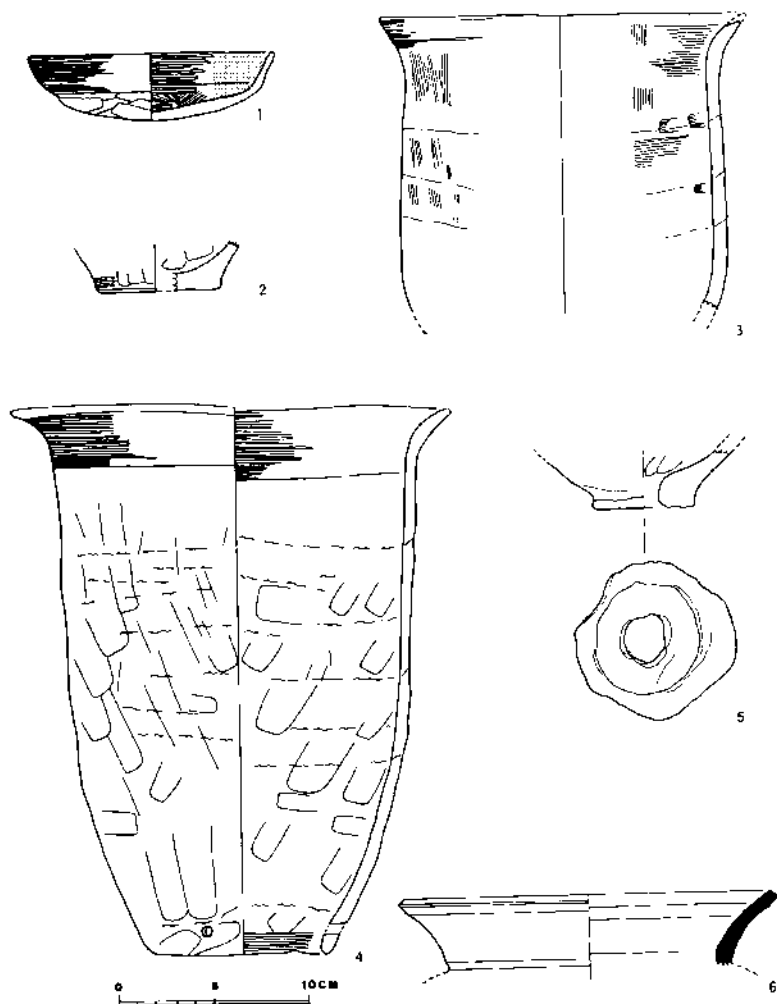
第5図 1号住居跡カマド

あったが、ほぼ完形である。器形は、底部よりやや内反しながら立ち上がり、胴部で直線的に立ち、口縁部で外反しながら開く。成形は、輪積みを行い、胴部外面調整は、手持ちヘラケズリが観察される。体部上半、口縁部にはヨコナデが施されている。体部下端には、径7mmの穿孔孔と思われる孔が相対して2個つけられている。器高29.5cm、口径23.2cm、底部孔径9.3cmを測る。

甕(5) 床面より出土した甕の底部である。内外面共摩滅が著しい。底部より体部へ直線的に広がりをもつ。底部の器肉は1.5cmと厚く重量感がある。外面一部に巻き上げ痕が残る。焼成は普通。胎土は荒く砂粒が若干混入。黄褐色を呈し、内外面共一部黒色を呈す。底径5.4cm、底部の孔径2.1cmを測る。

須恵器(第6図、第25図版)

甕(6) 円形遺構の溝上層より出土した甕の破片を復元実測したものである。頸部から強く外反し平坦な口縁部を持つクロロ成形である。内外面共に青灰色を呈する。推定口径19.8cm



第6图 1号住居跡出土遺物

第3章 第1節 竪穴住居跡

を測る。

第1表 第1号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口径	底径	高さ	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	6-1	25-1		床直	13		3.6	非ロクロ	ヨコナデ ヘラケズリ	ミガキ	内黒、丸底、 有段
〃	甕	6-2			〃	19.5 (推定)			巻き上げ	ヨコナデ ヘラナデ		
〃	〃	6-3	25-2	壁際	床面		6.5 (推定)		非ロクロ	手持ちヘラケズリ・ヨコナデ	手持ちヘラケズリ	木炭痕
〃	甕	6-4	25-3	南壁際	〃	23.2	9.3	29.5	輪積み	〃	●	無底式、孔2 個、径7mm
〃	〃	6-5	25-4		床直				巻き上げ	ヘラケズリ		無底式
須恵器	甕	6-6	25-5	溝	上部	19.8(推定)			ロクロ			

第2号住居跡（第7図、第3図版、第2表）

〔検出状況〕 C、D-6～7グリッドにまたがる住居跡で、第1号住居跡の東側に位置する。

本住居も開田により削平された状態ではあるが、床面は割合に保存状況は良好であった。

プランは第3層上面で確認された。

〔プラン・規模・方向〕 南北5.15m、東西5.15mを測り、ほぼ正方形のプランを呈する。中心線は南北軸方向N-8°-Eを示す。

〔覆土〕 厚さ5cm～15cmに堆積した焼土を多量に含む黄褐色土が主体を占め、床面上の黄黒褐色土に分けられる。中央部近くの床面に木炭を多量に含む黄褐色土が堆積している。

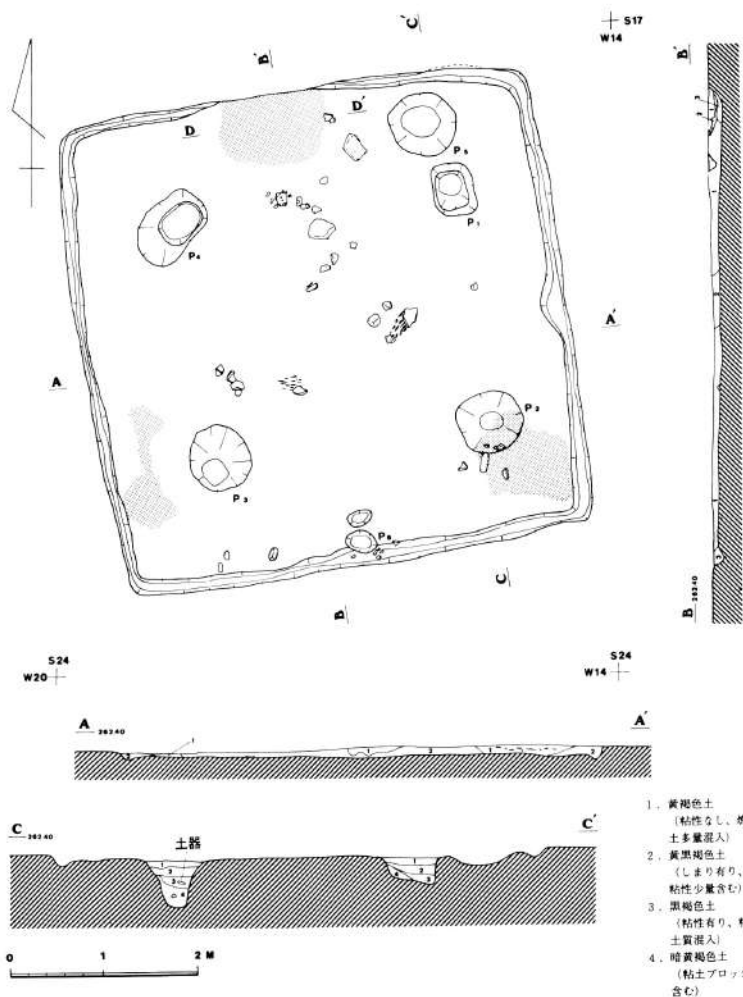
〔壁・床面〕 全壁とも遺構の上部が削平され、壁の残りはあまり良くなかった。東壁中央で15cm、南壁中央で10cmを測る。床面はあまりしまっておらず、北東に向かって若干低くなっている。又全体に多量の焼土、炭化物が堆積しているので、火災によるものと思われる。

〔ピット〕 床面からP₁～P₆の6個が検出された。位置、大きさ、深さなどからみて、P₁～P₄は柱穴と考えられる。P₃はカマド右側に位置し、25cmと浅い。柱痕の間隔はP₁～P₂は2.55m、P₂～P₃は2.95m、P₃～P₄は2.65m、P₄～P₅は2.9mとなっている。柱穴の断面観察では柱痕跡が不明確である。P₅のピットの中とそのまわりから炭化物や焼土が多量に出土した。

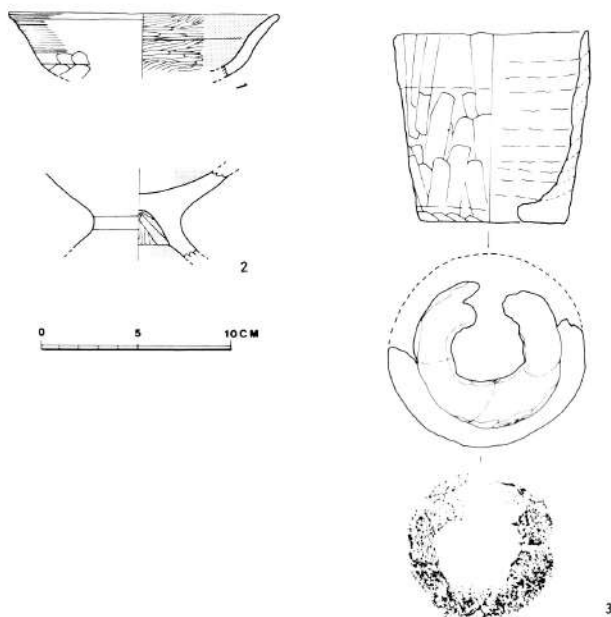
〔周溝〕 カマドと思われる北壁中央付近を除いて全周に亘っている。幅は床面で15cm～20cm。底面では約10cm、深さは15cmである。周溝内覆土は黄黒褐色の砂質土である。

〔カマド〕 北壁中央に多量の焼土が見られたが、カマドとしての確認までには至らなかったが、焼土、炭化物、焼石等の状態から考えると、カマドと想定できる。煙道は削平されたものと思われる。

〔遺物〕 覆土内床直上より杯の破片と高杯の一部が出土し、カマドと思われる焼土付近からは、つぶれた状態で筒形の甕が出土し、又そのまわりに接合不可能な細かい甕の同一体の破片が散乱していた。その他実測不可能な土師器片が17点出土している。



第7図 第2号住居跡



第8図 2号住居跡出土遺物

土師器 (第8図、第25図版)

杯(1) 床面直上より出土した約 $\frac{1}{6}$ が遺存する杯の小破片を復元実測したものである。丸底の底部をもつと考えられ、底部と体部の外面境界には稜線を形成し、内面にはそれに対応する稜線をもつ。体部は若干丸みを感じられるがほぼ直線的に外傾し立ち上がる。外面調整は、底部と体部下半には手持ちヘラケズリ、体部から口縁部にかけてはヨコナデが観察される。内面はヘラミガキの調整で黒色処理が施されている。推定口径14.4cmを測る。

高杯(2) 床面直上より出土した高杯形土器の脚部である。内彎みに立ち上がる杯部と上半が短く直立し、下半がラッパ状に開く脚部とが組み合わせあったものである。内外面とも摩滅が著しいが、脚部外面には手持ちヘラケズリ痕が観察され、杯、脚部共に内黒処理が施され

第3章 第1節 野穴住居跡

ている。

甕(3) 住居跡カマド焚き口より検出された約 $\frac{2}{3}$ が遺存する甕である。胴部は直立的に立ち上がり、全体に筒形状を呈し小型である。外面は摩滅が著しいがヘラナデが施され、内面は粘土接合痕が遺存しており輪積み成形と観察される。体部から口縁部にかけて器厚は薄く、全体に技法は粗雑である。底部には木葉痕がわずかに観察される。推定口径10.3cm、底径7.8cm、底部孔径3.8cm、器高10cmを測る。

第2表 第2号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口径	底径	高さ	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	8-1			床直	14.4 (推定)			非ロクロ	手持ちヘラケスリ・ヨコナデ	ミガキ	内黒、丸底
※	高杯	8-2	25-6		※				※	手持ちヘラケスリ		内黒
※	甕	8-3	25-7	カマド 焚き口		10.3 (推定)	7.8 孔径3.8	10	輪積み	ヘラナデ		木葉痕

第3号住居跡(第9図、第5図版、第3表)

[検出状況] B-11~12。C-11~12グリッドに位置し調査区内の東南端にあたる。第3号住居跡は第4号住居跡の西壁を切っており、重複した状態で検出された。表面はわずかに削平されているが、床面まで黄褐色上の粘土層を切り込んで構築されている。比較的、検出状況は良好である。

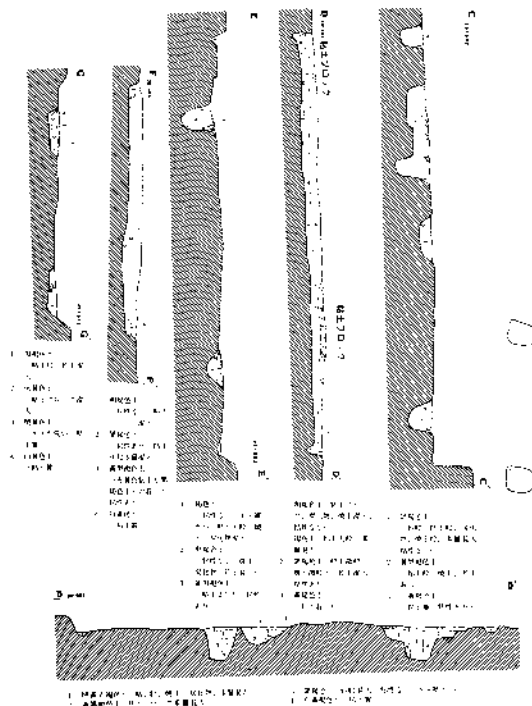
[プラン・規模・方向] 東壁は確認されないが、断面観察によると全体のプランは隅丸方形を呈する。南北4.1m、東西4.4mを測る。西壁を基軸とした軸線方向はN-10°-Wである。

[覆土] 深さは中心で30cmあり、整然とした堆積が観察でき、住居内覆土は4層に分けられる。第1層は明褐色土、第2層は黒褐色土、第3層は黄黒褐色土、第4層は白黄色土(粘土質)に分けられる。

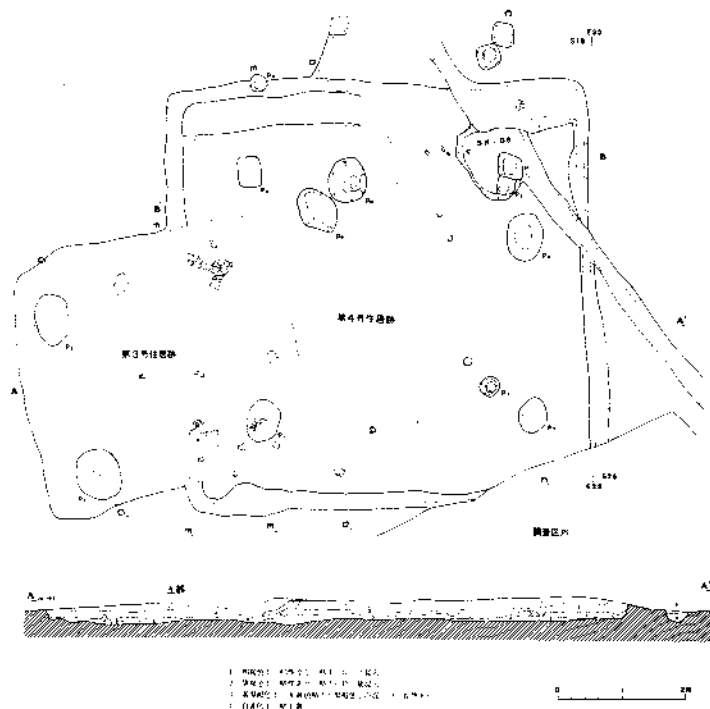
[壁・床面] 南壁、北壁、西壁問わずに削平されているが、壁の保存状態が良く黄褐色土の粘土層を垂直近く掘り込まれている。床面は断面観察では、赤黄褐色土と黒褐色土の混じった土が敷き固められた貼り床を施して平坦である。又第4号住居跡との切り合いに焼土、炭化物の層を確認した。層位、位置との関連からみて、カマドの痕跡とも推定される。

[ピット] 住居内からは不整形を呈するピットが3個検出された。間隔は、P₁-P₂は2.8m、P₂-P₃は2.7mとほぼ同間隔で、位置からみて柱穴と考えられるが、3個共比較的掘り込みが浅い。又P₁は、ピット内からロクロ成形の内黒の杯が数点出土しているので、カマドと想定される焼土の右側に位置するところから貯蔵穴とも考えられる。

[周溝] 確認されなかった。



第9图 第3、4号住居跡



第3章 第1節竪穴住居跡

〔カマド〕 40cm×60cmを測る赤橙色の焼土の塊が観察されたが、位置的にみて、カマドと推定されるが、原形を確認することが出来なかった。

〔遺物〕 (第10図、第11図、第26図版、第27図版、第3表)

遺物は覆土各層から出土している。多くは第3層、床面上より集中して出土し、主として土師器の破片が多く占める。第3号住居跡と第4号住居跡の切り合いに壺(図9)と、段を有する杯が出土している。P₁のビット内より、ロクロ成形の平底の杯、床面より円面硯の破片が出土し、南東コーナーより、焼土と細かい土師器片や小石が多く出土している。

土師器(第10図、第26図版)

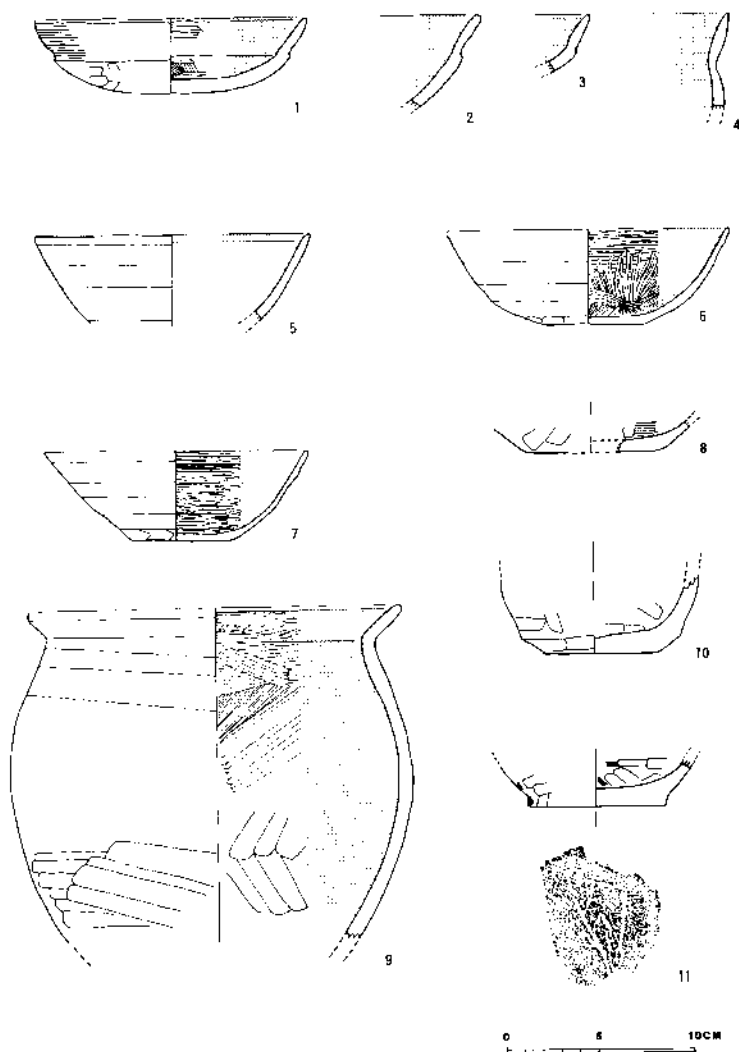
杯(1) 床面直上より出土した。全体の $\frac{1}{5}$ 遺存を復元実測した。体部中央に角張った段を有する丸底の杯であるが、口縁部は内彎しながら直立気みに立ち上がる。外面口縁部はヨコナデ、底部は手持ちヘラケズリ調整が観察される。体部中央の段はヘラ状の工具で削り取ったと推定される痕跡がみられる。内面には稜線が観察され、摩滅気みではあるが口縁部と体部下半にヘラミガキ痕が、わずかに認められる。内黒処理がなされている。推定口径14.5cm、器高4cmを測る。

杯(2、3、4) 床面直上より出土した杯の破片である。(2)は外面口縁下端に軽い段を有する。外面口縁部、体部共にヨコナデ調整をうけ、かすかにケズリ痕が観察される。(3)は口縁部と体部に明瞭な段を有する。外面口縁部にはヨコナデ、体部には手持ちヘラケズリ痕が観察される。内面は摩滅が著しいが全体に横方向のミガキ痕が認められる。(4)は体部より口縁部へ向かい内湾し、境界に凹を持ち、直線的に外反気みに立ち上がる。外面口縁部中程に稜線がみられ、小型の壺形杯であろうと推定される。外面口縁部には横方向への荒いミガキ痕、体部には縦にヘラケズリの後、横方向への荒いミガキが施されている。内面には、口縁部、体部共に横方向への荒いミガキ痕が観察される。(2、3、4)共に内黒処理がなされている。

杯(5) 住居跡P₁覆土内より検出されたロクロ成形による杯の破片を図上復元した。体部より口縁部までやや内反して立ち上がる。色調は赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。摩滅が著しく、ロクロの回転方向や技法は不明である。内黒処理が施されている。

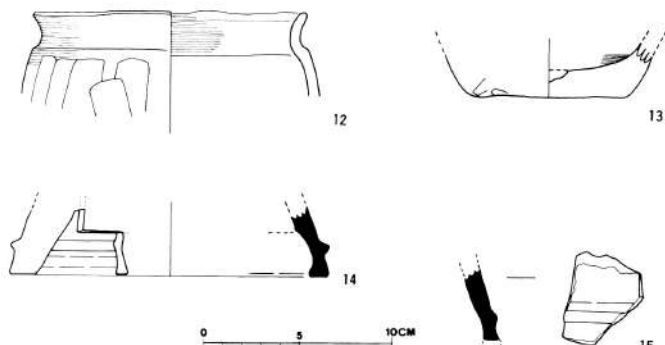
杯(6) 住居跡P₁付近の覆土内より出土した約 $\frac{3}{4}$ を遺存する杯を復元実測した。ロクロ成形による。くすんだ黄褐色を呈している。外面底部から底部下半にかけては手持ちヘラケズリ調整が施され、内面は底部を放射状、体部から口縁部にかけて横方向のヘラミガキ調整後黒色処理をしている。推定口径14.8cm、器高5cmを測る。

杯(7) 住居跡P₁覆土内より検出されたロクロ成形による杯の完形品を復元実測した。底部は平底で、体部はやや波打ちながら外傾し立ち上がる。器肉は3mmと薄い。底部切離し技法は回転ヘラオコシである。器面の摩滅が著しく詳細な観察はできないが、外面底部から体部下



第10図 第3、4住居跡出土遺物

第3章 第1節竪穴住居跡



第11図 第3、4号住居出土遺物

半には、かすかに手持ちヘラケズリ調整がみられ、内面には横方向にヘラミガキが施されている。内黒処理がなされている。口径14cm、器高4.8cmを測る。

杯(8) 住居跡床直上面より出土した破片を図上復元した。平底の杯と推定される。内黒処理が施され、外面底部は手持ちヘラケズリ調整、内面にはヘラナデ痕が観察される。

甕(9) 第3、4号住居跡切り合い床直上より出土した底部のみ欠損の甕を復元実測した。ロクロ使用による成形で、後、内面に黒色処理が施されている。体部は丸みを持ち頸部に至り、口縁部はくの字に強く外反する。内面口縁部に細かいミガキ、体部上半に向けて荒いミガキが施されている。体部下半には手持ちヘラケズリ調整が施されている。外面口縁部から体部上半にヨコナデ、体部下半は手持ちヘラケズリ調整が施されている。口径19.8cm、体部最大径20.2cmを測る。

壺(10) 第3、4号住居跡切り合いより出土した底部を復元実測した。全体的にはコップ形の器形を呈する壺かと思われる。器内は小型であるにもかかわらず1.2cmと厚く重量感がある。摩滅が著しく、内面は荒い手持ちヘラケズリ痕と推定される凹凸が全体的に残り、かすかにナデ痕も観察される。外面体部下端に、わずかに手持ちヘラケズリ痕が観察される。底径6.3cmを測る。

壺(11) 第3、4号住居跡切り合いより出土した底部を復元実測した。小型の壺であろうと思われる。外面体部下端に手持ちヘラケズリの後、ヘラ調整が施され、内面は手持ちヘラケ

第3章 第1節 竪穴住居跡

ズリとナデが観察される。外面底部には木葉痕が認められる。底径7.3cmを測る。

甕 (12) 住居跡床直上より出土した口縁部の破片を図上復元実測した甕である。口縁部下端に緩いくびれがあり、外反する口縁部を持つ、胴部は上位に張りをもって緩く膨む小型甕と推定される。摩滅が著しく調整痕は不明瞭であるが、口縁部の内外面共にヨコナデ痕がみられ、そのためか口縁部と胴部の境界には緩い段が観察される。推定口径14.6cmを測る。

甕 (13) 住居跡より出土した底部約 $\frac{1}{4}$ を復元実測した甕である。底部より体部へ直線的に外傾する。内外面共に摩滅が著しいが、体部下端に手持ちヘラケズリ、内面には、わずかにヨコナデが観察される。底部には木葉痕を残す。推定底径8.2cmを測る。

須恵器 (第11図、第27図版)

円面硯 (14) 住居跡床面より出土した脚部の破片を図上復元実測した円面硯である。脚体部側面に透し窓がつけられ透脚硯と考えられるが、スカシの数は不明である。脚部下端に一条の稜線を有する。成形はロクロによりスカシはヘラ切りによるものである。推定底径17cmを測る。

円面硯 (15) 住居跡床面より出土した破片を図上復元した円面硯の脚部である。脚体部側面に透かしの一部が観察され透脚硯と推定される。成形はロクロにより透かしはヘラ切りによるものと推定される。

第3表 第3号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	10-1	26-1		床 直	14.5 (推定)			4		非ロクロ	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ	内面・有段・木炭
〃	〃	10-2	26-3		〃						〃	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ		〃
〃	〃	10-3	26-4		〃						〃	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ	〃
〃	〃	10-4	26-2		〃						〃	ミガキ・手持ちヘラケズリ	〃	〃
〃	〃	10-5		ビット							ロクロ			内 面
〃	〃	10-6	26-5	〃		14.8 (推定)		5			〃	手持ちヘラケズリ	ミガキ	〃
〃	〃	10-7	26-6	〃		14			4.8		〃	回転ヘラ・手持ちヘラケズリ	〃	内 面・木炭
〃	〃	10-8			床 直						非ロクロ	手持ちヘラケズリ	ヘラナデ	〃
〃	甕	10-9	27-5	第3, 4号住居跡跡面	〃	19.8	20.2				ロクロ	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ	ミガキ・手持ちヘラケズリ	〃
〃	壺	10-10	26-8	〃				6.3			非ロクロ	手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ・ナデ	
〃	〃	10-11	27-2	〃				7.3			〃	手持ちヘラケズリ・ヘラ調整	〃	木炭痕
〃	甕	10-12	26-7		床 直	14.6 (推定)					〃	ヨコナデ	ヨコナデ	
〃	〃	11-13	27-3		覆 土			8.2 (推定)			〃	手持ちヘラケズリ	〃	木炭痕
須恵器	円面硯	11-14	27-7		床 面			17 (推定)			ロクロ			
〃	〃	11-15	27-6		〃						〃			

第4号住居跡（第9図、第5図版、第4表）

〔検出状況〕 B-12~13、C-12~13グリット内に、第3号住居跡と第4号住居跡の切り合いをもって検出された。検出面は第2層上位で、黄褐色土を切り込んで構築されている。全体的には、遺存状況は、やや良好であるが、北東部分に多量の焼土が露出し、平面プランの検出作業が非常に困難であった。又第6号溝と第8号土坑が重複して、検出された。

〔プラン・規模・方向〕 平面プランは西壁中央が、第3号住居跡に切られ、南東コーナーが河川によって破壊されているが、南北6.95m、東西6.7mを測る方形プランを呈する。当遺跡の竪穴住居跡の中では大型の住居跡である。南北線の中点を通る軸線はN-3°-Wである。

〔覆土〕 住居内は、第4層の堆積土を認め、第1層は砂質明褐色が堆積し、第2層は焼土、炭化物を含んだ褐色土である。第3層は焼土粒子を含む黒褐色土、第4層は粘土質の黄褐色土が堆積している。周溝は焼土粒の含んだ黄褐色土を確認できた。

〔壁・床〕 壁の一部は破壊されてはいるが、他は明確に検出された。残存する壁はほぼ垂直に立ち上り、最も高い西北壁が45cm~55cmを測る。南壁中央は提防の盛土のため不明確である。床面は溝との範囲は明確に検出された。床面全体は平坦ではあるが、中央部より北側に粘土混じりの焼土が深さ10cm~15cmで広範囲に検出された。床面の保存は良く、焼土を広げ叩きしめた貼り床である。床面精査の段階で焼土を取り除いた下層から第8号土坑と、P₁、P₃、P₆の3柱穴が確認された。

〔ピット〕 床面からP₁~P₉の9個のピットが検出されている。P₁~P₃は柱穴と考えられ、いずれも平面形を呈している。深さ3個とも45cm~55cmとほぼ等しい。又柱の間隔はP₁~P₂は4.0m、P₃~P₁は4.1mである。断面観察の結果、柱痕も明確に検出され、埋土には黄褐色土を用いている。P₈とP₉のピットは焼土層の下にあり、深さはP₈が48cm、P₉は45cmと深く貯蔵穴とも考えられるが、遺物の出土はない。

〔周溝〕 切り合いによって一部は確認出来ないが、ほぼ全周する。東側の溝は第6号溝によって切られている。溝の平均巾は、30cm前後と思われる。深さは床面から6cm~10cmでU字状を呈する。北東隅に溝と第8号土坑に付随した溝が合流した状態で検出された。

〔カマド〕 確認されなかったが、カマドの崩壊土と思われる多量の焼土が第8号土坑左側に堆積しているところから、位置的にみて、北壁中央に施設されていたとも考えられる。

〔遺物〕 遺構内から出土した遺物は、ごくわずかである。床面に密着して出土しており土師器がほとんどを占めるが、二片だけ須恵器破片が南壁際焼土内より出土した。第3号、4号住居跡との切り合い部から出土した遺物は、第3号住居跡出土としたため、第4号住居跡からの出土遺物は、土師器が復元実測可能なもの6点、不可能なもの8点、須恵器で

第3章 第1節竪穴住居跡

は図上復元可能なもの1点、不可能なもの1点である。

土師器（第12図、第27図版）

杯（1） 第4号住居跡北東コーナー溝より出土した口縁部約 $\frac{1}{6}$ 遺存の杯を復元実測した。他、同一地点より破片が5点出土したが、いずれも結合不可能である。体部中央に角張った段を有する丸底の杯と思われる。口縁部は内湾しながら外反気みに立ち上がる。口縁部下半に軽い稜線がみられ、外面体部上半にかけて対応する凹を呈している。外面口縁部に手持ちヘラケズリ痕、口縁部と内面口縁部には縦方向へのミガキ、体部には斜めのミガキが観察される。内面には黒色処理が施されている。推定口径約15cmを測る。

杯（2） 第4号住居跡より出土した口縁部約 $\frac{1}{6}$ 遺存の杯を復元実測した。体部は器高の低い円錐状を呈すると思われる。体部と口縁部の境に明瞭な稜線を有し、口縁部は直線的に外上方にややひらいて立ち上がる。外面口縁部には横方向へのミガキが明瞭に観察され、体部下半には、手持ちヘラケズリが施されている。内面には、横方向へのミガキがみられる。内黒処理がなされている。推定口径11.5cmを測る。

杯（3、4） 第4号住居跡床直上より出土した杯の破片を図上復元した。（3）は、体部中央に段を有する。摩滅が著しく、十分な観察はできないが、外面体部には、かすかに手持ちヘラケズリ痕とナデの後が観察される。内面は黒色処理が施され、口縁部には、ヘラミガキ調整が施してある。（4）は、内外面体部に段を有し、口縁部が大きく外反する。外面口縁部にはヨコナデ、体部には手持ちヘラケズリが施されている。内面は黒色処理され、ヘラミガキ痕が観察される。2片共、丸底を呈すると思われる。

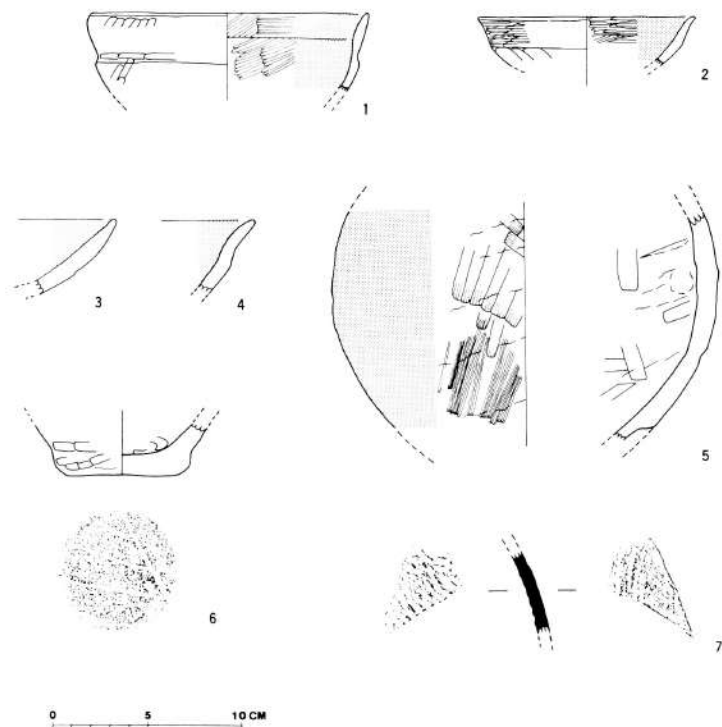
甕（5） 第4号住居跡南壁より出土した胴部約 $\frac{1}{6}$ 遺存を図上復元した。胴部が膨む形をもち口縁部へ向けて内湾する非ロクロ成形による甕の体部であろうと思われる。外面黒色処理がなされ、手持ちヘラケズリ後ヘラナデが施されミガキ痕が観察される。また体部上半にはハケ目が残りの、巻き上げ痕が認められる。内面体部にはヘラケズリ痕、巻き上げ痕が明瞭に観察される。推定最大胴径20.3cmを測る。

壺（6） 第4号住居跡南壁付近より出土した壺の底部を復元実測した。体部下半には手持ちヘラケズリの後、ヘラ調整が施されている。内面体部には手持ちヘラケズリ痕が観察される。外面底部には、木葉痕が明瞭に観察される。底径7.2cmを測る。

須恵器（第12図）

甕（7） 第4号住居跡南壁焼土内より出土した須恵器の破片である。厚さから小型の甕であろうと思われる。外面体部に条線状の叩き目とヨコナデ痕が観察される。内面体部には波状紋がみられる。

第3章 第1節竪穴住居跡



第12図 第4号住居跡出土遺物

第4表 第4号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	12-1		北東コーナー溝		1.5 (推定)					素焼き	手持ちヘラケズリ	ミガキ	内黒、右段、左底
〃	〃	12-2		覆土		1.1、5 (推定)					〃	手持ちヘラケズリ	〃	内黒
〃	〃	12-3		床直上							〃	ミガキ	〃	内黒、右段、左底
〃	〃	12-4		〃	〃						〃	ヨコナデ	〃	〃
〃	甕	12-5	27-1	南壁			2.0、3 (推定)				巻土上げ	ヨコナデ・ハケ目	ヘラケズリ	外黒
〃	壺	12-6	27-4	〃				7、2				手持ちヘラケズリ ヘラ調整	手持ちヘラケズリ	木炭痕
須恵器	甕	12-7		〃	焼土内						産灰録	叩き目		

第3章 第1節竪穴住居跡

第5号住居跡（第13図、第14図、第6図版、第5表）

〔検出状況〕 F・G-11グリットにまたがる住居跡である。遺構検出面は2層面で確認された。全体的にあまり削平されず、保存状況は良好であった。本住居跡は西側に第1号土坑と第3号溝が重複して確認された。第1号土坑と住居跡との関連性は判明しにくい。

〔プラン・規模・方向〕 西壁の一部が切られているが、 $3.7 \times 3.4\text{m}$ の隅丸方形を呈すると思われる。カマドは北壁中央に作られている。中心線は南北軸方向N—15°—Wを示す。当遺跡の検出の住居跡の中では比較的規模が小さい住居跡である。

〔壁・床面〕 西壁は第1号土坑によって破壊されてはいるが他の三壁は明確に検出されている。遺存する壁はすべてほぼ垂直である。東壁が約25cm、南壁が約32cmを測る。北壁は一部攪乱されている。溝底から55cmを測る。壁は黄色土の小石まじりの砂質土を掘り込んで構築されている。床面は全体に平坦で、黄褐色土の砂粒と粘土の混じった土を約5cmの厚さに固くたたきしめた貼り床を、土坑との切り合いで確認した。

〔覆土〕 堆積土は5層からなり、自然堆積を示す。1層はしまりのない暗黒褐色土、2層は黄黒褐色土、3層は灰茶褐色土、4層は粘土粒の含んだ暗黒褐色土、5層は黄褐色土に分けられ、中央で深さ45cmを測る。壁際は三角堆積が観察されたが、壁の剥落土と思われる。

〔ピット〕 床面には5個のピットが検出された。 $P_1 \sim P_4$ までのピットは大きさが約20cm～25cm、深さは約37cm～45cmを測りほぼ等しい。柱の間隔は $P_1 \sim P_2$ は1.75m、 $P_2 \sim P_3$ は1.45m、 $P_3 \sim P_4$ は1.7m、 $P_4 \sim P_5$ は1.55mである。 $P_1 \sim P_4$ の中からは柱痕は検出されないが位置的にみて、柱穴と考えられる。 P_5 は $24\text{cm} \times 18\text{cm}$ 、深さ25cmを測る。

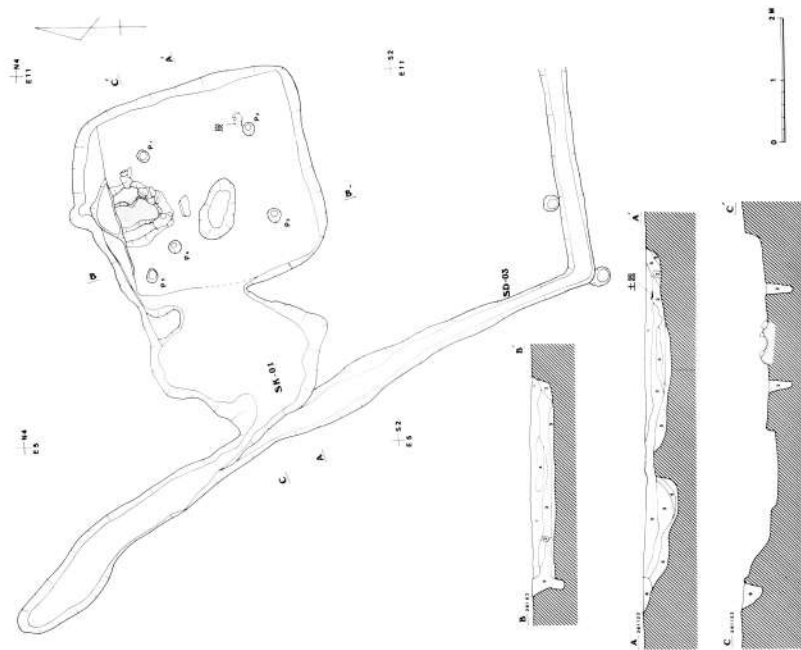
〔カマド〕 カマドの燃焼部から煙道部は北壁際の溝状のくぼみによって切られ確認することが出来なかった。カマドの焚口に凝灰炭と思われる割石を入れ補強している。袖部、構内堆積土と区別がつかず確認に困難を費した。全体の遺存部はわずかで、全体形の構造は明らかにし得ないが、両袖の基底面と燃焼部の一部が残っている。焚口付近に巾10cm、長さ33cmを測る長方形の石が1個床面上より、検出され、又右袖付近から数個の石が検出された。

〔遺物〕 本住居跡内出土遺物は、第1層覆土内より甕の破片が2点、その他、実測不可能な土師器の破片が5点、出土したのみである。長方形の石が、炉の前、床直上面より検出されている。

土師器（第15図）

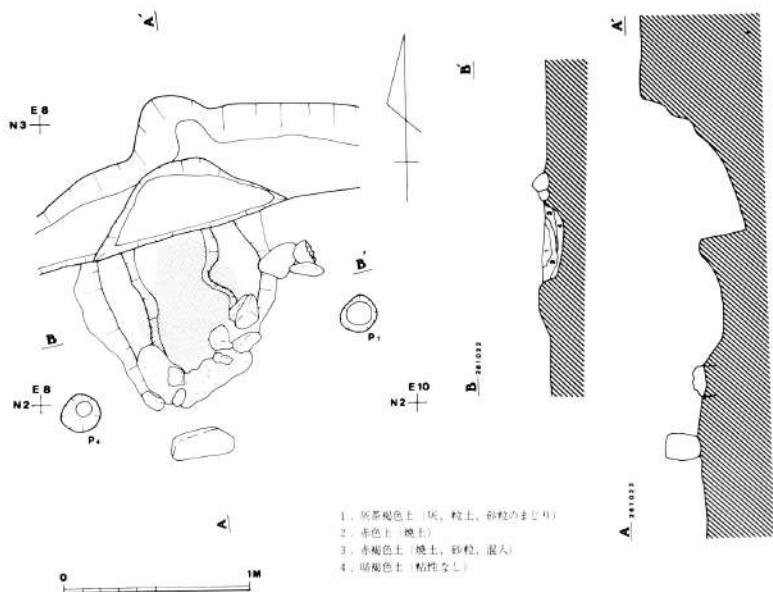
甕（1） 第5号住居跡ベルト内より検出された。体部下端（孔部）約 $\frac{1}{6}$ の遺存の甕と思われ、体部上半の破片を図上復元実測した。底部より胴部へ直立的に立ち上り長胴形を呈すると思わ

第13图 第5号住居跡、第1号土坑、第3号溝跡

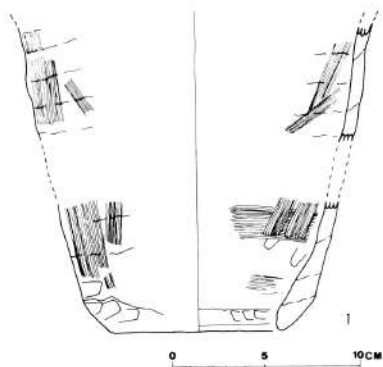


1. 住居跡 (1-1, 1-2, 1-3, 1-4, 1-5, 1-6, 1-7, 1-8, 1-9, 1-10, 1-11, 1-12, 1-13, 1-14, 1-15, 1-16, 1-17, 1-18, 1-19, 1-20, 1-21, 1-22, 1-23, 1-24, 1-25, 1-26, 1-27, 1-28, 1-29, 1-30, 1-31, 1-32, 1-33, 1-34, 1-35, 1-36, 1-37, 1-38, 1-39, 1-40, 1-41, 1-42, 1-43, 1-44, 1-45, 1-46, 1-47, 1-48, 1-49, 1-50, 1-51, 1-52, 1-53, 1-54, 1-55, 1-56, 1-57, 1-58, 1-59, 1-60, 1-61, 1-62, 1-63, 1-64, 1-65, 1-66, 1-67, 1-68, 1-69, 1-70, 1-71, 1-72, 1-73, 1-74, 1-75, 1-76, 1-77, 1-78, 1-79, 1-80, 1-81, 1-82, 1-83, 1-84, 1-85, 1-86, 1-87, 1-88, 1-89, 1-90, 1-91, 1-92, 1-93, 1-94, 1-95, 1-96, 1-97, 1-98, 1-99, 1-100)
2. 土坑 (1-1, 1-2, 1-3, 1-4, 1-5, 1-6, 1-7, 1-8, 1-9, 1-10, 1-11, 1-12, 1-13, 1-14, 1-15, 1-16, 1-17, 1-18, 1-19, 1-20, 1-21, 1-22, 1-23, 1-24, 1-25, 1-26, 1-27, 1-28, 1-29, 1-30, 1-31, 1-32, 1-33, 1-34, 1-35, 1-36, 1-37, 1-38, 1-39, 1-40, 1-41, 1-42, 1-43, 1-44, 1-45, 1-46, 1-47, 1-48, 1-49, 1-50, 1-51, 1-52, 1-53, 1-54, 1-55, 1-56, 1-57, 1-58, 1-59, 1-60, 1-61, 1-62, 1-63, 1-64, 1-65, 1-66, 1-67, 1-68, 1-69, 1-70, 1-71, 1-72, 1-73, 1-74, 1-75, 1-76, 1-77, 1-78, 1-79, 1-80, 1-81, 1-82, 1-83, 1-84, 1-85, 1-86, 1-87, 1-88, 1-89, 1-90, 1-91, 1-92, 1-93, 1-94, 1-95, 1-96, 1-97, 1-98, 1-99, 1-100)
3. 溝跡 (3-1, 3-2, 3-3, 3-4, 3-5, 3-6, 3-7, 3-8, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12, 3-13, 3-14, 3-15, 3-16, 3-17, 3-18, 3-19, 3-20, 3-21, 3-22, 3-23, 3-24, 3-25, 3-26, 3-27, 3-28, 3-29, 3-30, 3-31, 3-32, 3-33, 3-34, 3-35, 3-36, 3-37, 3-38, 3-39, 3-40, 3-41, 3-42, 3-43, 3-44, 3-45, 3-46, 3-47, 3-48, 3-49, 3-50, 3-51, 3-52, 3-53, 3-54, 3-55, 3-56, 3-57, 3-58, 3-59, 3-60, 3-61, 3-62, 3-63, 3-64, 3-65, 3-66, 3-67, 3-68, 3-69, 3-70, 3-71, 3-72, 3-73, 3-74, 3-75, 3-76, 3-77, 3-78, 3-79, 3-80, 3-81, 3-82, 3-83, 3-84, 3-85, 3-86, 3-87, 3-88, 3-89, 3-90, 3-91, 3-92, 3-93, 3-94, 3-95, 3-96, 3-97, 3-98, 3-99, 3-100)
4. 土坑 (1-1, 1-2, 1-3, 1-4, 1-5, 1-6, 1-7, 1-8, 1-9, 1-10, 1-11, 1-12, 1-13, 1-14, 1-15, 1-16, 1-17, 1-18, 1-19, 1-20, 1-21, 1-22, 1-23, 1-24, 1-25, 1-26, 1-27, 1-28, 1-29, 1-30, 1-31, 1-32, 1-33, 1-34, 1-35, 1-36, 1-37, 1-38, 1-39, 1-40, 1-41, 1-42, 1-43, 1-44, 1-45, 1-46, 1-47, 1-48, 1-49, 1-50, 1-51, 1-52, 1-53, 1-54, 1-55, 1-56, 1-57, 1-58, 1-59, 1-60, 1-61, 1-62, 1-63, 1-64, 1-65, 1-66, 1-67, 1-68, 1-69, 1-70, 1-71, 1-72, 1-73, 1-74, 1-75, 1-76, 1-77, 1-78, 1-79, 1-80, 1-81, 1-82, 1-83, 1-84, 1-85, 1-86, 1-87, 1-88, 1-89, 1-90, 1-91, 1-92, 1-93, 1-94, 1-95, 1-96, 1-97, 1-98, 1-99, 1-100)
5. 溝跡 (3-1, 3-2, 3-3, 3-4, 3-5, 3-6, 3-7, 3-8, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12, 3-13, 3-14, 3-15, 3-16, 3-17, 3-18, 3-19, 3-20, 3-21, 3-22, 3-23, 3-24, 3-25, 3-26, 3-27, 3-28, 3-29, 3-30, 3-31, 3-32, 3-33, 3-34, 3-35, 3-36, 3-37, 3-38, 3-39, 3-40, 3-41, 3-42, 3-43, 3-44, 3-45, 3-46, 3-47, 3-48, 3-49, 3-50, 3-51, 3-52, 3-53, 3-54, 3-55, 3-56, 3-57, 3-58, 3-59, 3-60, 3-61, 3-62, 3-63, 3-64, 3-65, 3-66, 3-67, 3-68, 3-69, 3-70, 3-71, 3-72, 3-73, 3-74, 3-75, 3-76, 3-77, 3-78, 3-79, 3-80, 3-81, 3-82, 3-83, 3-84, 3-85, 3-86, 3-87, 3-88, 3-89, 3-90, 3-91, 3-92, 3-93, 3-94, 3-95, 3-96, 3-97, 3-98, 3-99, 3-100)
6. 土坑 (1-1, 1-2, 1-3, 1-4, 1-5, 1-6, 1-7, 1-8, 1-9, 1-10, 1-11, 1-12, 1-13, 1-14, 1-15, 1-16, 1-17, 1-18, 1-19, 1-20, 1-21, 1-22, 1-23, 1-24, 1-25, 1-26, 1-27, 1-28, 1-29, 1-30, 1-31, 1-32, 1-33, 1-34, 1-35, 1-36, 1-37, 1-38, 1-39, 1-40, 1-41, 1-42, 1-43, 1-44, 1-45, 1-46, 1-47, 1-48, 1-49, 1-50, 1-51, 1-52, 1-53, 1-54, 1-55, 1-56, 1-57, 1-58, 1-59, 1-60, 1-61, 1-62, 1-63, 1-64, 1-65, 1-66, 1-67, 1-68, 1-69, 1-70, 1-71, 1-72, 1-73, 1-74, 1-75, 1-76, 1-77, 1-78, 1-79, 1-80, 1-81, 1-82, 1-83, 1-84, 1-85, 1-86, 1-87, 1-88, 1-89, 1-90, 1-91, 1-92, 1-93, 1-94, 1-95, 1-96, 1-97, 1-98, 1-99, 1-100)

第3章 第1節竪穴住居跡



第14図 第5号住居跡、カマド跡



れる。器内は、胴部が6～8mmと薄くなっている。外面底部周辺には、手持ちヘラケズリとハケ目が観察され、胴部には、縦方向のハケ目と、わずかにナデがみられる。内面底部には、手持ちヘラケズリと横方向へのナデ、体部には、手持ちヘラ調整が施されている。内外面共に巻き上げ痕が観察される。推定最大胴径約20cm、推定底径約9.2cm、推定孔径約8cmを測る。

◀第15図 第5号住居跡出土遺物

第3章 第1節 竪穴住居跡

第5表 第5号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	瓶	15-1		ベルト	1層	口径 測定	胴径 測定	底径 測定			手 捏	手持ちのヘラで リハヤリ調整	手持ちのヘラで リハヤリ調整	

第6号住居跡（第16図、第17図、第7図版、第6表）

〔検出状況〕 H-12～13グリット内に平面プランを確認した。調査区の中で北東端に位置する住居跡である。表土直下の第Ⅱ層上面（砂質土を含む茶褐色土）で全体を検出した。本住居跡は開田に煙道部がわずかに削平されたのみで、全体の保存状況は良好である。他の遺構との重複は認められなかった。

〔プラン・規模・方向〕 本住居は東壁の中央右寄りにカマドを有する隅丸方形を呈する住居跡である。東西3.15m、南北3.65mを測り、小規模である。方向はカマドを通る軸線はN-71°-Eを示す。

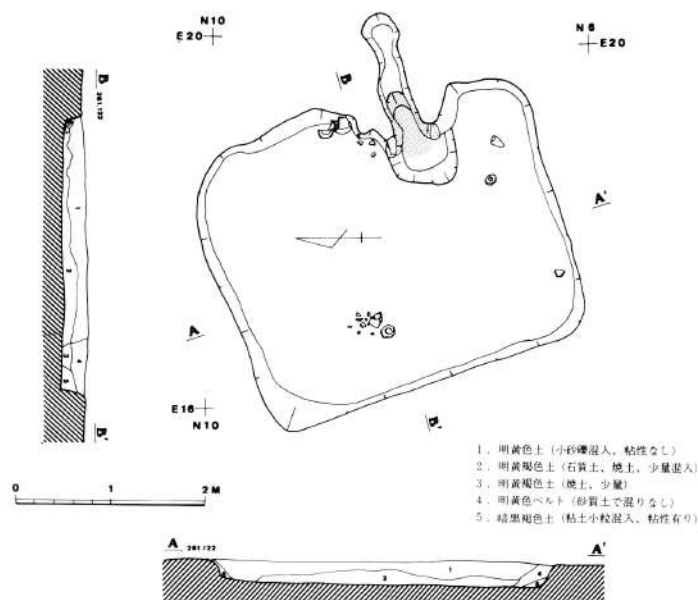
〔覆土〕 構内には6層の堆積土を確認する事が出来た。深さは約26cmあり、1層は砂礫を含んだ明黄色土、2層は小石の混った明黄褐色土、3層は焼土を含む明黄褐色土、4層は明黄色シルト、5層は壁面に分布する、粘土粒の混った暗黒褐色土であり壁の剥離土と思われる。1層2層はほぼ水平に近い堆積を確認した。

〔壁・床面〕 壁は4壁共上部はわずかに削平されているが、全体に遺存状況は良好であり各周共、急な立ち上がりをもち、高さは北壁が約20cm、東壁が約22cm、南壁、西壁が約25cmあり、床は明黄褐色シルトをベースとしている貼床である。床面はほぼ水平を保ち固くたたきしめた状態である。また柱穴と判断できるピット、周溝は確認されなかった。

〔カマド〕 東壁中央右寄りに構築されている。全長1.5mを測り、保存状況は良好である。煙道の長さは80cm、幅約20cm、深さ10cmを測り、断面はU字形を呈する。燃焼部と煙道部の境は緩やかに傾斜して立ち上がっている。袖部は粘土を用いて構築されたもので、両袖の先端部には、それぞれ石を直立させ、袖石をそなえている。右袖は40×53cm、高さ29cm、左袖は33×62cm、高さ23cm、焚口部幅45cm、燃焼部幅23cm、を測りカマド内堆積土は5層に分けられる。燃焼部に焼土が深さ13cmに集中して検出され、加熱が強く認められ長期間使用されたものと推測される。カマド内からの遺物の出土はない。

〔遺物〕 本住居跡床面から検出された遺物は、カマド左袖付近より完形品の段を持つ土師器杯が2点出土し、また北西コーナーに甕の底部と同一体の破片が数点検出されたが接合不可能であった。その他、実測可能な土師器杯、甕の口縁部、底部、須恵器甕破片が出土し、他に住居跡北側より石器が1点検出されている。

第3章 第1節竪穴住居跡



第16図 第6号住居跡

土師器 (第18図、第28図版)

杯(1) 第6号住居跡カマド左袖付近より出土した底部欠損の口縁部、約 $\frac{1}{3}$ 遺存の杯を復元実測した。器形は丸底と思われる。体部で段をなし外傾しながら口縁部に至る。外面口縁部にはヨコナデが施され、底部には手持ちヘラケズリ痕が観察される。内面は黒色処理がなされ、不定方向へのヘラミガキが施されている。器厚は1.1cmと厚く重量感がある。推定口径19.2cmを測る。

杯(2) 第6号住居跡カマド左袖付近より出土した完形品の杯を復元実測した。丸底の底部をもち、底部と体部の外面境界には段を形成し、内面には、それに対応する稜線をもつ。体部は器高の低い円錐状を呈し、ほぼ直線的に外傾し立ち上がる。外面底部には不定方向への手持ちヘラケズリ、口縁部、体部にはヨコナデ痕が観察される。内面には、横方向、および斜めのナデ調整が施され、内黒処理がなされている。口径15.9cm、器高5cmを測る。

杯(3) 第6号住居跡カマド左袖付近より出土した杯の完形品を復元実測した。底部は丸

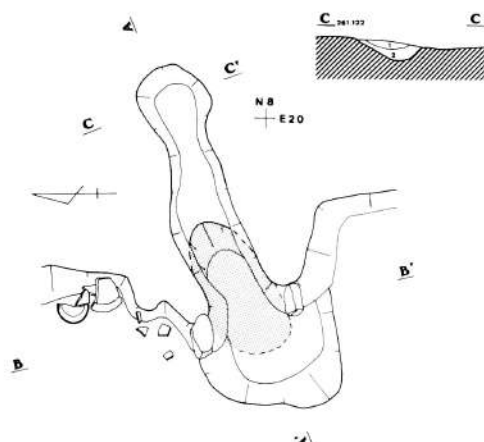
第3章 第1節竪穴住居跡

底で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁下部に幅の広い稜線をもち、口縁は広まりをわずかに弱め直線的に口縁にいたる。外面体部中ほどには、ハケ目による幅1cmの模様が描かれている。外面底部、体部下半には手持ちヘラケズリ調整、口縁部にはヨコナデが観察される。内面には黒色処理後、不定方向への細かいヘラミガキが施されている。口径17.8cm、器高7.3cmを測る。

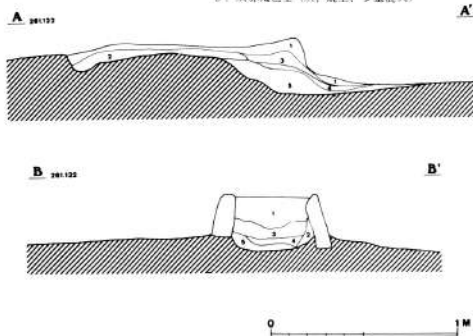
杯(4) 第6号住居跡内より出土した口縁部、約 $\frac{1}{5}$ 遺存の杯を復元実測した。底部は丸底を呈すると思われる、球形状に垂直に立ち上がり口縁部下端から外反して開く、内外面共に口縁部下端に稜線を有する。外面口縁部にヨコナデ、体部に手持ちヘラ調整が施されている。先尖状のものでつけたと思われる直線のキズが観察される。内面は荒いヘラケズリの後、黒色処理が施され、粗いヘラミガキが観察される。推定口径13cmを測る。

杯(5) 第6号住居内2層より出土した杯の底部を復元実測した。器肉が厚く、底部上端が外方に丸みを有して膨む特徴をもつ丸底杯と思われる。外面底部に手持ちヘラケズリ痕が残り、わずかにナデ痕がみられる。内面にはヘラ調整の後、多方向へのミガキが施されている。

1. 灰黄褐色土(砂粒少量混入、粘性なし)
2. 明黄色土(砂礫含む)

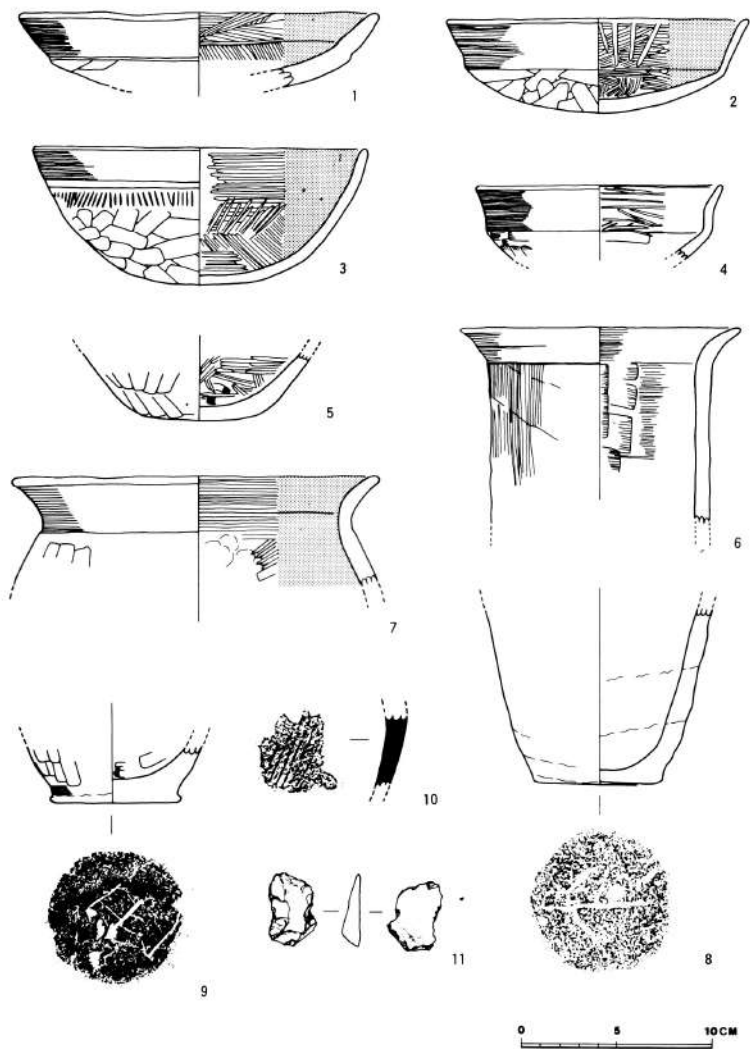


1. 灰黄褐色土(炭化物、焼土砂粒、少量混入)
2. 黄褐色土(炭化物混入)
3. 黄褐色土(炭化物、焼土多量)
4. 焼土(明褐色)
5. 灰黄褐色土(灰、焼土、多量混入)



第17図 第6号住居跡、カマド跡

第17図 第6号住居跡、カマド跡



第18図 第6号住居出土遺物

第3章 第1節 竪穴住居跡

甕(6) 第6号住居内より出土した口縁部から体部にかけて、約 $\frac{1}{6}$ 遺存の甕を図上復元実測した。他にも破片は数点出土していたが接合不可能であった。直立した胴部から緩く外反する口縁部を有する長胴甕と思われる。外面体部には縦方向の粗いハケ目調整を施した後、口縁部をヨコナデしている。内面には、口縁部にヨコナデ、体部上半に横方向へのヘラナデが施されているが、体部下半の調整痕は観察できない。推定口径14.8cm。

甕(7) 第6号住居跡内より出土した甕と思われる口縁部と体部の一部、約 $\frac{1}{6}$ 遺存を図上復元実測した。口縁部下端が直立して頸部を形成し、上半が外反する。外面頸部に、くびれを有する為、体部との境に明瞭な稜線がみられる。口縁部から頸部にかけてヨコナデ、体部には手持ちヘラケズリ痕が観察される。内面口縁部、頸部にはヨコナデ、体部には手持ちヘラケズリとヘラミガキが施されている。黒色処理がなされている。推定口径約19.4cmを測る。

甕(8) 第6号住居跡より出土した小型の甕の体部下半と底部の約 $\frac{1}{2}$ 遺存を復元実測した。体部内外面共に粘土紐巻き上げ痕が明瞭に残り、体部下半はコップ形のような器形を呈する。全体的に器肉が厚く、造りが粗いため内外面の調整痕の観察は困難であるが、わずかに不定方向へのヘラナデがみられる。外面底部には、摩滅された状態ではあるが、木葉痕が残る。底径6.8cmを測る。

第6表 第6号住居跡出土遺物一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	18-1	28-1	カマド左	袖	19 (推定)					おろコロ	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	ミガキ	内面・右段・左段
〃	〃	18-2	28-2	〃		15.9			5		〃	〃	ヘラミガキ	〃
〃	〃	18-3	28-3	〃		17.8			7.3		〃	〃	ミガキ	内面・黒底
〃	〃	18-4			覆土	13 (推定)					〃	ヨコナデ 手持ちヘラ調整	ミガキ	〃
〃	〃	18-5	28-4		2層						〃	手持ちヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラ調整	内底
〃	甕	18-6	28-5		覆土	14.8 (推定)					〃	ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ	
〃	〃	18-7	28-6	〃		19.4 (推定)					〃	ハケ目 手持ちヘラケズリ	ヨコナデ・ミガキ 手持ちヘラケズリ	内面・黒
〃	〃	18-8	28-7	〃				6.8			巻き上げ	ヘラミガキ	ヨコナデ ヘラミガキ	木葉痕
〃	〃	18-9	28-7	〃				7			おろコロ	手持ちヘラケズリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	〃
須恵器	〃	18-10	8	南側	〃						〃	叩き目	手持ちヘラケズリ	
〃	フレイク	18-11		北側	〃		体部 3.5		体部 3.9					体部

甕(9) 第6号住居跡より出土した甕の底部を復元実測した。底部器肉が厚く重量感がある。外面体部下端に手持ちヘラケズリ、一部に粗いハケ目とナデが観察される。内面には手持ちヘラケズリとナデが施されている。外面底部に木葉痕を残す。底径7cmを測る。

第3章 第1節竪穴住居跡

須恵器 (第18図)

甕 (10) 第6号住居跡南側より出土した甕の破片を拓影実測した。外面体部には叩き目が観察され、内面体部には、わずかに手持ちヘラケズリが施されている。

石器 (第18図)

フレイク (11) 第6号住居跡北側より検出されたフレイクである。両面に加工が加えられ楕円形を呈する。体厚1cm、体長3.9cm、体幅2.5cm。

第7号住居跡 (第19図、第20図、第8図版、第7表)

〔検出状況〕 E、F、14～15グリッドより検出された住居跡である。調査区内の西端に位置し、東側に、第8号、11号住居跡が方向同じく隣接して、構築されている。住居跡の南壁の一部と西壁の一部が第3号溝によって切られている。検出面は表土直下第Ⅲ層上面で全体プランを検出した。上層はわずかに削平されているが、あまり攪乱は見られず、保存状況は割合良好である。住居跡西南へ2m離れた位置に、第2号土坑が検出されている。

〔プラン・規模・方向〕 東西3.7m、南北3.4mを測る不整隅丸方形を呈する住居跡である。規模は、床面積が約12.6㎡と小型の住居跡である。方向は南壁と北壁の中心を結んだ軸線の傾きはN-10°-Wを示す。

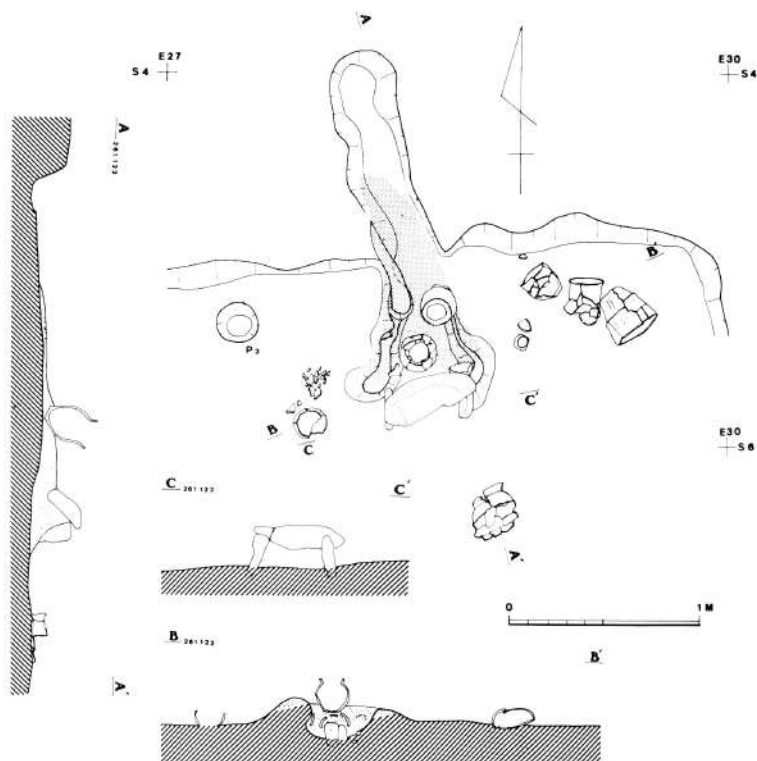
〔覆土〕 遺構内は6層の堆積土を認めた。1層は遺構の最上層で、ほぼ全域に分布し、黄黒褐色土である。2層は、主に遺構の中心部に堆積した土層で、黄褐色土である。3層、6層は将棋倒しの状態で検出されているので壁崩壊土と考えられる。4層はしまりのある粘土質の黄黒色土であり、5層はロームブロックを含む暗褐色土である。

〔壁・床面〕 平面プランの確認は少し戸惑いを感じたが、床面精査の作業を進めながら壁を確認した。壁は各周とも遺存状況は良く、直角に近い立ち上がり呈している。壁の高さは北壁が約22cm、東壁が約24cm、南壁が約22cm、西壁が約18cmを測る。床面は貼り床はなく、砂を含む軟質のローム層を直接床面とし、ほぼ水平を保っている。住居跡、床面上西寄りに巾75cm、深さ8cmの溝が切り合って検出された。

〔周溝〕 確認されなかった。

〔カマド〕 北壁中央、右寄りに構築されている。焚口部より煙道までは、床面とほぼ同じレベルをもつカマドを呈している。形式としては地下式の煙道をもったカマドと推定される。両袖は砂質シルトを積み上げて造られており、著じるしく風化された袖の構築部を確認することに困難し、少し削りすぎた趣である。カマドの焚口部分は遺存状態は良いが袖部と床面、壁際の接合部の確認に戸惑った。両袖の先端に凝灰岩が床面中に約10cm前後埋め込まれ、その上に、長さ50cm、巾22cmの板石がずり落ちた状態で遺存していた。両袖石の露出部は床面から、右袖石が17cm、左袖石が20cmを測り両石とも内側に傾いた状態で検

第3章 第1節 竪穴住居跡



第20図 第7号住居跡カマド

出されている。カマド焚口部火床から支石として河原石が2個直立し、その上に土器（第22図15）が伏せた状態で検出され、その直上に土師器甕（第22図9）が出土した。燃烧部中央から土師器の甕（第21図7）が斜位の状態で出土したが、カマドに供された土器と考えられる。燃烧部は焼土化が著しく、赤変土質が強度であり、焚口部から煙道の中程まで

第3章 第1節竪穴住居跡

多量の焼土が検出され、長期間使用した住居跡と想定できる。

〔ビット〕 床面上に柱穴と思われるものが4個検出した。 P_2 と P_4 は床面精査の段階で確認したが、 P_3 は溝の掘り下げ作業で検出する事が出来た。 P_1 は土器(第21図6)の直下であり、土器を取り上げた後確認した。 $P_1 \sim P_4$ は平面形は円形で掘り方をもたない柱穴である。柱穴の堆積土は黒黄褐色の粘土質土から成り、しまり悪く軟質であったが柱痕は認められない。柱の間隔 $P_1 \sim P_2$ は2.2m、 $P_3 \sim P_4$ は2.4m、 $P_4 \sim P_3$ は1.8mを測り、深さが P_1 は15cm、 P_2 は20cm、 P_3 は17cm、 P_4 は15cmを測る。 P_5 は浅いくぼみであるため性格は不明である。 P_6 はカマドとは隣接していないが、土器片が数個とわずかな焼土、炭化物が出土し、深さ34cmをもつビットであることから、貯蔵ビットと推測できる。

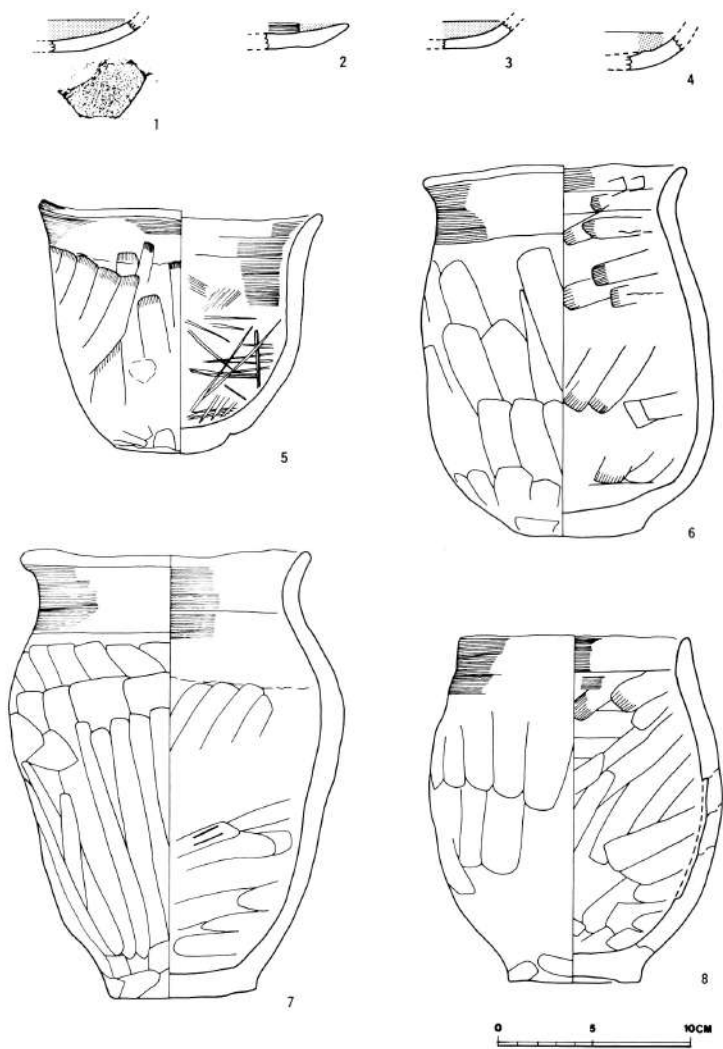
〔遺物〕 本住居跡からの遺物検出状況は、カマド周辺に集中して検出した。カマド燃焼部より斜位の状態で甕が2点、直下に高杯上部が重なって出土した他、カマド左右袖付近より甕が数点、また焚き口前方に凹石が検出された。その他にも土師器片が数点出土しているが、いずれも復元実測不可能であった。他の住居跡にくらべ遺物が多く出土し、遺跡の中では最も多くの完形品が検出されている。

土師器(第21図、第22図、第23図、第29図版、第30図版)

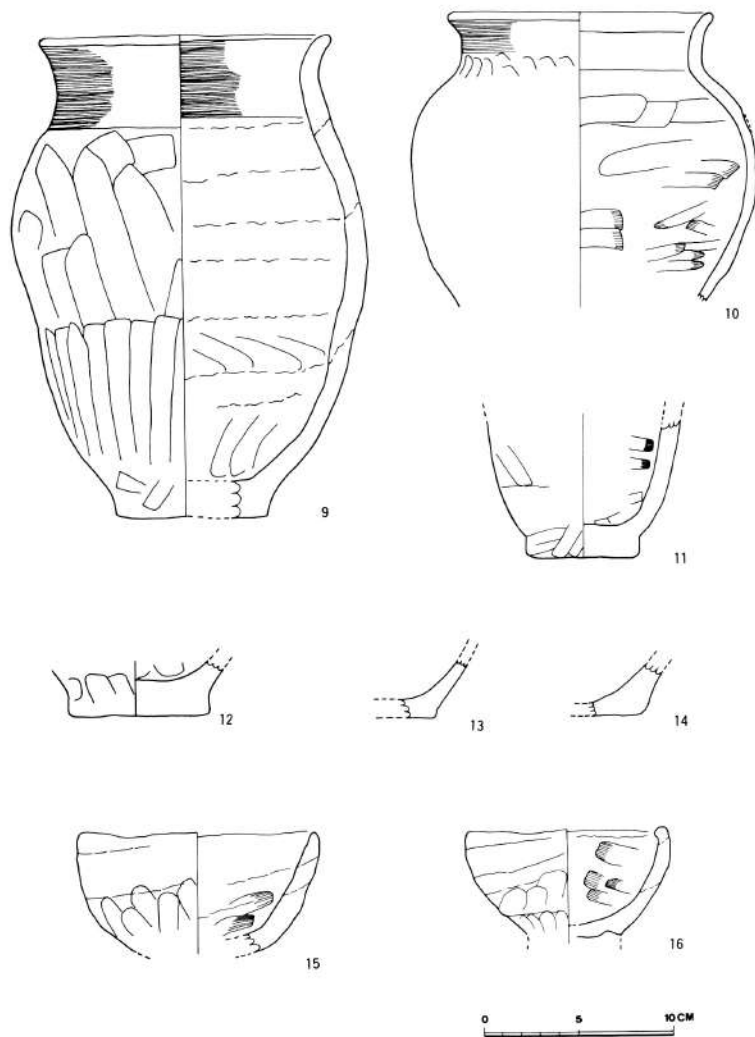
杯(1、2、3、4) 住居跡内より出土した杯の破片である。(1)は丸底と思われる杯である。外面には手持ちヘラケズリ、ヨコナデが観察される。内面に黒色処理後ミガキが施され、刻線がみられる。(2)は住居跡内南側より出土した。摩滅が著しく観察が困難であるが、外面には、かすかな段をもつ盤型の丸底の杯である。手持ちヘラケズリ痕が、わずかに残る。内面には黒色処理が施され、かすかに手持ちヘラケズリ痕、ナデ調整が観察される。(3)は平底風丸底を呈していると思われる。内外面共に、手持ちヘラケズリ後、ヘラミガキが施されている。内面には黒色処理がなされている。(4)は住居跡カマド内より出土した。内外面共に手持ちヘラケズリ、ヘラナデが観察される。内面には黒色処理が施されている。

甕(5) 住居跡内 P_3 内より出土した。口縁部がわずかに欠損しているものの、ほぼ完形の小型の甕を復元実測した。頸部に緩いくびれがあり、口縁部は外傾する。胴部はゆがみが顕著であるが、中央付近に緩い膨みがある。外面体部全体に手持ちヘラケズリが施され、口縁部にはヨコナデが施されているが、全体的に造りが粗い。内面体部、底部にはヘラミガキの線が強く残り、口縁部にはヨコナデが観察される。底部は凸型を呈し不安定である。口径15cm、器高13.5cm、底径5.8cmを測る。

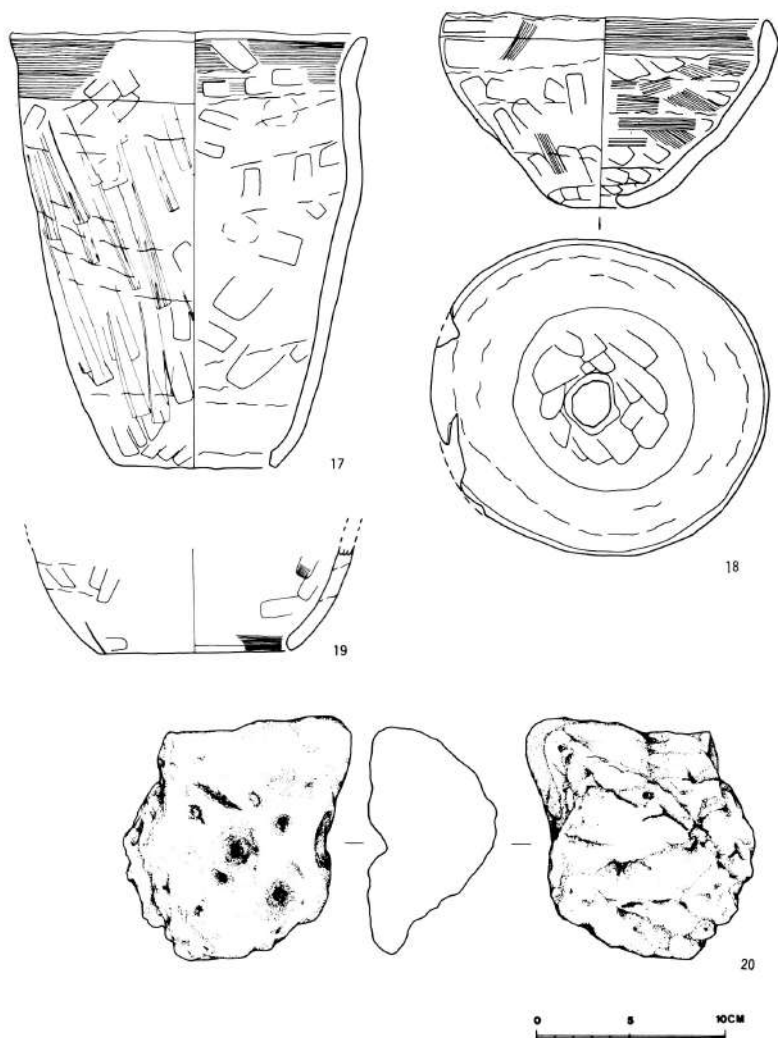
甕(6) 住居跡カマド右側北東コーナー床面上より完形で出土した甕である。頸部がくびれ、口縁部の外反する長胴形の甕であるが、胴部の膨みが底部側に偏った、下膨みの器形を呈する。器形にゆがみがあり、不安定である。外面口縁部にはヨコナデ、体部、底部には手持ち



第21图 第7号住居出土遺物



第22図 第7号住居出土遺物



第23図 第7号住居出土遺物

第3章 第1節竪穴住居跡

ヘラケズリが施されている。内面口縁部には狭いヨコナデ、体部にはヘラナデ痕が観察される。口径14cm、器高14.7cm、底径6.5cmを測る。

甕(7) 住居跡カマド焚き口内より出土した甕の完形品を実測した。口縁部が直立気みに外反し、胴部が膨む長胴甕であるが、胴部中央やや上位部で外方に膨んでいる。全体的に器肉が厚く、造りが粗い。外面口縁部にはヨコナデ、体部から底部にかけては、縦方向への手持ちヘラケズリと粗いヘラミガキが施されている。内面口縁部にはヨコナデ、体部から底部にかけてはヘラケズリが観察される。内面は胴部下半が黒色を呈し煮沸に用いられた形跡を示している。口径16.5cm、器高23.9cm、底部7.8cmを測る。

甕(8) 住居跡内カマド付近より出土した甕の約 $\frac{3}{4}$ 遺存を復元実測した。底部は平底で胴部は丸みをもって口縁まで直線的に立ち上がる。器肉は小型であるにもかかわらず1.1~1.3cmと厚く重量感があり、巻き上げ痕が観察される。外面口縁部にはヨコナデ、胴部と底部には手持ちヘラケズリが施されている。内面口縁部にはヨコナデ、胴部全体にヘラナデが観察される。口径12.1cm、器高18.5cm、底部7.1cmを測る。

甕(9) 住居跡カマド内より底部が一部欠損した状態ではあるが、ほぼ完形で出土した甕を実測した。頸部でわずかにくびれ、口縁部は外反する。胴部中央やや上位部で外方に膨んで重圧感がある。外面口縁部、頸部にはヨコナデ、胴部、底部には手持ちヘラケズリが施されている。内面口縁部、頸部にはヨコナデ、胴部には巻き上げ痕がみられ、底部には手持ちヘラケズリ痕が観察される。口径15cm、器高25.7cm、底部8cmを測る。

壺(10) 住居跡カマド南側より体部下半、底部が欠損して出土した壺を復元実測した。胴部は球形に近い張りをもっており、口縁部は多少直立して立ち上り口縁端に向かってやや外反する。摩滅が著しく器面調整の観察は困難であるが、器肉は6mmと比較的薄く、全体的に端整な作りであろうと思われる。外面口縁部にはヨコナデが施されているが、胴部には上半に、かすかに手持ちヘラケズリ痕が観察されるのみである。内面口縁部にはヨコナデ、胴部には手持ちヘラケズリがみられ、下半には輪積み痕が、わずかに観察される。口径14cm、胴径18.2cmを測る。

甕(11) 住居跡カマド付近より出土した、底部と体部下端、約 $\frac{1}{4}$ 遺存の甕を復元実測した。平底の台状の底部を有し、直線的に立ち上がり体部は内湾気みに外傾する。内外面共に手持ちヘラケズリとヘラナデが施されている。底径6cmを測る。

甕(12) 住居跡覆土一層内から出土した、器肉が厚く甕と思われる底部破片を図上復元実測した。底部は平底を呈し、広がりを持ちながら直線的に立ち上がる。外面底部には手持ちヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。推定底径7.5cmを測る。

甕(13) 住居跡カマド内より出土した甕と思われる底部破片、約 $\frac{1}{4}$ を図上復元実測した。

第3章 第1節竪穴住居跡

平底の台状の底部を有し、短く直線的に立ち上がりやや底部は突出しきみである。内外面共に手持ちヘラケズリ痕がみられる。底部には木葉痕が観察される。推定底径6.2cmを測る。

甕 (14) 住居跡内南側より出土した甕と思われる底部破片を図上復元実測した。底部は平底を呈し、広がりを持ちながら直線的に立ち上がると思われる。外面には手持ちヘラケズリがみられ、内面にはヘラナデが施されている。底部は摩滅が著しいが、かすかに木葉痕が観察される。推定底径7.8cmを測る。

高杯 (15) 住居跡内カマド焚き口の甕 (9) の直下より出土した高杯を復元実測した。高台は遺存していないが、付高台と考えられる。全体的に球形である。器内は小型ではあるが1～1.2cmと厚く重量感がある。外面口縁部にはヨコナデ、口縁部下半には手持ちヘラケズリがみられ、内面口縁部にはヨコナデ、口縁部下半にはヘラナデが施されている。また、内外面共に巻き上げ痕が観察される。口径12.7cmを測る。

高杯 (16) 住居跡内カマド焚き口の甕 (7) の直火より出土した高杯を復元実測した。高台は遺存していないが、はりつけ痕が残り、付高台である。外面には手持ちヘラケズリが施され、巻き上げ痕が明瞭に観察される。内面にはヘラナデ調整が施されている。口径10.8cm、推定高台径4.8cmを測る。

甕 (17) 住居跡内カマド右袖付近北東コーナーより出土した無底式の甕の完形品を実測した。器形にゆがみがあるが、口縁部が緩く外反し、胴部に膨みなく底部に至る。外面口縁部にはヨコナデ、胴部には多方向への手持ちヘラケズリ痕と巻き上げ痕が観察される。内面口縁部にはヨコナデ後、手持ちヘラケズリが加えられ、また胴部には多方向への手持ちヘラケズリ痕と巻き上げ痕がみられる。口径20cm、器高23.3cm、底径8.5cmを測る。

甕 (18) 住居跡カマド左袖付近より出土した単孔の小型の鉢型の甕の完形品を実測した。底部は小さな丸底痕を呈し、胴部は直線的に立ち上がり膨みをもち、体部上半に広がりを持ちながら口縁で内彎する。口縁部は内側にやや肥厚している。内外面共に積上げ痕、指圧痕が残り造りは雑で、器面に凸凹が残る。外面口縁部にはヘラナデ調整、胴部には手持ちヘラケズリがみられる。内面には全体的にハケ目調整が施され、手持ちヘラケズリ痕が観察される。口径17cm、器高10.3cm、孔径2.5cmを測る。

甕 (19) 住居跡内より出土した器内の薄い甕の体部下端、約 $\frac{1}{6}$ を復元実測した。体部は若干丸みをわびている。外面の摩滅が著しく観察は困難であるが、わずかに手持ちヘラケズリと巻き上げ痕が残る。内面下端には稜線が認められるが、手持ちヘラケズリとヘラナデが、かすかに観察されるだけである。推定底径約10.4cm、推定孔径約9.4cmを測る。

凹石 (20) 住居跡内カマド付近より出土した輝石安山岩製の凹石である。厚さ7.4cm、幅最長11.2cm、長さ15cmを測る。凹部の径2.2～2.5cmを測る。

第3章 第1節竪穴住居跡

第7表 第7号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	21-1			覆土					非ロクロ	手持ちヘラケズリ ヨコナデ	ミガキ	内黒、丸底、割線
〃	〃	21-2		南側	〃					〃	手持ちヘラケズリ ヘラナデ調整	〃	内黒、丸底、右段
〃	〃	21-3			〃					〃	手持ちヘラケズリ ミガキ	〃	内黒、平底、丸底
〃	〃	21-4		カマド内						〃	手持ちヘラケズリ ヘラナデ	〃	内黒
〃	壺	21-5	29-1	ビット		15		5.8	13.5	〃	ミガキ ヨコナデ	ミガキ	
〃	〃	21-6	29-2	カマド 右側	床面	14		6.5	14.7	〃	〃	ミガキ	
〃	〃	21-7	29-3	カマド 焚き口	〃	16.5		7.8	23.9	〃	手持ちヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	
〃	〃	21-8	29-4	カマド	〃	12.1		7.1	18.5	巻き目	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	平底
〃	〃	22-9	29-5	カマド内		15		8	25.7	〃	〃	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	
〃	壺	22-10	29-6	カマド 南側		14	18.2			輪積み	〃	〃	
〃	壺	22-11	29-8	カマド	床面			6		非ロクロ	手持ちヘラケズリ ヘラナデ	手持ちヘラケズリ	平底
〃	〃	22-12	29-7		覆土			7.5 (推定)		〃	手持ちヘラケズリ	ヘラナデ	〃
〃	〃	22-13		カマド内				6.2 (推定)		〃	〃	手持ちヘラケズリ	平底・木葉痕
〃	〃	22-14		南側	〃			7.8 (推定)		〃	〃	ヘラナデ	〃
〃	高杯	22-15	30-1	カマド 焚き口		12.7				巻き上げ	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	付高台
〃	〃	22-16	30-2		〃	10.8				〃	手持ちヘラケズリ	ヘラナデ調整	付高台 (推定) 4.8
〃	瓶	23-17	30-3	カマド 右側		20		8.5	23.3	〃	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	無底式
〃	〃	23-18	30-4	カマド 左側		17			10.3	輪積み 指庄	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ	単孔、孔径 2.5
〃	〃	23-19	30-5		覆土					巻き上げ	手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ	
石製品	凹石	23-20	30-6	カマド	床面			長さ15		覆土 安山岩			厚さ 周部径 2.2-2.5

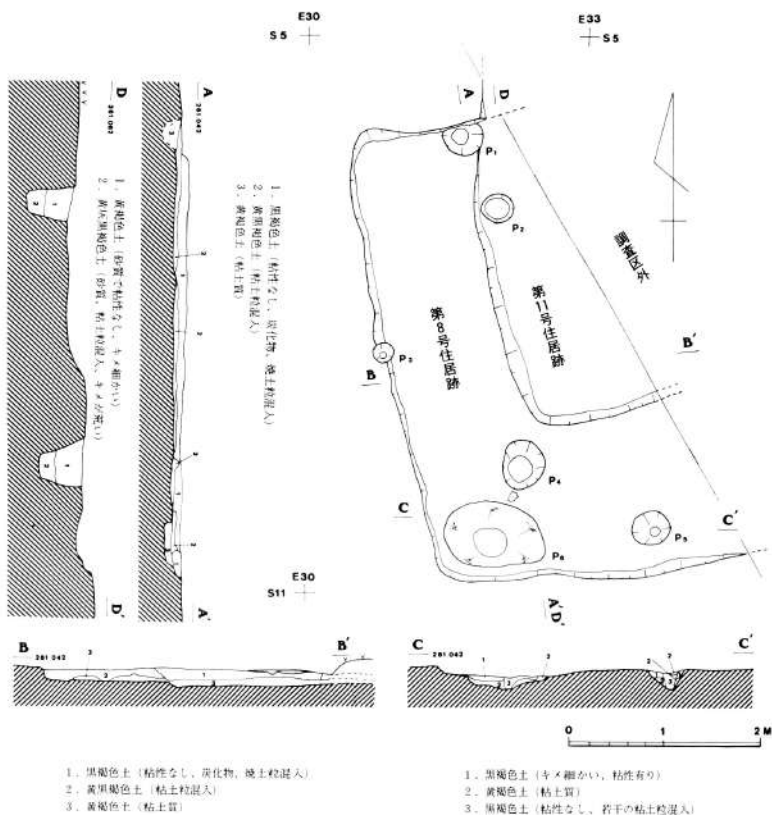
第8号住居跡（第24図、第9図版、第8表）

〔検出状況〕 E-15グリッドに位置し、遺構の東側半分は調査区外のため不明である。検出面は第3層（黒褐色土層）上面である。西壁東寄り方向同じくして、11号住居跡が切り合って検出された。

〔プラン・規模・方向〕 遺構の東側半分と北側は調査区外のため不明であるが、西壁の長さが49mを測り、隅丸方形のプランを呈するものと思われる。西、南壁の中点を通した軸線はN-13°-Wを向く。部分的な調査のためカマドは検出されなかった。

〔覆土〕 大別して3層に分けられる自然堆積である。色調は1層は黒褐色土で粘性のあるキメの細かい層である。2層は黄黒褐色土で粘土粒を含み、固くしまっている。3層は1層の直下の層で、砂質黄色粘土を含む黄褐色土を呈している。1層、3層は11号住居跡の堆積土とも考えられる。床面中央に焼土、炭化物が検出される。

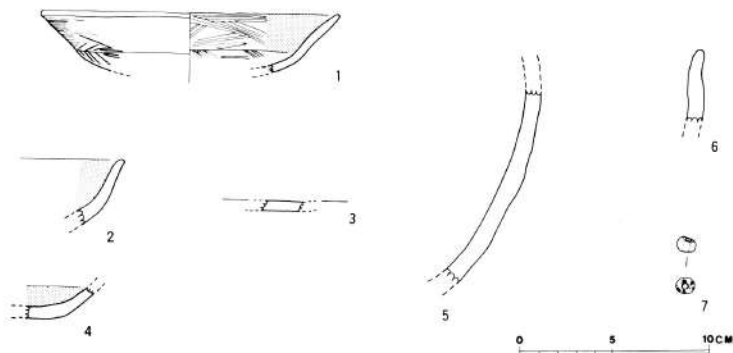
〔壁・床面〕 壁は上部が削平され不明であるが、第2層（砂質を含む茶褐色土）を掘り込



第24図 第8、11号住居跡

んで作られている。壁高は検出面から5～10cmの深さである。立ち上りは直立的である。床面は住居跡内全面に黄褐色土約10cmを敷き、たたきしめた貼き床である。床面上には周溝は確認されなかった。

〔ピット〕 6個のピットを検出した。P₂、P₄は柱痕は検出されないが断面観察と位置的にみて、支柱穴と考えられる。間隔は約2.8m、深さ約4.5cmを測る。P₃は壁柱穴と思われ、深さ12cmを測る。P₅は柱と思われる痕跡がみられるところから、柱穴と考えられる。P₆は土師器片が出土している、貯蔵穴とも考えられるが、深さが15cmと浅い。



第25図 第8号住居出土遺物

〔遺物〕 遺物は、中央セクションベルト内の第2層より硬玉製小玉が出土している。また床面直上および焼土内より丸底と思う土師器片が2点、甕の破片が数点出土している。ほかにロクロ土師器破片が1点出土しているが、覆土内からのもので、本住居跡に伴うものか否かは不明である。

土師器（第25図、第30図版）

杯（1） 住居跡内床面より出土した口縁部、約 $\frac{1}{5}$ 遺存の杯を復元実測した。丸底と思われる。体部よりなだらかに外反気みの口縁部に至る。外面口縁部はヨコナデ、体部にヘラ状工具によってできた荒ケズリ痕が観察できる。内面は黒色処理の後、多方向へのヘラミガキが全体的に施されている。内外面共に底部との境界に弱い稜線がみられる。推定口径16cmを測る。

杯（2、3、4） 住居跡内より出土した杯の破片を実測した。（2）は体部から緩やかな広がりをもち口縁部に至る。内外面共に口縁部にはヨコナデ、体部にはナデ調整後ヘラミガキが施されている。内外面共に黒色処理が施されている。（3）はわずかな底部の破片ではあるが、底部切り離しは回転ヘラ切りによるものと考えられる。外面には手持ちヘラ調整が施されている。内面は摩滅が著しく観察が困難である。（4）は平底風丸底の杯の破片と思われる。外面には手持ちヘラケズリ、ヘラナデ調整がみられ、内面にはヘラミガキが観察される。内黒処理が施されている。

甕（5、6） 住居跡内床直上より出土した甕の破片を実測した。（5）は甕の体部の一部と思われる。外面凸凹は積み上げ痕と思われ、手持ちヘラケズリが観察される。内面にはヘラナ

第3章 第1節竪穴住居跡

デが施されている。(6)は甕の口縁部である。外面にはヘラミガキ、内面にはヘラナデ後ヨコナデ調整が施されている。

丸玉(7) 住居跡南北ベルト内2層より出土した、めのうの丸玉である。全体に光沢をもち両端部は、ほぼ平坦な球形をなし貫通孔をもつ。径9.2mm、孔径2.8mmを測る。

第8表 第8号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	25-1			床面 ¹⁶ (推定)						非ロクロ	ヨコナデ・ヘラミガキ	ミガキ	内黒、丸底
〃	〃	25-2			覆土						〃	ヨコナデ・ヘラミガキ	ヨコナデ・ヘラミガキ	内外黒
〃	〃	25-3			〃						ロクロ	同・ヘラミガキ調整		
〃	〃	25-4			〃						非ロクロ	手持ちヘラミガキ	ミガキ	内黒、平底
〃	甕	25-5	30-7		床直						輪積み	手持ちヘラミガキ	ヘラナデ	
〃	〃	25-6			〃						非ロクロ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
丸玉		25-7	30-8	南北ベルト内	2層	口径 2.8mm			9.2mm		硬玉	ロクロ		貫通孔

第11号住居跡(第24図、第9図版)

〔検出状況〕 E-15グリッドに位置する。本住居跡は8号住居跡調査時に床面(第3層)から検出されたもので、8号住居跡と重複関係にある。

〔プラン・規模・方向〕 プランは西壁(約3.5m)と南壁の一部(約1.3m)が検出されたが、その他は調査区外に入るため全体を検出する事ができなかった。

〔覆土〕 住居跡の中心に黒褐色土がほぼ水平に堆積している。一部に多量の焼土、炭化物を含む箇所が観察される。

〔壁・床面〕 8号住居跡との重複によって不明確で西壁と南壁の一部が残っていたにすぎずははっきりと確認することができないが、8号住居跡を11号住居跡が切っていることが断面観察によって推定される。壁の立ち上り角度はほぼ直角で、西壁が8cm、南壁が15cmを測る。床面は不明な点が多いが、貼り床状の施設を行っており、暗褐色土を叩いて構築されたものと思われる。

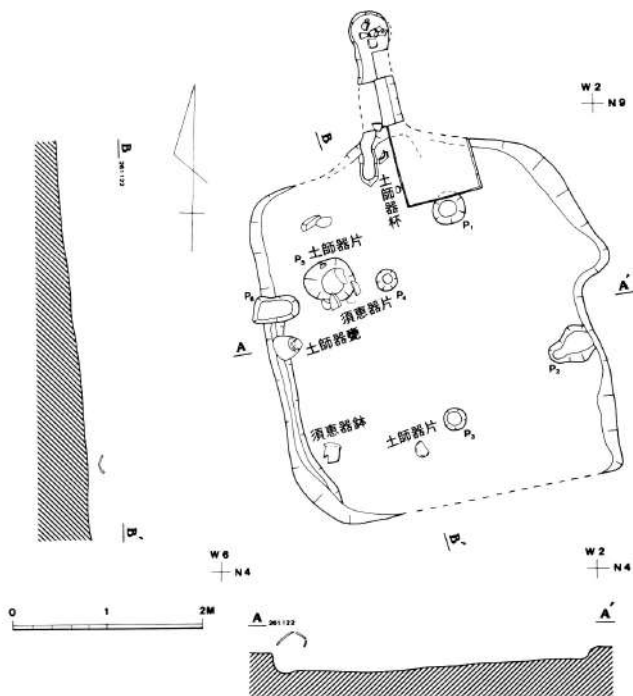
〔カマド〕 確認されない。

〔ピット〕 本住居跡内からは1個(P₂)のピットが検出されたが、8号住居跡との重複により、本遺構に伴うものかは不明である。

第9号住居跡(第26図、第27図、第10図版、第9表)

〔検出状況〕 G-H-9グリッド内に検出された住居跡である。重機による表土除去後、楕円形状に黒ずんだ部分(9.5m×16.3m)を確認し、注意深く掘り下げ作業を行った。作業途中に、焼土、炭化物が露出し、これが遺構検出の契機となった。そこで攪乱部分の焼

第3章 第1節竪穴住居跡



第26図 第9号住居跡

土を手がかりに第2層を掘り下げた結果、本遺跡の付近の水田からの浸水が非常に激しく、湧水のように水嵩が増し、水上ポンプを使用し、排水作業を行いながら、やむを得ず、緊急調査をする事とした。カマドは保存が良好であった。カマドが確認された段階では、斜面上部から流れ込んだ堆積土（暗みを帯びた黒色土）によって分かりにくく、プラン線引きは非常に難しく、掘り方の部分まで掘りすぎた趣がある。

〔プラン・規模・方向〕 プラン確認面の土層が非常に不明瞭であったため、床面はかなり削平したが、東西が約3.5m、南北が約3.6mを測る隅丸方形を呈すると思われる。又住居跡の西側の位置に第2号溝が南北にのびて検出されている。本住居跡の規模は小型ではあるが当遺跡の中では5号住居跡とほぼ同じ規模と思われる。方向は、カマドを通る住居跡

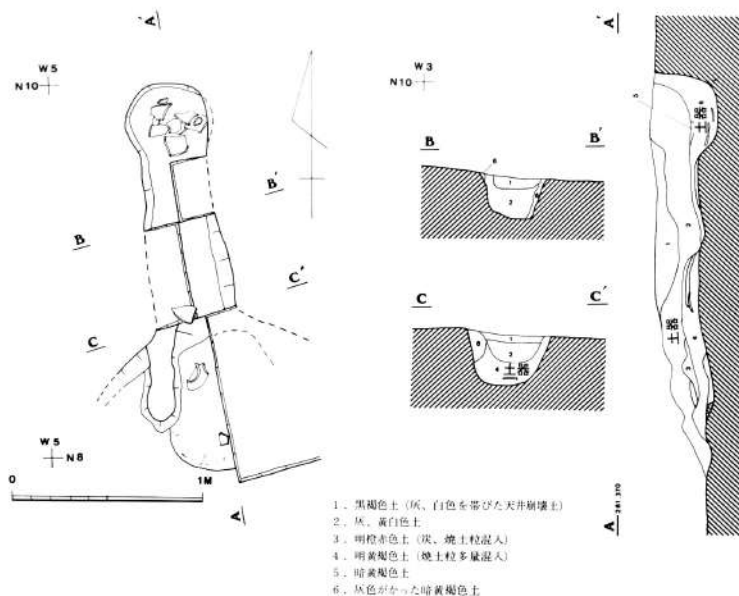
第3章 第1節竪穴住居跡

の中心線はN-7°-Wである。

〔覆土〕 河川の氾濫原によって削られ、全体に軟かい砂質の含む黒色土が綿状に堆積され、どの面が床面か確認に戸惑い、床面までの覆土をはっきり記録することができなかった。

〔壁・床面〕 壁はほとんど河川の氾濫によって削平され、遺存状態が悪く、確認することができなかった。床面は厚さ約10cm前後の粘性の暗黄褐色土にロームブロックを含む層を確認しただけである。この層は掘り方内の埋土と推定され、その直上に遺物が数点出土した。

〔ピット〕 床面下の掘り方内より、5個のピットが検出されたが、P₂は撈乱ピットである。P₃は径50cm、深さ18cmを測り貯蔵ピットとも考えられる。その他はいずれも深さ10cm前後と浅く、柱穴かは不明である。柱穴の覆土はいずれも粘性があり、黒褐色土を混入した砂質の暗黄黒褐色土である。



第27図 第9号住居カマド

第3章 第1節竪穴住居跡

〔周溝〕 全周は確認されなかったが、西壁際に周溝の一部と思われる溝を確認した。巾25cm、深さ5cmを測る。

〔カマド〕 床面に対してカマドは比較的良好な状態で検出されたが、浸水が激しいため、断ち割り緊急調査を行ったため、カマド全体の平面図と完全な調査を記録し、把握することができなかった。カマドの位置は北壁ほぼ中央に構築されている。全長1.85m、最大幅85cm、煙道の長さは1.25m、幅25cm、深さ23cmを測り、断面形はU字形を呈する。煙道末端ビット内より復元可能な甕の破片（第29図15）と高台付杯片（第28図8）が1点と杯片（第28図6）、須恵器の甕の頸部の破片（第28図2）が出土した。焼土確認面直下の煙出し上部に土師器の甕（第29図13）が出土している。焚口部より高台付杯（第28図7）、燃焼部奥壁より土師器の甕の底部（第29図14）が出土している。カマドの煙道壁は煙出しビット付近まで加熱により焼土化している。燃焼部は約55cm×75cmの範囲で赤味をおびている。左袖は砂質を多量に含む軟かい土質で構築されており、もろく原形を確認することが困難であった。本遺跡のどの住居跡よりカマド全体が加熱度が著しく赤味を帯びているため、長期間使用したものと推定される。

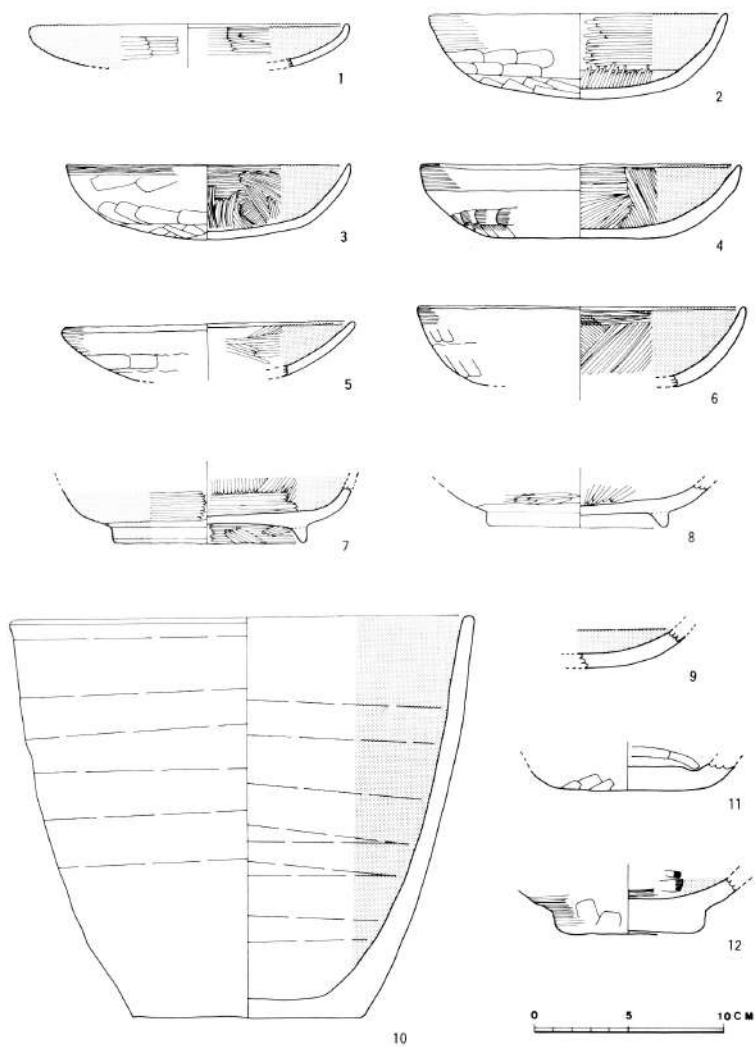
〔遺物〕 本住居跡からは、覆土2層より須恵器片（第28図1）が1点、西壁際床直上に土師器の鉢（第28図10）が横位の状態で出土している。Bのビット内より土師器の破片が数点、須恵器の破片が1点と小石が出土している。煙道ビット直上（53cm上位）より土師器の甕（第29図13）が出土しているが、煙出しの煙筒として使用したものと推定できる。その他の遺物は床面とカマド内から出土したものである。

土師器（第28図、第29図、第30図版、第31図版）

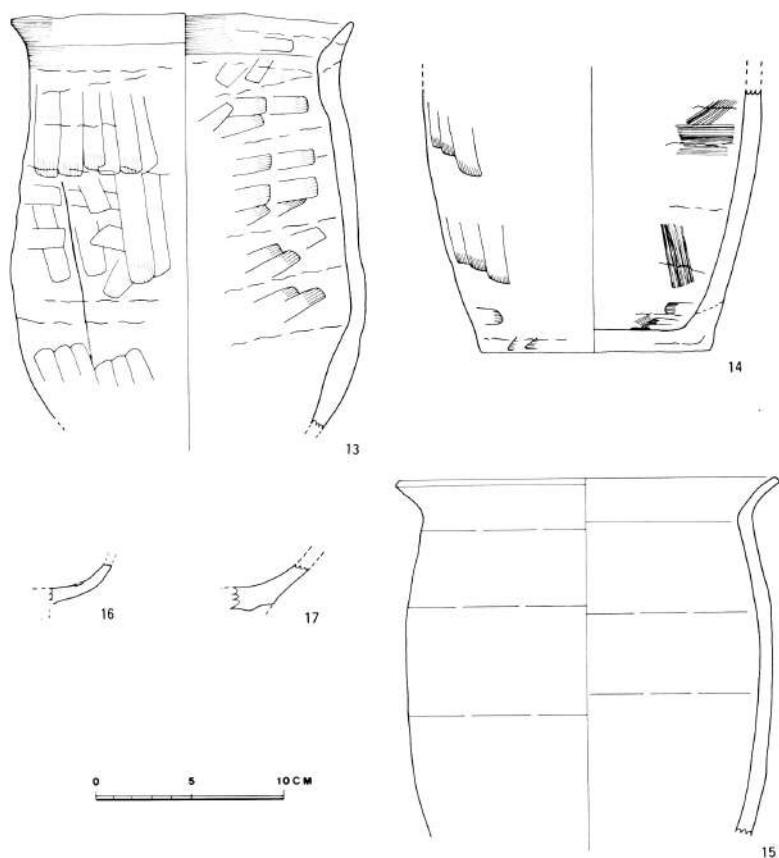
杯（1） 住居跡内カマド先端部より出土した器高の低い皿状を呈すると思われる杯の口縁部、約 $\frac{1}{10}$ の破片を図上復元した。外面には手持ちヘラ調整後できたと思われる横方向へのヘラミガキがみられる。内面には横方向のミガキが施されている。内外面共に黒色処理が施されている。推定口径17cmを測る。

杯（2） 住居跡内床面より出土した杯で、約 $\frac{2}{3}$ 遺存を復元実測した。底部は丸底で、丸みをもって内彎ぎみに口縁部に至る。体部下半に、かすかな稜線をもつ。外面は底部、体部共に手持ちヘラケズリが施され、口縁部にはヨコナデが観察される。内面は底部、体部共に一方のヘラミガキ調整がなされている。内黒処理が施されている。口径15.8cm、器高4.5cmを測る。

杯（3） 住居跡内床面より出土した杯の完形品である。器面の摩滅が著しく詳細な観察はできないが、底部は丸底風平底を呈すると思われる。成形にロクロを用いた形跡は認められない。外面には手持ちヘラケズリ痕、口縁部にはヨコナデがわずかに観察される。内面には全体的に放射状のヘラミガキが加えられている。内黒処理が施されている。口径15cm、器高4.1cmを測る。



第28図 第9号住居出土遺物



第29図 第9号住居出土遺物

杯(4) 住居跡内2層より出土した、約 $\frac{1}{2}$ 遺存の杯を復元実測した。底部は平底風の丸底からゆるやかに丸みをもって立ち上がり内彎しながら口縁部に至る。外面口縁部にはヨコナデ、底部には手持ちヘラ調整が施され、口縁部下端には軽い陵線がみられる。内面は黒色処理の後、

第3章 第1節竪穴住居跡

全体的に多方向への丁寧なミガキが施されている。推定口径17cm、推定底径 9.3cmを測る。

杯(5) 住居跡カマド内より出土した口縁部、約 $\frac{1}{8}$ 遺存の杯を復元実測した。外面口縁部にはヨコナデ、体部には手持ちヘラ調整が施され、巻き上げ痕が観察される。内面には黒色処理の後、多方向へのミガキが施されている。推定口径15.6cmを測る。

杯(6) 住居跡煙道末端ピット内より出土した底部欠損の、約 $\frac{1}{3}$ を復元実測した。底部は平底風の丸底を呈すると思われ、体部は内彎しながら口縁部に至る。外面口縁部には若干のヨコナデ、体部全体に手持ちヘラケズリ後、ヘラ調整が観察される。内面には黒色処理が施され、多方向へのヘラミガキが観察される。口径17.4cmを測る。

高台杯(7) 住居跡カマド煙道焚き口内より出土した高台杯の底部のみ、約 $\frac{1}{2}$ 遺存を復元実測した。高台は高さ9mmの付高台である。底部中央内面がわずかに窪み、体部へ向けてゆるやかに立ち上がる。高台貼付後、脚部にはナデ調整が観察される。内外面共に黒色処理がなされ、丁寧なヘラミガキが施されている。底径約10.2cmを測る。

高台杯(8) 住居跡煙道末端ピット内より出土した高台部のみ $\frac{1}{4}$ 遺存の高台杯を復元実測した。高台は高さ8mmの付高台である。全体的に平たく盤に近い器形を有する。高台貼付後ヘラミガキが施されている。内外面共に丁寧なヘラミガキが施され、色調は内外面共に白褐色を呈する。焼成は、きわめて硬く須恵器のような観を呈し特にすぐれている。高台底径 9.5cmを測る。

杯(9) 住居跡内カマド焚き口付近より出土した杯の破片を図上実測した。外面上端の一部に、わずかな稜線がみられる。内面は黒色処理が施されている。

鉢(10) 住居跡内西壁際にふせた状態で出土した口縁部から体部上半にかけて約 $\frac{1}{2}$ が欠損した鉢を復元実測した。底部は平底を呈し体部下半は緩かに立ち上がり、直線的に口縁部に至っている。器内は1～1.5cmと厚く重量感がある。摩滅が著しく観察は困難ではあるがナデ調整の後、ロクロ成形されたものである。内面には黒色処理が施されている。口径 2.8cm、底部12.2cm、高さ21.2cmを測る。

甕(11) 住居跡内カマド付近より出土した甕の底部破片を図上実測した。内外面共摩滅が著しく外面には、かすかに手持ちヘラケズリ痕が残るだけである。内面には底部を一巡りする明瞭な手持ちヘラケズリ痕が観察され、器面に若干の盛り上がりを見せる。底径 7.5cmを測る。

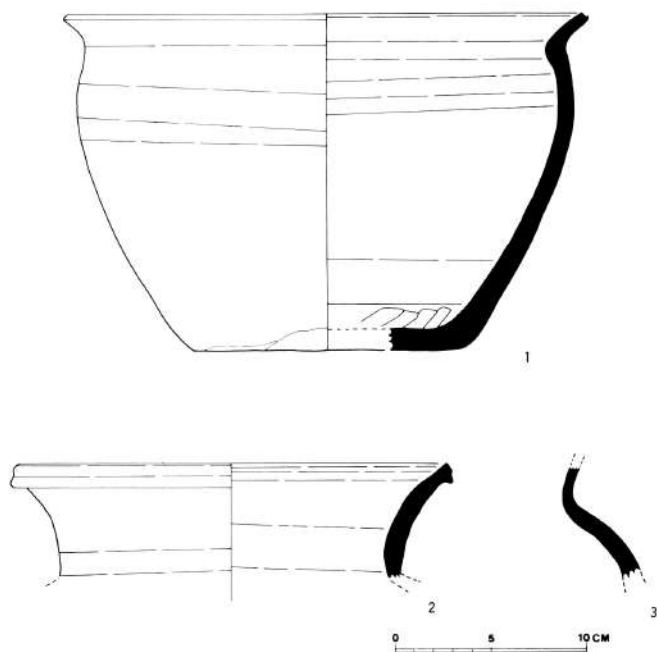
甕(12) 住居跡内より出土した甕の底部台座の破片を図上実測した。底部は平底で比較的高さのある台状を呈する。外面には手持ちヘラケズリの後、ナデ調整が施されている。内面にはヘラナデ後、黒色処理が施されたと思われる。底径8cmを測る。

甕(13) 住居跡内煙出し部上層より出土した口縁部から体部にかけ遺存の甕を復元実測した。頸部がくびれ、口縁部の外反する長胴形の甕であるが、胴部の膨みが底部側に偏った、下

第3章 第1節 竪穴住居跡

膨みの器形を呈する。内外面共に巻き上げ痕が明瞭に残り、全体的に造りは粗い。外面口縁部にはヨコナデ、胴部には縦方向へのヘラナデが施されている。内面口縁部にはヨコナデが、かすかに見られ胴部には横方向へのヘラナデが観察される。口径18cm、器高23cm、胴部最大径19cm、底部14.5cmを測る。

甕(14) 住居跡内カマド燃焼部奥壁より出土した甕の底部から体部にかけて約 $\frac{1}{3}$ 遺存を復元実測した。底部より体部にかけて直線的に立ち上り、体部でやや丸みをおびてくる。全体的にはコップ形のような器形を呈すると思われる。外面全体に縦方向への手持ちヘラケズリの後、ヘラナデの調整が施され、底部下端には横方向の手持ちヘラケズリ痕がみられる。内面には多方向へのナデが施され、底部にはヘラナデが観察される。底径12.3cmを測る。



第30図 第9号住居出土遺物

第3章 第1節竪穴住居跡

甕 (15) 住居跡カマド煙道末端ビット内より出土した体部下半、底部の欠損した甕を復元実測した。ロクロ使用による成形であるが、ロクロ回転方向は不明である。体部は、わずかに膨みもち、内轡しながら頸部に至り、「く」の字状に開く口縁部を有する。ロクロ成形後ナデ調整を施している。口径20.3cm、胴径11.8cmを測る。

高杯 (16) 住居跡内床直上の2層より出土した高杯付部の破片を図上実測した。わずかな破片であるため器形の推定は不可能である。外面には手持ちヘラケズリ、ヘラナデ調整が観察されるが、内面は摩滅が著しく観察は困難である。

高杯 (17) 住居跡内確認面より出土した高杯付部の破片を図上実測した。わずかな破片のため器形の推定は困難である。内外面共にヘラナデ調整が施されている。内面にはヘラ痕がみられる。貼付部分の接合痕が明瞭に観察される。

第9表 第9号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口径	胴径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他	
土師器	杯	28-1	31-1	カマド煙道	17 (推定)						非ロクロ	手持ちヘラ調整 ミガキ	ミガキ	内外面	
ク	ク	28-2	31-2	床面	15.8				4.5		ク	手持ちヘラケズリ ミガキ	ク	内面、丸底	
ク	ク	28-3	31-3	ク	15				4.1		ク	ク	ク	丸底、丸底、丸底	
ク	ク	28-4	31-4	2層	17 (推定)			9.3 (推定)			ク	ヨコナデ 手持ちヘラ調整	ク	内面、平底、丸底	
ク	ク	28-5		カマド内	15.8 (推定)						巻き上げ	ク	ク	内面	
ク	ク	28-6	31-6	カマド内	17.4						非ロクロ	ヨコナデ、手持ち ヘラケズリ	ク	内面、平底、丸底	
ク	高台杯	28-7		カマド内 確認面				10.2			付着石 土器	ク	ヘラナデ	ク	付着石、内外面
ク	ク	28-8	31-5	カマド内				9.5			非ロクロ	ミガキ	ク	ク	
ク	杯	28-9		カマド内										内面	
ク	鉢	28-10	31-7	内面	21.8			12.2	21.2		ロクロ	ヘラナデ	ヘラナデ	内面、平底	
ク	甕	28-11		カマド内				7.5			非ロクロ	手持ちヘラケズリ	手持ちヘラケズリ		
ク	ク	28-12	31-8	床面				8			ク	手持ちヘラケズリ ミガキ	ヘラナデ	内面、平底	
ク	ク	29-13	32-1	確認面	18	19	14.5	23			巻き上げ	ヨコナデ ヘラナデ	ヨコナデ ヘラナデ		
ク	ク	29-14	32-2	カマド内 確認面				12.3			非ロクロ	手持ちヘラケズリ ミガキ	ヘラナデ		
ク	ク	29-15	32-3	カマド内 確認面	20.3	11.8					ロクロ	ヘラナデ	ク		
ク	高杯	29-16		床面							非ロクロ	手持ちヘラケズリ ミガキ	ヘラナデ		
ク	ク	29-17		確認面							ク	ヘラナデ	ヘラナデ		
須恵器	甕	30-1	32-4	東西内床直上2層	26.7				18		ロクロ	手持ちヘラケズリ ミガキ	手持ちヘラケズリ ミガキ	平底、指細口	
ク	ク	30-2	32-5	カマド内 確認面	23.5						ク	ヨコナデ	ヨコナデ		
ク	壺	30-3		カマド内											

須恵器 (第30図、第31図版)

甕 (18) 住居跡東西ベルト内2層より出土した全体の約 $\frac{1}{3}$ 遺存の甕を復元実測した。ロクロ使用による成形で、底部は平底であり、体部は丸みをもって頸部に至り、「く」の字状に開く口縁部を有する。口縁部はロクロ使用特有の稜をもっている。器厚は底部付近はやや厚いが、口縁部にかけて薄くなってゆく。外面体部下端と内面底部には手持ちヘラケズリ調整が数本みられ、ヘラナデもわずかに観察される。外面体部には指頭圧痕がみられる。内外面共に丁寧な

第3章 第1節竪穴住居跡

ロクロナデが施されている。口径26.7cm、器高18cmを測る。

甕 (19) 住居跡カマド煙道先ピット内より出土した頸部から口縁部、約 $\frac{4}{5}$ 遺存の甕を復元実測した。ロクロナデ使用による成形で、体部と頸部との境は「く」の字状を呈し、外反しながら立ち上がり口唇部に至る。口唇部は内傾気みに面取りされ、中央に沈線状に段が形成される。内外面共に丁寧な水挽きによるヨコナデが施されている。口径23.5cmを測る。

壺 (20) 住居跡P₃内より出土した肩部から頸部にかけての壺の破片を図上実測した。白色土を使用し、焼成が甘く摩滅が著しいため観察は困難である。胴部上半は球形に近い丸みをもって立ち上がり頸部に至りくびれを呈するものと思われる。色調は灰白色を呈し、胎土は密である。

第10号住居跡 (第31図、第11図版、第10表)

〔検出状況〕 B-10-11グリッドより検出されたが、発掘区南端に当り、西東から蛇行しながら北流する隈戸川によって大部分が破壊され、住居跡北側カマドが遺存するのみであった。検出面は堆積している黒色土を切り込んで構築されている。

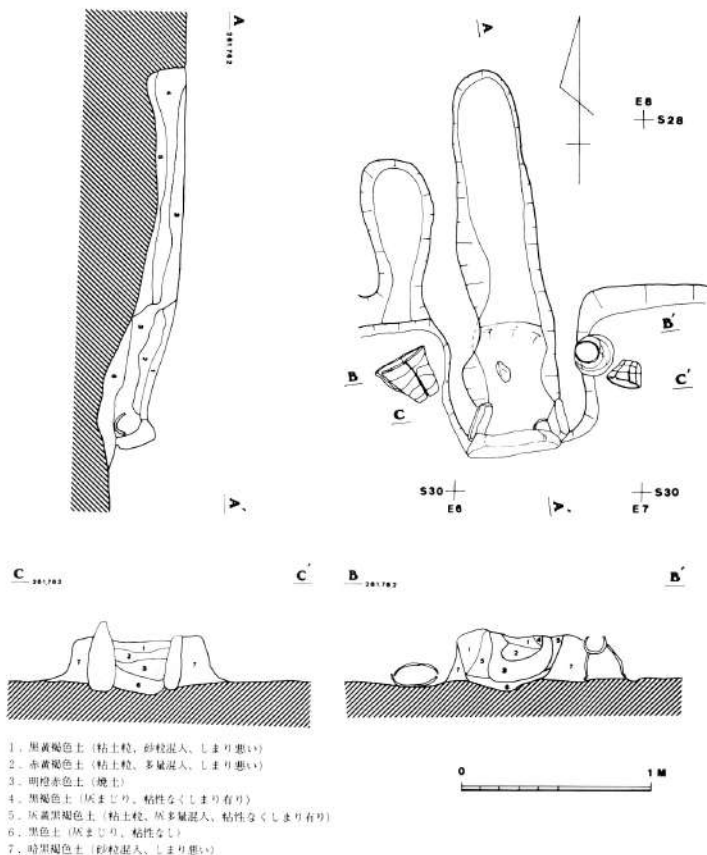
〔プラン・規模・方向〕 本住居跡のプランは、三辺が削られて現存せず、北側の一部が遺存するのみで、プラン規模を確認することは不可能である。方向はカマドを通る軸線はN-10°-Wを示す。

〔覆土〕 覆土の厚さは、カマド左袖付近から北壁にかけて約25cmを測り、3層に堆積され、中央に近づくにしたがって、やや低下する状態で堆積されている。各層とも暗黒色土～暗黄黒褐色土でやや軟質である。

〔壁・床面〕 北壁は直角に立ち上がり、壁の深さは17cm前後である。焚口部分は黄褐色粘土の盛り上がりが見られるが、あまり叩きしめられてはいない。床面は中央にかけてやや低くなり、少し凸凹していてしまりが無い。カマド煙道西側に煙道と思われる遺構を検出したが、床面にはそれに対応するような、焼土やカマド袖の痕跡は認められない。

〔ピット〕 カマド左袖側に径25cm、深さ23cmを測る柱穴と思われるピットが1個検出された。覆土内からの遺物は出土されない。

〔カマド〕 全体のプランは不明であるが、カマドは北壁中央に構築されたものと思われる。煙道部上層が水田造成により削平されたものの焚口、燃烧部、左右両袖共比較的良好に遺存していた。両袖共地山と同質の黒褐色土で作られており、もろくあまり焼けていない。北壁から袖の先端までの長さは右袖で75cm、左袖で65cmである。また両袖の先端は袖石が埋め込まれていた。左袖石が凝灰岩石で右袖石が安山岩の河原石である。両袖石の床面からの露出部は、右袖石で幅20cm、高さ30cm、左袖石で幅23cm、高さ35cmを測り、その間に、



第31図 第10号住居跡カマド

焚口手前にずり落ちた状態に、凝灰岩石で長さ49cm、幅22cm、厚さ10cm前後を測る板石が検出された。この板石は焚口部天井を構成したものと思われる。板石の直下に土師器の杯（第32図1）が出土された。袖石の床面での内法は22cm、上部での内法は32cmを測りこの基底幅がカマドの焚口幅と推定される。燃烧部はいくらか窪んだ底面を有し、中央に安山岩の河原石（長径12cm、短径7cm、厚さ11cm）が支脚石として埋めこまれている。煙道部底面は南面が18°の勾配の上向きで、緩やかである。煙道部、焼燃部堆積土は明瞭に観察することができた。燃烧部に焼土が集中しているところから、本住居は長期間使用されたことが解る。

第3章 第1節 竪穴住居跡

〔遺物〕 遺物は堆積土からの出土はほとんどなく、カマド部分の床面上から、土師器が5点出土している。左袖付近から瓶（第32図4）がつぶれた状態で出土し、右袖付近から瓶（第32図5）と甕（第32図3）が伏せた状態に、その上に小型の鉢形の甕（第32図2）が横倒した状態で検出された。又焚口部の板石の直下から杯（第32図1）が出土している。本住居から出土した遺物は、1点が底部欠損がみられる他はほとんど完形であった。

土師器（第32図、第33図版）

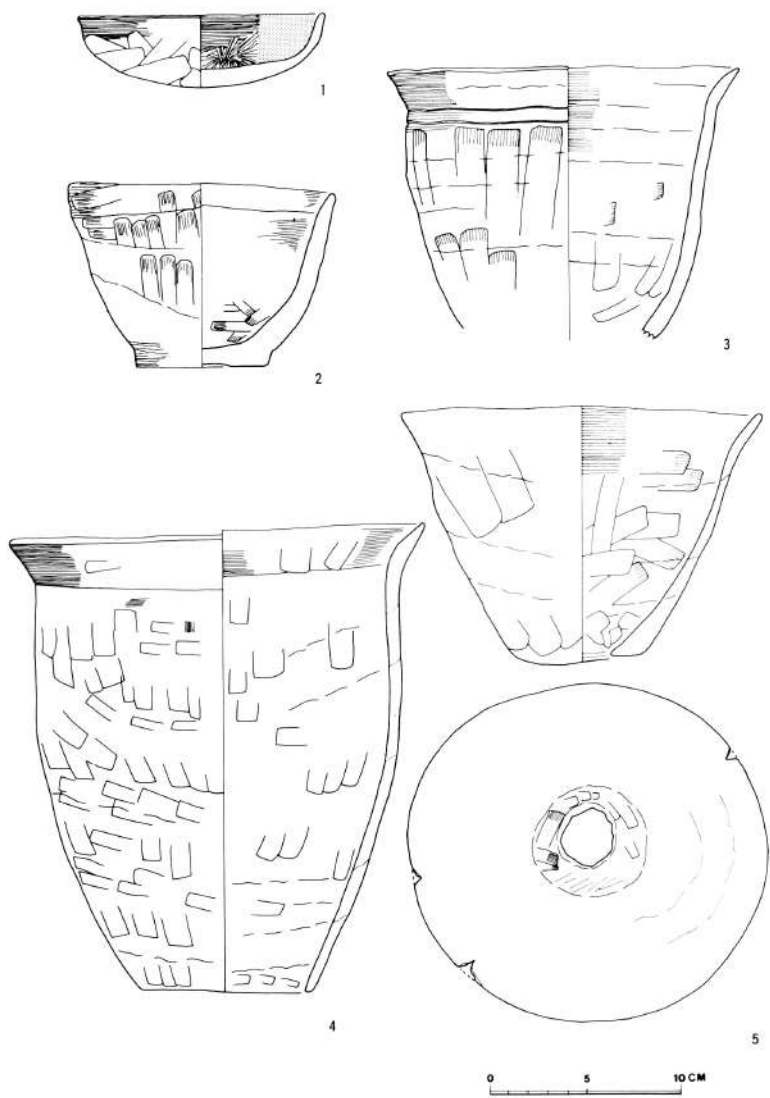
杯（1） 住居跡カマド内焚き口より出土した杯の完形品である。底部は丸底で、体部は丸みをもって立ちあがり、直線的に口縁部に至る。器肉は底部1cmと厚いが体部は約5mmと薄くなる。外面口縁部にはヨコナデ、体部上半より底部にかけては手持ちヘラケズリが施されている。内面口縁部には横方向へのヘラミガキが施され、底部は中央に向かって放射状に丁寧なヘラミガキが観察される。内面は部分的に黒色処理が見られる。口径12.8cm、器高3.9cmを測る。

甕（2） 住居跡カマド右袖側より出土した小型の甕の完形品である。口縁部の直立する平底の鉢形ともいえる器形を呈する。外面体部には縦方向の手持ちヘラケズリ、口縁部底部には横方向のナデが施されている。外面底部には円盤状に粘土貼付痕が残り、ヘラ調整が観察され、中央が凹型を呈するが安定している。内面には全体的に横方向へのナデが施され、底部には手持ちヘラケズリ、ナデがわずかに観察される。器肉は1～1.5cmを測り全体的に厚い。口径14cm、器高9.8cm、底径6.9cmを測る。

甕（3） 住居跡カマド右袖付近より出土した底部欠損の甕と思われるものを復元実測した。口縁部が外傾し先端の器肉は薄い。口縁部下端にくびれを有し沈線を呈する。体部に膨はなく内彎ぎみに底部へと至る。外面口縁部にはヨコナデ、体部には手持ちヘラケズリ後、ナデ調整が施されている。内面には口縁部から体部上半にまでヨコナデがみられ、体部には手持ちヘラケズリ、ヘラナデが観察される。内外面共に輪積み痕が明瞭にみられる。口径13.5cm、胴径10.2cmを測る。

甕（4） 住居跡カマド左袖付近より出土した無底式の甕の完形品である。口縁部が外反し、体部が緩く膨み底部に至る。口縁部幅が比較的広く、最大径は口縁部にある。器面の荒れはひどいが、内外面共に巻き上げ痕がみられる。外面口縁部から体部上半にかけてヨコナデ、体部全体に縦横方向の短い手持ちヘラケズリが施されている。内面口縁部にはヨコナデ、体部には縦方向への手持ちヘラケズリが観察される。口径23cm、器高24cm、底径9cmを測る。

甕（5） 住居跡カマド右袖付近より出土した単孔式甕の完形品である。器形の基本型は鉢形である。径2.6cmの孔を底部中央に焼成後穿孔して甕としている。口縁部が外反し、体部から直線的に底部に至る。内外面共に巻き上げ痕がみられる。外面体部は摩滅が著しく手持ちヘラケズリ痕が、かすかに観察できる。内面口縁部にはヨコナデ、体部には横方向へのヘラナデ



第32図 第10号住居出土遺物

第3章 第2節溝跡

が施されている。口径19cm、器高13.7cm、底径 6.5cm、底径内法 2.6cmを測る。

第10表 第10号住居跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口 径	胴 径	底 径	高 さ	脚 高	成 形	外面調整	内面調整	その他
土師器	杯	32-1	33-1	サツ内 裏口		12.8			3.9			ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	シガキ	内凹、丸底
〃	甕	32-2	33-3	サツ右側		14		6.9	9.8			ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	ヘラケズリ 手持ちヘラケズリ	平底、取付痕
〃	〃	32-3	33-2	〃		13.5*	10.2				輪 積 み	ヨコナデ、ヘラケズリ 手持ちヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラケズリ 手持ちヘラケズリ	
〃	瓶	32-4	33-4	ナ 左側		23		9	24		巻き上げ	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	瓶底式
〃	〃	32-5	33-5	ナ 右側		19		6.5	13.7			ヨコナデ 手持ちヘラケズリ	ヨコナデ ヘラケズリ	瓶底式 2.6

第2節 溝 跡

第1号溝跡（第34図、第12図版。第11表）

〔検出状況〕 D-1、2、3グリッドにかけて検出された溝で、調査区最西端に位置する。

検出面は第Ⅲ層である。

〔規模・方向〕 遺構西側が調査区外まで延長しているため範囲は不明であるが残存部は長さが13.2m、幅は広い方で 1.2m、狭い方で 0.7m、深さは18cm～35cmを測る。流路は東から西へわずかに傾斜している。溝中央東寄りに水路が2本に分かれるが約2m延びほぼ平坦となる。溝を切って3個のビットが検出された。P₁は径45cm、深さ59cm、P₂は径65cm、深さ50cm、P₃は径43cmを測る。P₁とP₂はいずれも掘り方をもつもので柱痕が認められるが、対応する柱穴は検出されなかった。

〔覆土〕 2層からなり、自然堆積の状態を呈する。1層は黄褐色土、2層は砂質土層の黄黒褐色土である。

〔断面形〕 東側では法面の角度が120°の「逆台形状」を呈しているが、西側では法面の角度が145°の立ち上がりのU字状を呈している。

〔遺物〕 溝第2層内から、須恵器片が12点、土師器片が1点出土している。須恵器片のうち甕の破片が9点、円盤状の須恵器片、器種不明の須恵器片2点が出土した。その他拳大の石魂が多数出土しているが、ある時期に投棄されたものと思われる。

土師器（第34図、第34図版）

壺（1） 溝内より出土した底部と体部下半の遺存する壺と思われるものを図上実測した。

底部は平底であり膨まらずに立ち上ると思われる。摩滅が著しく詳細な観察は困難であるが、外面体部下半にはヘラケズリ調整が見られる。底径 5.1cmを測る。

須恵器（第34図、第35図、第34図版）

甕（2） 溝内より出土した甕と思われる底部片、約 $\frac{1}{6}$ を図上実測した。底部はほぼ水平で

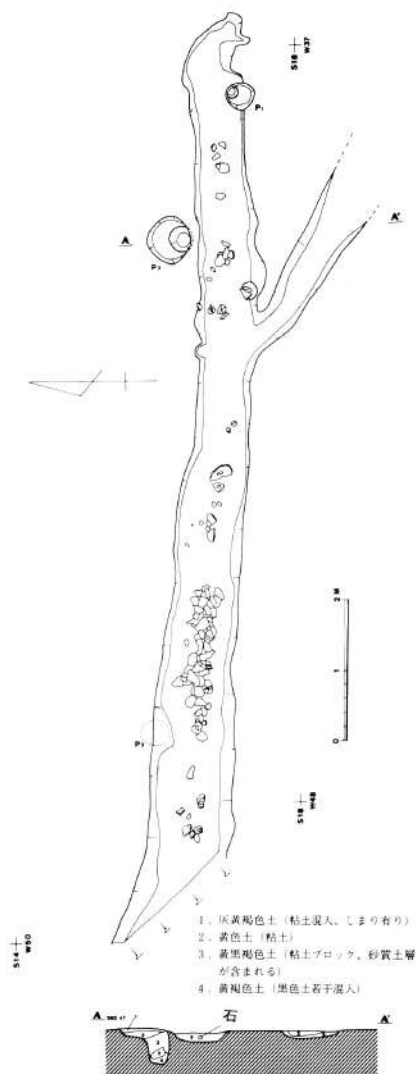
直線的に外反して立ち上がる。外面体部下端にヘラケズリ痕が残り、底部には平にヘラ調整が施されている。内面底部に明瞭なヘラナデ痕が観察される。推定底径16.5cmを測る。

甕(3) 溝内より出土した大甕の口縁部、約 $\frac{1}{6}$ を図上実測した。ロクロ成形による大甕と思われるがロクロ回転方向は不明である。頸部は直線的に外反し、口縁部端で垂直に立ち上がる。口唇部に波状紋と一条の沈線を巡す。外面頸部に波状線と二本の平行沈線を巡す。内外面共にヘラ調整、ナデが見られ内面下端に指頭圧痕が残る。推定口径33.5cmを測る。

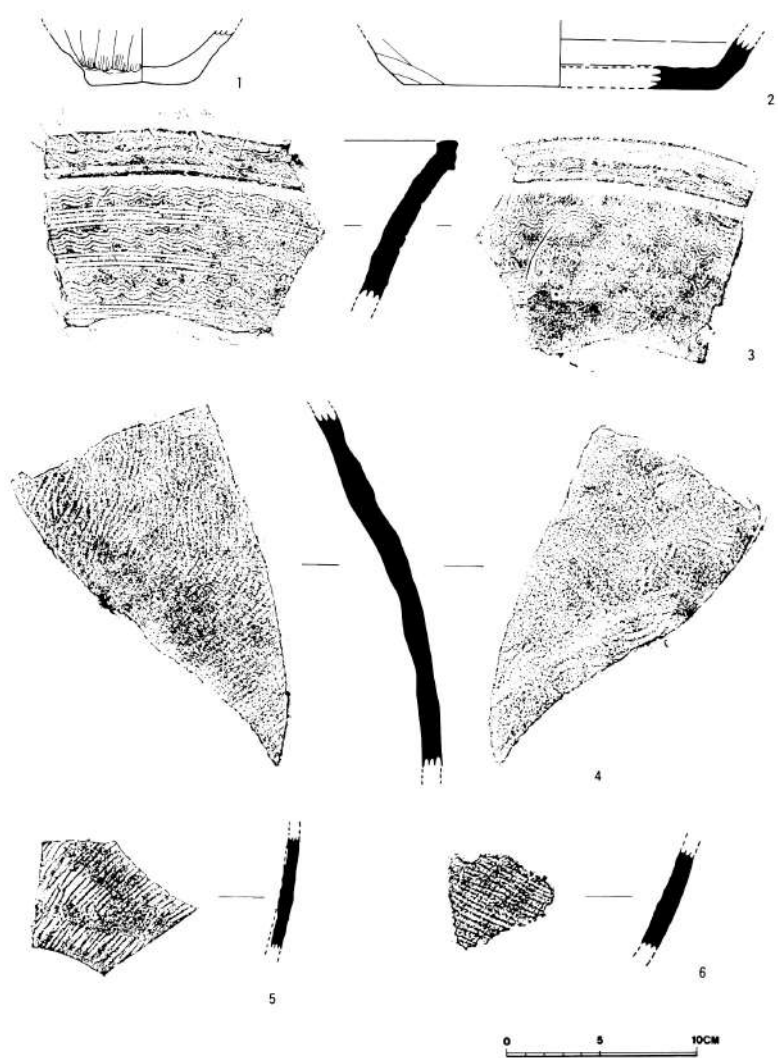
甕(4) 溝内より出土した甕の体部の一部と思われる破片である。ゆるい丸みをわびた形を呈すると思われ、器肉は1.4cmと厚く大型の甕と考えられる。外面には斜めに短い叩き目が全体に施されている。内面には明瞭ではないが同心円叩き目が数個残り、わずかにヨコナデも観察される。

甕(5、6) 溝内より出土した甕の破片である。(5)は体部表面に縦方向と思われる平行叩き目が施されている。(6)は外面に平行叩き目が施され、内面はヘラナデの跡が残り凹凸している。

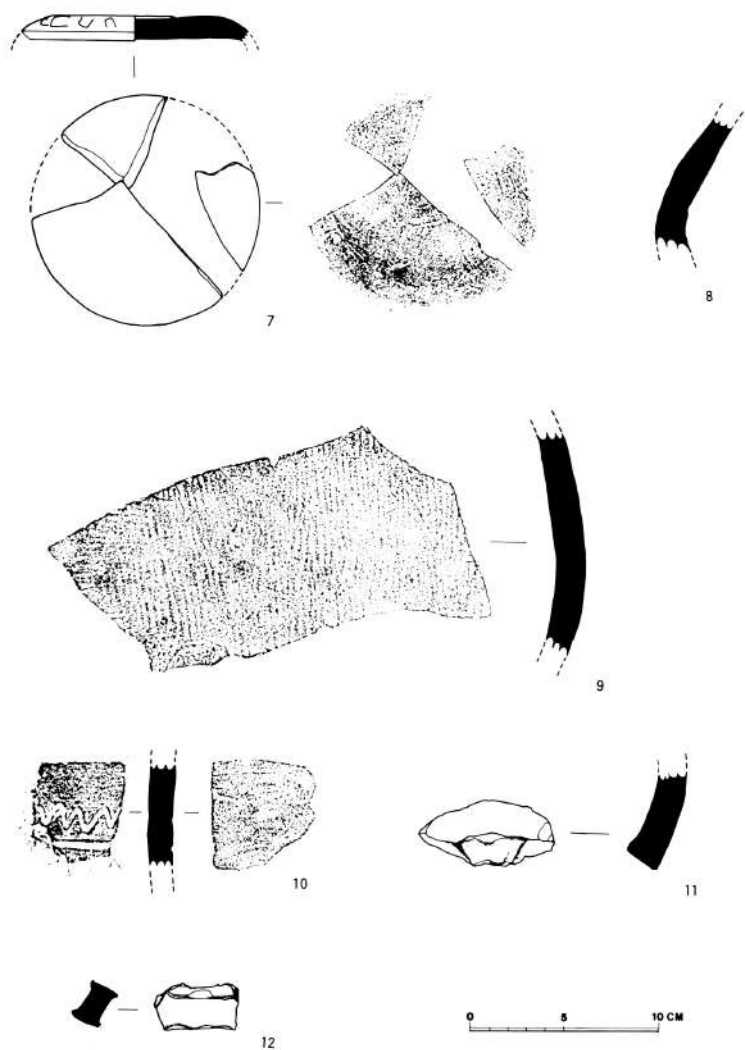
蓋?(7) 溝内より出土した破片である。盤か蓋と思われるが判断がむずかしい。外面には手持ちヘラケズリ



第33図 第1号溝跡



第34图 第1号溝出土遺物



第35図 第1号溝出土遺物

第3章 第2節 溝跡

が施され、内面にはロクロ成形が見られる。焼成は良好である。

甕(8) 溝内より出土した甕の破片である。器肉は1.7cmと厚く、ロクロ成形による大甕と思われる。口縁部と体部との境界には貼付痕が見られる。水挽きによる再調整が観察される。

甕(9) 溝内より出土した甕の体部の破片である。非ロクロ成形による大甕と思われる。外面には平行叩き目が施されているが、所により逆方向を呈している部分が見られる。器肉は1.6cmと厚く、焼成は良好で硬い。

甕(10) 溝内より出土した甕の頸部の破片である。ロクロ成形による。ロクロナデの後、波形と幅0.4cmの一条の沈線が施されている。焼成は良好である。

器種不明(11、12) 溝内より出土した須恵質の遺物である。断面上に、つまみあげたように幅2cmの透かし窓状の切り口が観察される。ロクロ成形である。自然釉がかかっている。器肉は(11)が1.6～1.8cm、(12)が1.2cmと両方とも厚い。焼成は硬く胎土は緻密である。(11)、(12)とも同一体のものと考えられる。

第11表 第1号溝出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口徑	底徑	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	壺	34-1	34-1		覆土		5.1			非ロクロ	ヘラキズリ		平底
須恵器	甕	34-2			*		16.5		*	非ロクロ	*	ヘラナデ	
*	*	34-3	34-2		*	33.5				ロクロ	波状線	*	指頭圧痕
*	*	34-4	34-3		*					非ロクロ	叩き目	ヨリナデ 同心円叩き目	
*	*	34-5			*					*	平行叩き目		
*	*	34-6			*					*	*	ヘラナデ	
*	蓋?	34-7	34-4		*					ロクロ	指ナデ ヘラキズリ		
*	甕	34-8	34-5		*					*	水挽き		貼付痕
*	*	34-9	34-6		*					非ロクロ	平行叩き目		
*	*	34-10	34-7		*					ロクロ			
器種不明		34-11	34-8		*					*			自然釉
*		34-12	34-8		*					*			*

第2号溝跡(第36図、第12図版)

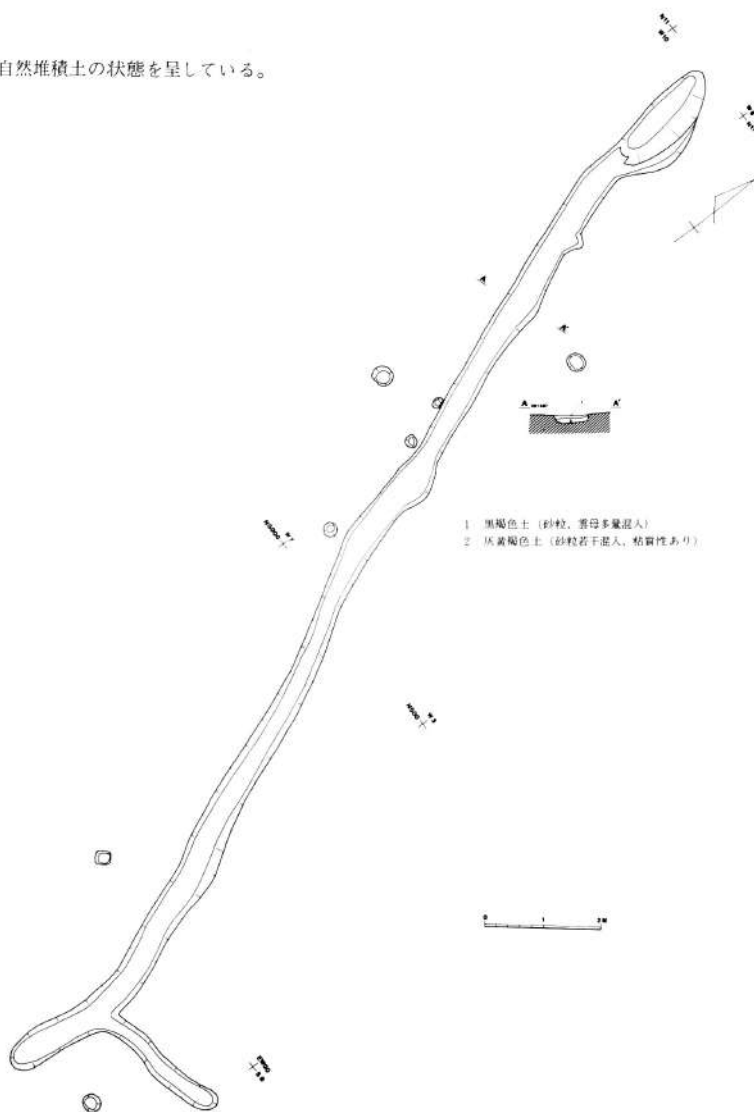
〔検出状況〕 本遺跡のほぼ中央に位置し、第9号住居跡の西側、E-9～10、F-9、G-8～9、H-8グリッドにかけて検出された溝で南北に延びている。検出面は第4層である。

〔規模・方向〕 南から北へわずかに傾斜している。全長が21.2m、幅は広い所で65cm、狭い所で40cm、深さは12cm～40cmを測る。

〔覆土〕 2層からなり、1層が砂粒、雲母が多量混入した黒褐色土、2層が灰黄褐色土の

第3章 第2節溝跡

自然堆積土の状態を呈している。



第36図 第2号溝跡

第3章 第2節溝跡

〔断面形〕 北側ではほぼ「逆台形状」を呈し、南側ではU字状を呈している。

〔遺物〕 第2層内から土師器が19点出土しているが、いずれも小片で図化できるものがなかったが、丸底の段を有する土師器杯片が2点出土しているが、9号住居跡が近くに検出されており、住居跡に伴う遺物と考えられる。

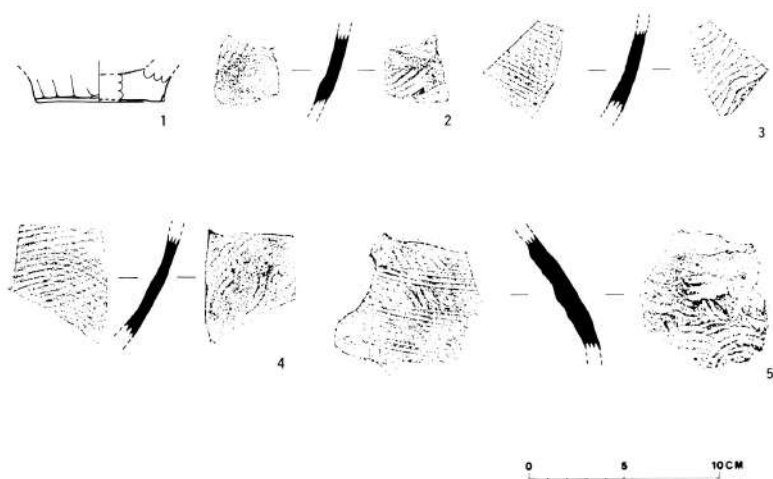
第3号溝跡（第13図、第13図版、第12表）

〔検出状況〕 南東隅C-15からG-10グリッドにかけて検出した。第7号住居跡の西壁を切り、第2号建物跡を切り、第5号住居跡の西側へ蛇行しながら延びている溝である。

〔規模・方向〕 北側第5号土坑を切って、北から南へ傾斜し川に合流するものと思われる。遺存する長さは約50m、幅は広い所で65cm、狭い所で20cm、深さは15cm～18cmを測る。

〔覆土〕 南側は3層、北側は2層からなり、自然堆積の状態を呈している。北側の堆積土は暗褐色土および砂粒多量に混入の黄黒褐色土で、南側のおもな堆積土は黒褐色の砂質土が含まれている。

〔断面形〕 北側は「逆台形状」を呈し、法面の角度は130°の立ち上がりをもつ。南側ではU字状を呈している。



第37図 第3号溝出土遺物

第3章 第2節溝跡

〔遺物〕 溝内1層面からおもに出土している。須恵器が6点、土師器が20点で、いずれも小破片が多い。

土師器（第37図）

甕（1） 遺構確認面より出土した甕と思われる底部の破片 $\frac{1}{2}$ を図上実測した。外面には縦方向の手持ちヘラケズリ後、ヨコナデが施され、底部には手持ちヘラケズリが観察される。内面には黒色処理が施されている。底径 6.9cmを測る。

須恵器（第37図）

甕（2） 溝内より出土した甕の破片と思われる。外面には平行叩き目が観察されるが、摩滅され平坦になっている。内面には同心円叩き目が見られる。焼成は普通。色調は外面は灰褐色、内面は青灰色を呈し、胎土は密である。

甕（3） 溝内より出土した甕の破片である。器肉は7mmと薄い。外面にはヘラ調整の後、平行叩き目が施されている。内面には同心円叩き目が明瞭に観察される。焼成は普通で内外面共に白灰色を呈する。胎土は密で、まざり気がない。

甕（4） 溝内より出土した甕の破片である。器肉は6mmと薄手である。外面には重複して平行叩き目と、大きな同心円叩き目が明瞭に残る。内面には手持ちヘラケズリ痕、ナデが観察できる。焼成は普通、胎土は密で砂粒がわずかに混入し、白灰色を呈する。

甕（5） 溝内より出土した甕の破片である。外面には平行叩き目を施した上に3～4本の平行沈線を巡らしているのが観察される。内面には同心円叩き目の後、ヘラナデ調整が施されている。焼成は普通、胎土は密で砂粒をわずかに含み、内外面共に白灰色を呈する。

第12表 第3号溝出土土器一覧表

名称	器形	図写	真位置	層位	口徑	胴徑	底徑	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	甕	37-1		確認面			6.9			非口クロ	手持ちヘラケズリ ヨコナデ		内黒
須恵器	※	37-2		覆土						※	平行叩き目	同心円叩き目	
※	※	37-3		※						※	※	※	
※	※	37-4		※						※	平行叩き目 同心円叩き目	手持ちヘラケズリ ヘラナデ	
※	※	37-5		※						※	平行叩き目	同心円叩き目 ヘラナデ	

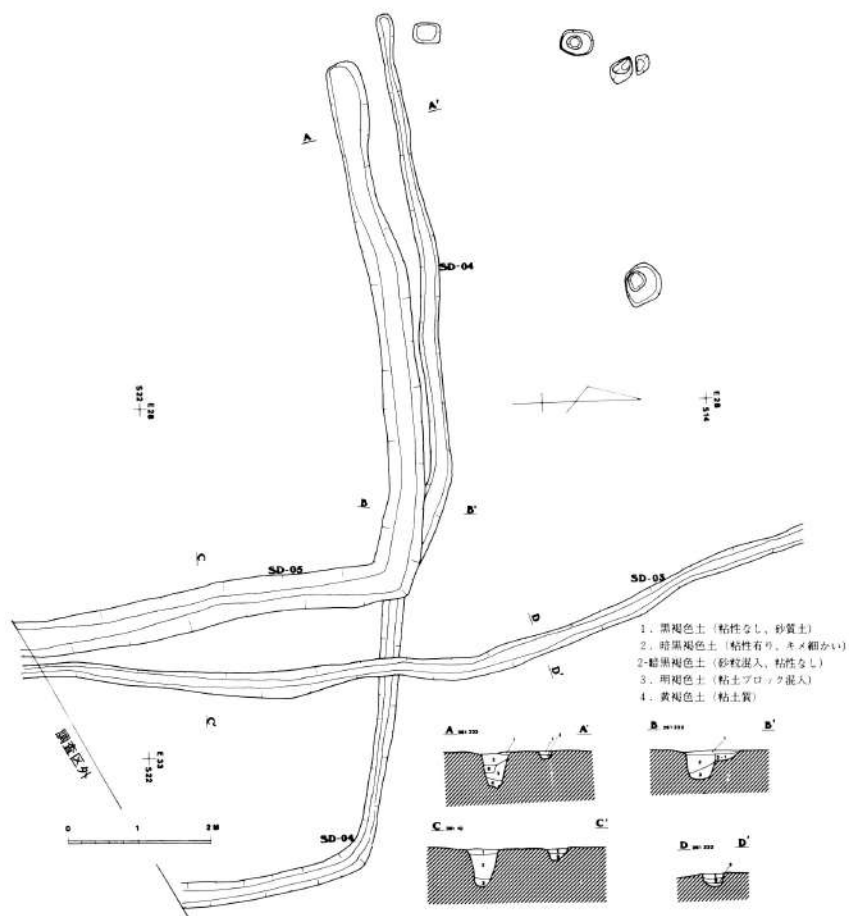
第4号溝跡（第38図、第13図版）

〔検出状況〕 本遺跡調査区内最南東端に当り、C-14、15グリッドに位置する。第3号溝、第5号溝によって切られた状態で検出された。検出面は第Ⅲ層である。

〔規模・方向〕 C-14グリッド内第5号溝に平行し、東に延びながら直角に南へ折れる。傾斜は西から東へ、そして南へ折れて限戸川に流れ込むものと思われる。溝幅は広い所で36cm、狭い所で18cm、深さは12cm～15cmを測る。

第3章 第2節溝跡

〔覆土〕 2層に分けられる。第1層は砂粒の多い黒褐色土、第2層は暗褐色土の自然堆積である。



第38図 第4、5号溝跡

第3章 第2節溝跡

〔断面形〕 U字状を呈しており、西側では法面の角度が 120° とV字形に近い。東側では角度が 145° となだらかな立ち上がりをもっている。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

第5号溝跡（第38図、第13図版）

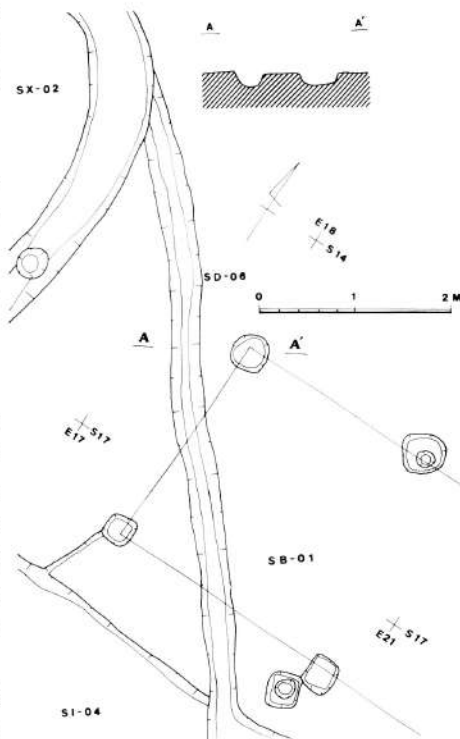
〔検出状況〕 C-14、15グリッドにわたって検出された。本溝跡は第4号溝の南側に接近し、ほぼ平行して延びている。第4号溝跡を一部切っている。検出面は第Ⅲ層である。

〔規模・方向〕 溝の長さは13.1m。幅は広い所で60cm、狭い所で35cm、深さは55cmと深い。傾斜は、西から東へ、そして南へ直角に折れ隈戸川に流れ込むものと推定される。

〔覆土〕 西側は5層に分けられた複雑な堆積が観察された。南側は3層に分けられた自然堆積の状態を呈している。

〔断面形〕 U字状を呈しており、法面は西側、南側とも 100° と直角に近い角度をもち、急な立ち上がりをもっている。

〔遺物〕 溝内からの遺物は出土していない。



第6号溝跡（第39図、第14図版）

〔検出状況〕 B-14、C-13、D-12グリッドにわたって検出されている。本遺構は第4号住居跡東北コーナー部分を切り、第2号建物跡の柱穴の間を通り、第2号遺構（SX-02）の溝に直交する状態で検出された。検出面は第Ⅲ層である。

〔規模・方向〕 第4号住居跡と重複されているが、第2号遺構溝から東南へほぼ真直ぐに延び隈戸川

第39図 第6号溝跡

第3章 第3節 掘立柱建物跡

に流れる傾斜を呈している。溝の全長は13m、幅25cm～35cm、深さは15cm～17cmを測る。

〔覆土〕 2層からなり、黄黒褐色土、黄褐色土に分けられ自然堆積を呈している。

〔断面形〕 全体的に丸みを帯びたU字状を呈しており、法角度は130°の立ち上がりを呈している。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

第3節 掘立柱建物跡

調査区内の北部を除くほぼ全域にわたって、建物跡と思われる柱痕を伴う掘り方を含むピット群が散在するのが確認されたが、建物遺構として全体の規模が推測されるものが11棟の為、それらを第1号建物跡から第11号建物跡とした。柱穴から特別な遺物は検出されなかった。

第1号建物跡（第40図、第15図版、第13表）

D-12、13グリッドにかけて検出され、4号住居の真北に位置する。規模は東西に4.64m、南北に2.3mを測り、東西方向にのびる柱列は、南北軸方向N-1°-Eを示しほぼ直交する。掘り方埋土は暗黒褐色土であり、柱穴との分層は困難であった。

第13表 第1号建物跡ピット形態表

No.	計測値単位	(cm)			柱痕単位 (cm)		柱間距離 (m)
		上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	隅丸方形	33×37	21×25	41	—	—	(P ₁ -P ₆) 21
P ₂	〃	32×38	26×29	38	—	—	21
P ₃	〃	32×31	23×22	32	—	—	25.5
P ₄	円形	43×41	35×35	13.5	—	—	23
P ₅	隅丸方形	44×40	34×32	16	17×14	34.5	21
P ₆	〃	38×45	30×40	24	19×22	40	25.5
P ₇	〃	35×37	25×30	37	18×21	41	
P ₈	不整楕円形	110×33	73×22	38	—	—	

第2号建物跡（第41図、第16図版、第14表、第15表）

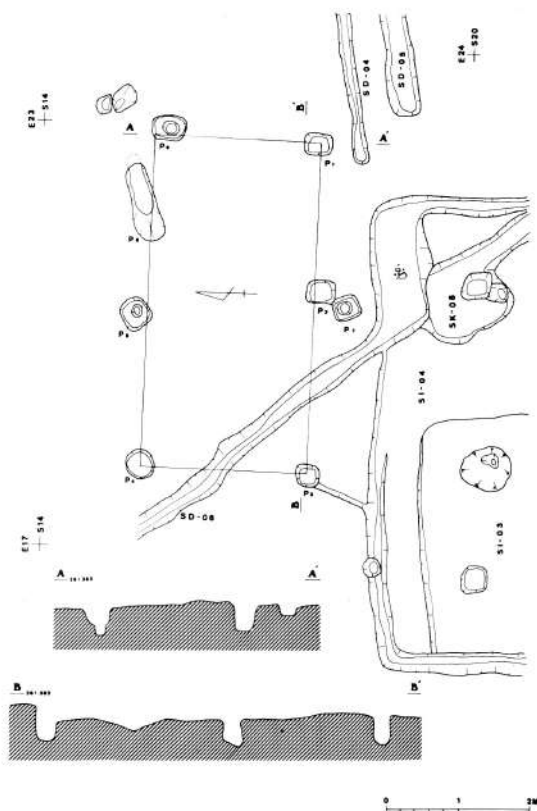
9号住居の北西に位置し、規模は東西に6.04m、南北に3.3mを測り、東西方向にのびる柱列は、南北軸方向N-10°-Wを示す。3号溝との新旧関係は溝と掘り方が切り合いを示し建物の方が古いと考えられる。掘り方埋土は2層からなり、1層は黒褐色土で、若干の焼土粒が見られ、2層は明褐色土である。またP₁とP₇の柱穴間にP₈が検され、一直線上にP₈、P₉、P₁₀、P₁₁の各柱間距離約1.8mを測る柱列が確認されたが、それに対応する柱穴が未確認のP₈、P₉、P₁₀、P₁₁とを線で結んだだけに止めた。P₁₂内からは須恵器(甕)の破片が一点出土し、遺構確認面か

らは須恵器の破片が2点出土している。

須恵器（第42図、第35図版）

鉢（1） 建物跡付

近より出土した鉢の口縁部と体部の一部の破片を復元実測した。体部は球状に膨むが口縁部は内湾している。口縁部には自然釉が観察される。外面には、ロクロ成形による稜線が観察され、内面には水挽き痕が明瞭に見られる。焼成は良好、胎土には砂粒が多量混入している。色調は内外面共、青灰色を呈する。推定口径14.5cmを測る。



第40図 第1号建物跡

壺（2） 建物跡付近遺構確認面より出土した壺の肩と思われる破片を図上実測した。内外面共にロクロ成形である。自然釉が一部に観察される。内面には頸部との貼付痕が観察され、一部に指紋が見られる。焼成は良好で、胎土は堅緻であり砂粒を若干含む。色調は青

第14表 第2号建物跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真位置	層位	口径	底径	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
須恵器	鉢	42-1	35-1		覆土	14.5cm			ロクロ		水挽き	自然釉
*	壺	42-2		確認面					ろ			自然釉貼付痕
*	壺	42-3	35-2	ビッド					非ロクロ	叩き目	青海波紋	

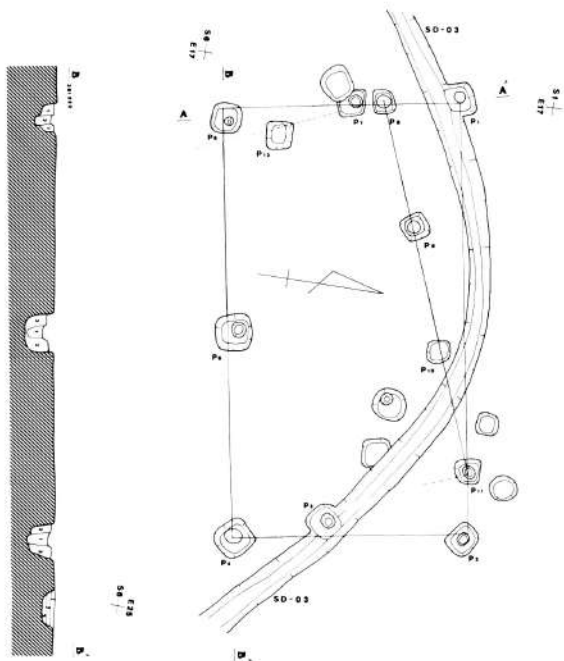
第3章 第3節掘立柱建物跡

灰色を呈する

甕(3) 建物跡の柱穴P₁₂内より出土した破片で、大型甕であろうと思われる。器肉は1.7cmと厚い。外面には叩き目が明瞭に見られ、内面には青海波紋が観察される。焼成は良好で胎土は緻密である。色調は白灰褐色を呈する。

第3号建物跡(第43図、第17図版、第16表)

C、D-10、11グリッドにかけて検出され、第2号遺構と第4号建物との間に位置する。構造は、東西2間、南北3間で南北に長い建物であると考えられる。全体規模は北辺3.3m、南辺で3.3m、東辺で5.1m、西辺で4.8mを測り、各柱間の寸法は北側柱列で1.7m+1.6m、南側柱列で1.6m+1.7m、東側柱列で2.8m+2.3m、西側柱列で1.6m+1.6m+1.6mを測る。建物方向は、南北軸方向N-15°-Wを示す。掘り方埋土は2層からなり、1層は黒褐色土でサラサラしており、2層は白黄色粘土粒まじりの黒褐色土である。



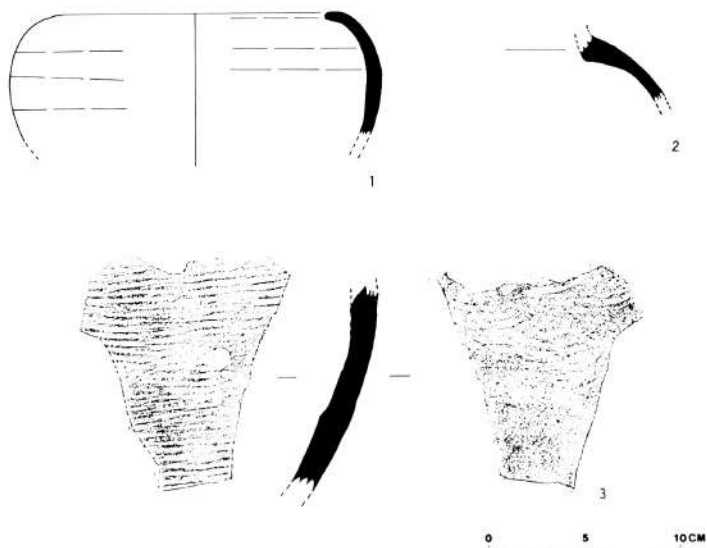
第41図

第2号建物跡 ▶

1. 黒褐色土
(焼土粒若干混入)
2. 明褐色土
3. 黄褐色土



0 1 2 m



第42図 第2号建物跡出土遺物実測図

第15表 第2号建物跡ビット形態表

No.	計測値単位(cm)				柱痕単位(cm)		柱間距離(m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	隅丸方形	48×45推定	35×32	15	18×15	30	6.2
P ₂	〃	38×45	30×34	34	15×18	57	(P ₁ -P ₂) 3.3
P ₃	〃	55×48推定	40×38	27	22×18	31	(P ₂ -P ₃) 2.9
P ₄	〃	48×49	34×37	34	21×23	40	2.9
P ₅	〃	58×55	33×45	42	20×19	40	1.8
P ₆	〃	43×42	32×29	23	13×14	35	1.1
P ₇	〃	38×40	32×33	22	20×20	22	1.8
P ₈	〃	34×30	26×24	14	18×20	26	1.8
P ₉	〃	36×37	24×26	16	17×18	28	1.8
P ₁₀	〃	35×33	25×27	15	—	—	
P ₁₁	〃	37×38	28×25	16	19×17	26	
P ₁₂	〃	39×37	27×21	32	—	—	

第3章 第3節掘立柱建物跡

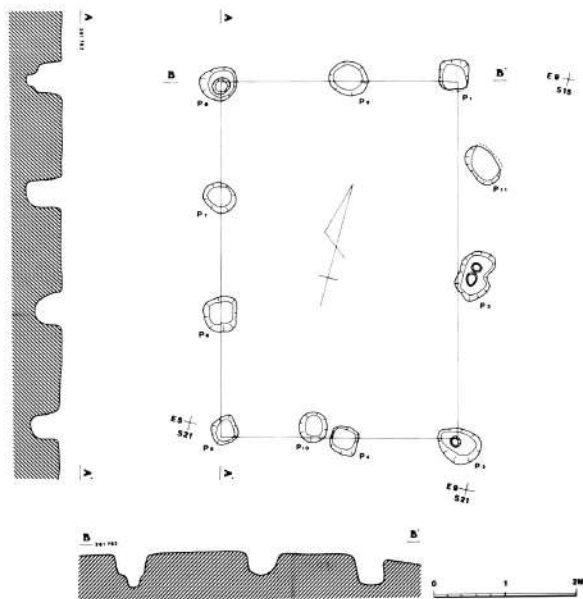
第16表 第3号建物跡ビット形態表

No.	計測値単位 (cm)				柱痕単位 (cm)			柱間距離 (m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ		
P ₁	隅丸方形	40×42	37×32	36	—	—	(P ₁ —P ₉)	1.6
P ₂	不整形	74×49	55×35	20.5	20×15	31		2.8
P ₃	〃	50×63	28×49	16	15×15	22		2.3
P ₄	隅丸方形	39×35	28×30	12.5	—	—		1.6
P ₅	〃	37×35	27×24	37	—	—		1.7
P ₆	〃	50×45	30×32	39	—	—		1.6
P ₇	〃	45×37	29×31	48	—	—		1.6
P ₈	丸形	47×50	38×33	35	25×22	49		1.6
P ₉	〃	48×52	33×40	34	—	—		1.7
P ₁₀	〃	42×40	28×20	50	—	—		
P	楕円形	48×35	45×35	40.5	—	—		

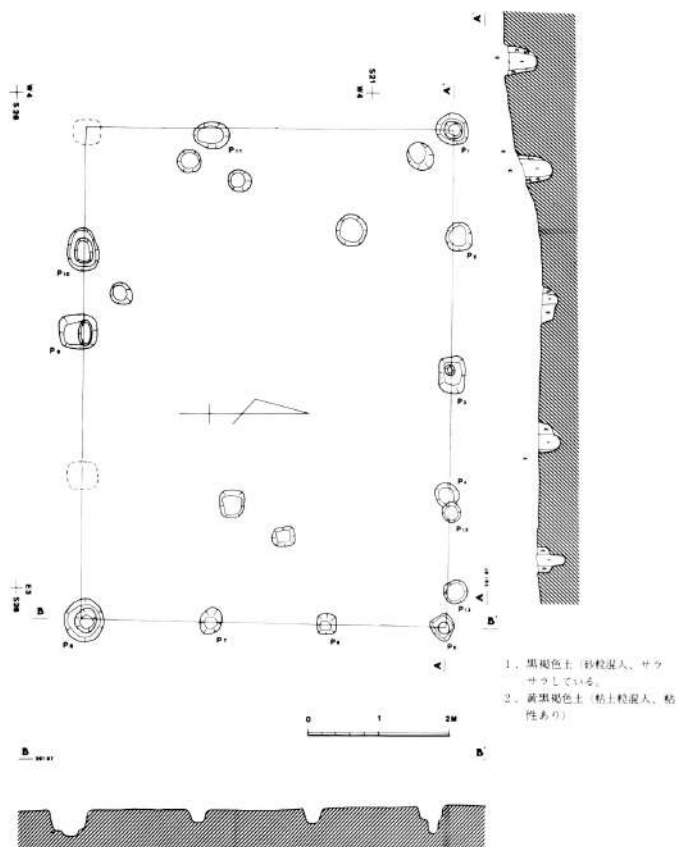
第4号建物跡 (第44図、第18図版、第17表)

本建物跡はB～C・9～10グリッドにかけて検出された。この遺構の地形は開田造成によって東西に落差を有する地形である。遺構検出面は第4層上面である。プランは南北5.1m東西が7.0m(3間×4間)の建物で南北軸線方向は直北を向く。

柱穴の平面形は平均して不整形であり、柱痕はP₁、P₂、P₃、P₄、P₅で検出したが南側の柱列にビットを2個は検出する事ができなかった。掘り方内覆土は2層から3層に分けられる。遺構に伴う遺物は出土していない。



第43図 第3号建物跡



第44図 第4号建物跡

第5号建物跡（第45図、第19図版、第18表）

遺跡のほぼ中央、南寄りのC-8グリッドに検出された掘立柱建物跡である。検出面は第4層の黄黒褐色土である。付近に柱痕に伴う掘り方を含むピット群が散在するが、全体の規模をとらえることができたのは、南北3間（5m）東西2間（3.6m）の建物跡で東辺の軸線方向はN-18°-Wをむいている。P₁₀、P₁₁、P₁₂は柱列としては、わずかに逸れるが、建物跡に付随する柱穴として記した。遺構に伴う遺物は出土していない。

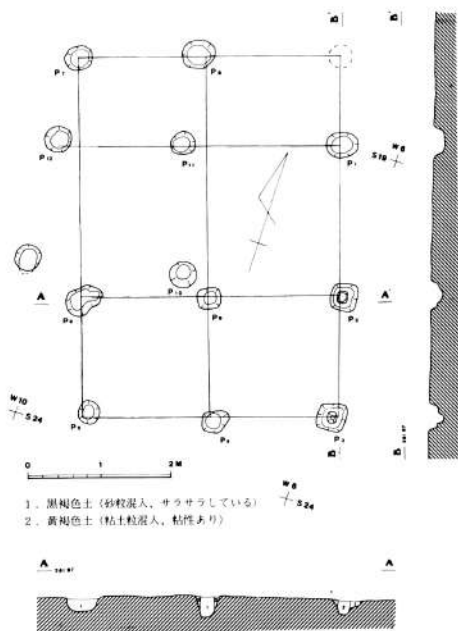
第3章 第3節 掘立柱建物跡

第17表 第4号建物跡ピット形態表

No.	計測値単位 (cm)				柱痕単位 (cm)		柱間距離 (m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	円形	45×50	30×35	45	25	35	1.6
P ₂	〃	40×40	28×25	50	25	42	1.9
P ₃	隅丸方形	50×38	32×26	22	15	20	1.8
P ₄	円形	45×35	22×22	30	22	28	1.8
P ₅	不整形	48×37	40×20	30	26	28	1.6
P ₆	隅丸方形	28×28	13×16	18	—	—	1.6
P ₇	楕円形	47×30	15×17	19	—	—	1.7
P ₈	円形	60×55	45×45	25	30	38	4.0
P ₉	隅丸方形	50×50	30×38	25	32	33	1.2
P ₁₀	不整楕円形	60×45	50×36	28	32	39	3.8 (P ₁ -P ₁₁)
P ₁₁	楕円形	38×50	25×36	36	—	—	3.8 (P ₁ -P ₁₁)
P ₁₂	円形	30×30	22×20	23	—	—	
P ₁₃	〃	34×36	25×27	15	—	—	

第6号建物跡 (第46図、第19図跡、第19表)

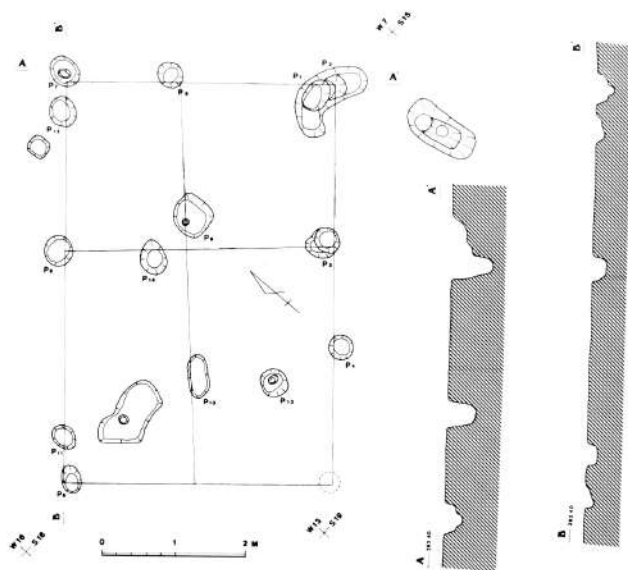
C-D、7～8グリッドにかけて検出され、第2号住居の北東に位置する。構造は東西2間、南北2間で、全体規模が北辺 3.8m、南辺 3.6m、東辺は推定 5.6m、西辺 5.8m、格柱間の寸法が、北側柱列1.5m+2.1m、東側柱列2.1m+1.5m+推定2m、西側柱列3.3m+2.5mを測る為建物跡と断定することに無理があるが、一応柱穴を結び、第6号建物跡とした。建物方向は、南北軸方向N-40°-Eを示す。掘り方埋土は2層からなり、1層は黒褐色土に若干の炭化物が混入し、さらっとしている。2層はしっとりした粘土まじりの黄黒褐色土である。



第45図 第5号建物跡

第18表 第5号建物跡ビット形態表

No.	計測値単位 (cm)				柱痕単位 (cm)		柱間距離 (m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	楕円形	35×42	23×28	18	—	—	2.1
P ₂	隅丸方形	40×35	38×25	13	17	18	1.7
P ₃	〃	40×40	30×25	12	16	22	1.7
P ₄	不整形	40×22	34×20	43	—	—	1.8
P ₅	円形	33×30	22×15	23	—	—	1.7
P ₆	不整形	55×35	45×20	22	—	—	3.4
P ₇	円形	35×33	25×25	17	—	—	1.8
P ₈	〃	40×45	27×33	40	—	—	3.4
P ₉	隅丸方形	30×32	18×17	30	—	—	1.8 (P ₈ -P ₉)
P ₁₀	円形	36×27	20×20	45	—	—	1.8
P ₁₁	〃	33×35	22×23	40	—	—	1.8
P ₁₂	〃	36×36	25×24	20	—	—	

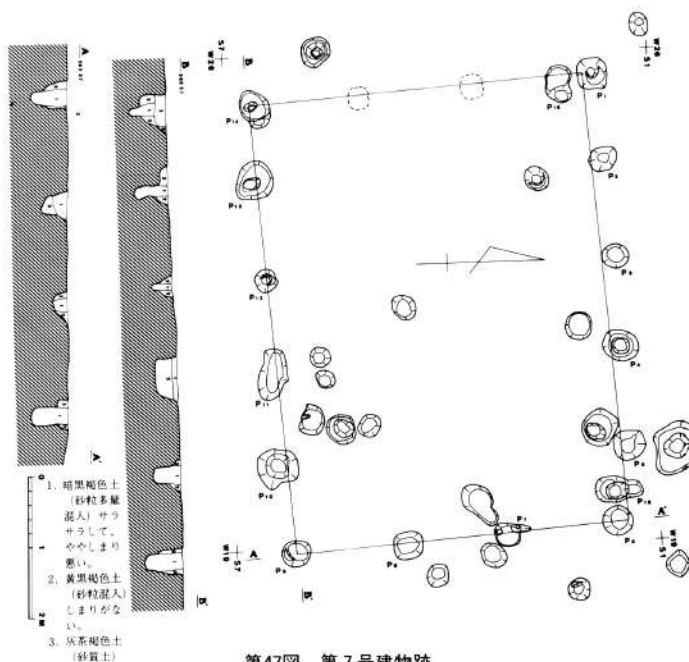


第46図 第6号建物跡

第3章 第3節 掘立柱建物跡

第19表 第6号建物跡ビット形態表

No.	計測値単位 (cm)			柱痕単位 (cm)			柱間距離 (m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	楕円形	48×34	33×18	58	—	—	(P ₂ -P ₈) 2.3
P ₂	不整形	120×52	109×33	20	30×7	28	2.1
P ₃	ク	48×40	20×8	15	42×33	34	1.5
P ₄	ク	35×36	15×22	13.5	—	—	—
P ₅	楕円形	41×28	25×18	12.5	—	—	3.3
P ₆	円形	42×42	26×35	16.5	—	—	2.5
P ₇	ク	48×40	34×29	40	18×13	24.5	1.5
P ₈	ク	39×34	18×25	18	—	—	2.1
P ₉	不整偶丸方形	65×58	50×42	—	10×10	25	2.1
P ₁₀	楕円形	62×28	55×31	18.5	—	—	(P ₃ -P ₁₄) 2.4
P ₁₁	円形	40×30	30×24	14.5	—	—	(P ₆ -P ₁₄) 8
P ₁₂	ク	45×37	31×25	13	—	—	
P ₁₃	ク	40×36	23×26	42	11×14	59	
P ₁₄	楕円形	55×36	25×26	25	—	—	



第47図 第7号建物跡

第 8 号 第 3 節掘立柱建物跡

第 7 号建物跡（第47図、第20図版、第20表）

E～F、5～6グリッドにかけて検出され、第1号住居跡に平行して約11m北に位置する。構造は東西5間、南北3間で、全体規模は東辺 4.5m、西辺 4.8m、南辺 6.3m、北辺 6.3mを測り、東西に長い建物と考えられる。各柱間の寸法は、北側柱列1.2m+1.4m+1.2m+1.4m+1.1m、南側柱列1.2m+1.4m+1.4m+1.1m、東側柱列1.5m+1.5m+1.5mを測り、西側柱列においては、P₁₄とP₁の間に柱穴が検出されなかった。建物方向は、南北軸方向N-4°-Wを示す。掘り方の形状はまちまちである。掘り方埋土は3層から成り、1層は砂粒が多量混入のサラサラした暗黒褐色土で、2層は砂粒と粘土混りの黄黒褐色土で、3層は砂質の灰茶褐色土である。

第20表 第7号建物跡ピット形態表

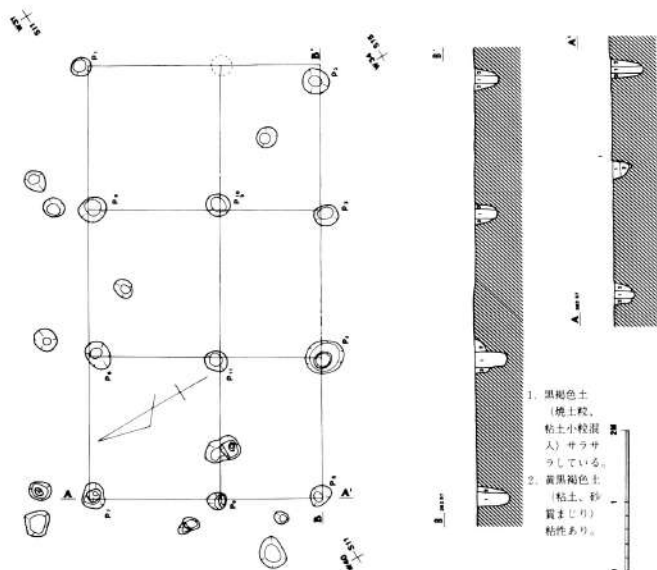
No.	計 測 値 単 位 (cm)				柱間距離 (cm)		柱 間 距 離 (m)
	形 状	上面径	底面径	深 さ	径	深 さ	
P ₁	隅丸方形	45×41	10×25	40	12×10	54	(P ₁ -P ₁₄) 4.8
P ₂	不 整 形	34×40	14×15	29	—	—	1.2
P ₃	円 形	36×37	20×23	19	—	—	1.4
P ₄	〃	45×50	33×35	13	23×25	18	1.2
P ₅	隅丸方形	42×46	20×20	36	—	—	1.4
P ₆	円 形	33×43	28×25	52	—	—	1.1
P ₇	不 整 形	33×52	27×30	19	9×15	28	1.5
P ₈	隅丸方形	40×40	22×30	36	—	—	1.5
P ₉	円 形	37×40	24×25	52	—	—	1.2
P ₁₀	不 整 形	55×56	14×20	39	—	—	1.4
P ₁₁	不整楕円形	73×42	57×23	30	—	—	1.2
P ₁₂	隅丸方形	33×33	10×12	21	—	—	1.4
P ₁₃	不 整 形	55×52	13×21	46	—	—	1.1
P ₁₄	〃	45×40	8×10	51	—	—	
P ₁₅	〃	53×33	27×31	12	15×17	38	
P ₁₆	〃	38×67	24×57	10	17×32	16	

第 8 号建物跡（第48図、第20図版、第21表）

本遺構はD～E、3～4グリッドにかけて検出した掘立柱建物跡である。付近に掘り方を含む柱穴群が散在するが、全体的な平面規模は南北が3間（6.1m）東西が2間（3.3m）を測る東西に長い建物跡である。P₁、P₂の間には柱穴を検出する事ができなかった。

柱穴はやや不整の円形を呈している。間尺は各間とも統一性に欠けるが平均して1.8m～2.1mである。柱穴覆土は黒褐色土、黄黒褐色土の2層に分けられる。建物方向N-31°Eを向いている。

遺物は出土していない。



第48図 第8号建物跡

第21表 第8号建物跡ピット形態表

No.	計測値単位 (cm)				柱痕単位 (cm)		柱間距離 (m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	円形	27×26	17×17	37	—	—	2 (P ₁ —P ₉)
P ₂	〃	35×36	18×15	32	16	32	3.8
P ₃	楕円形	32×30	21×16	32	16	32	1.9
P ₄	〃	48×45	31×36	22	22	44	2.1
P ₅	不整形円形	26×30	12×15	43	15	45	1.9
P ₆	〃	26×25	15×20	—	—	—	1.5
P ₇	〃	30×36	20×20	24	18	29	1.8
P ₈	楕円形	32×42	17×15	28	—	—	2.0
P ₉	〃	40×35	22×23	25	—	—	2.0
P ₁₀	〃	30×28	15×16	35	—	—	1.8
P ₁₁	円形	34×34	22×18	26	—	—	2.1
							2 (P ₆ —P ₁₁)

第9号建物跡 (第49図、第20図版、第22表)

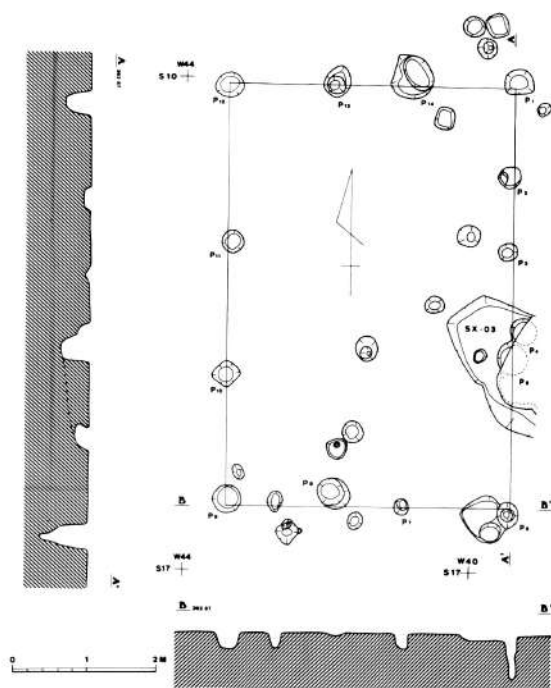
本遺構はD～E、2～3グリッドにかけて検出された建物跡で、第1号溝の北側に位置し、第3号遺構を切った状態で検出された。遺構検出面は第4層上面である。付近に柱穴群が散在

第3章 第3節掘立柱建物跡

するが、プランは南北3間(5.9m)東西3間(4.0m)を測る南北に長い建物跡と考えられるが、間尺が不統一であり疑問が残るが、一応建物跡として報告することとした。南北柱列西辺の軸線は真北を向く。

柱穴は平均して、不整形円形を呈しており、柱痕を確認できたのはP₈、P₁₃の2個である。柱穴覆土は黄黒褐色土の自然堆積をしており、全体的にしまりがない。

遺物は出土していない。



第49図 第9号建物跡

第10号建物跡(第50図、第21図版、第23表)

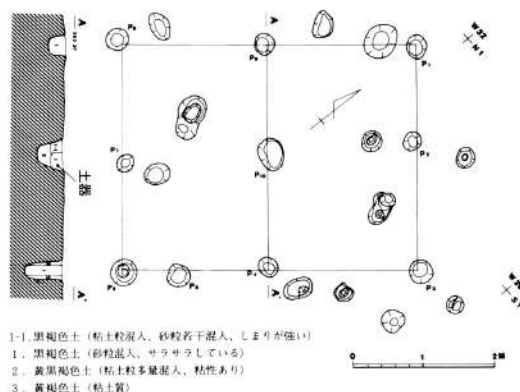
本遺構は第1号櫓列の北側に位置し、F～G、4～5グリッドにかけて検出した建物跡である。柱穴がまわりに数多く散在しているため、プランの全体像を把握することが困難であったが、柱穴の深さ、間尺との関連からみて2間×2間(3.2m×4.2m)の建物跡と考えられる。P₉は深さ21cmを測るが、P₁～P₁₀はすべて33cm～50cmと深い。東側柱列の軸線はN-49°Eである。

柱穴の形態は平均して円形を呈し、柱穴覆土は1層～2層に分けられ、自然堆積である。遺物はP₁₀柱穴より出土しているが、小片で図化できるものではなく、時期も不明である。

第3章 第3節 掘立柱建物跡

第22表 第9号建物跡ピット形態表

No.	計測値単位 (cm)				柱痕単位 (cm)		柱間距離 (m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	隅丸方形	35×42	20×26	35	—	—	1.0
P ₂	楕円形	30×35	25×30	10	—	—	1.2
P ₃	〃	26×30	12×17	6	—	—	
P ₄	〃	37×40 (推定)	28×30 (推定)	15	—	—	2.2
P ₅	〃	50×50 (推定)	33×40 (推定)	40	—	—	1.5
P ₆	〃	38×30	18×16	65	18	65	1.1
P ₇	不整円形	23×20	10×10	22	—	—	1.5
P ₈	円形	45×46	22×25	38	—	—	1.8
P ₉	隅丸方形	40×40	30×30	22	—	—	1.9
P ₁₀	円形	38×42	22×21	18	—	—	2.2
P ₁₁	不整円形	33×33	22×23	13	—	—	1.5
P ₁₂	楕円形	35×42	23×27	16	—	—	1.2
P ₁₃	不整円形	45×35	32×24	25	24	25	1.5 (P ₁ —P ₁₄)
P ₁₄	不整形	53×36	44×24	30	—	—	



第50図 第10号建物跡

第11号建物跡 (第51図、第21図版、第24表)

C～D、5～6 グリッドより検出され、1号住居跡内に位置するが、1号住居跡を切って構築されている所から、新旧関係は、11号建物の方が新しいと考えられる。また1号住居跡カマドの右袖を、P₆が切って構築されている。構造は南北に1間、東西に2間で、全体規模は北辺2.6m、東辺2.6m、西辺2.6mを測り、正方形を呈する小規模な建物と考えられる。北側柱列1.3m + 1.3m、南側柱列1.3m + 1.3mを測り、東側 (P₁～P₂)、西側 (P₄～P₅) においては柱間に柱

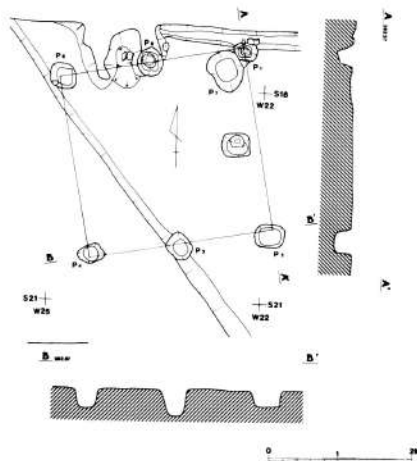
第3章 第3節掘立柱建物跡

第23表 第10号建物跡ピット形態表

No.	計測値単位 (cm)				柱痕単位 (cm)		柱間距離 (m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	楕円形	35×30	22×18	38	—	—	2.1 (P ₁ -P ₆)
P ₂	〃	25×27	15×13	34	—	—	1.4
P ₃	円形	33×35	20×20	49	—	—	1.8
P ₄	〃	27×30	15×15	48	15	48	2.1
P ₅	〃	32×32	22×20	50	—	—	2.1 (P ₄ -P ₆)
P ₆	〃	37×38	26×25	34	20	—	—
P ₇	楕円形	27×25	15×12	33	—	—	1.6
P ₈	円形	32×34	18×20	45	—	—	1.8
P ₉	〃	32×30	20×17	21	—	—	2.1
P ₁₀	不整楕円形	46×45	38×24	33	—	—	1.6

穴を見ない。建物方向はN-11°-Wを示す。

1号住居跡の平面実測完了後、主柱穴を確認中、本遺構の存在に偶然気付いた為、地層の断面観察は記録できなかったが、掘り方埋土は砂質の黒褐色土である。



第51図 第11号建物跡▶

第24表 第11号建物跡ピット形態表

No.	計測値単位 (cm)				柱痕単位 (cm)		柱間距離 (m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	不整形	27×30	16×19	26	13×13	—	(P ₁ -P ₆) 1.3
P ₂	隅丸方形	42×32	25×29	22	—	—	2.6
P ₃	〃	38×32	23×20	34	—	—	1.3
P ₄	〃	25×32	21×20	25	—	—	1.3
P ₅	〃	35×35	23×20	26	—	—	2.6
P ₆	円形	42×37	27×24	38	22×17	—	1.3
P ₇	不整形	60×46	30×27	42	—	—	備考 1号住居に伴うピット

第4節 土 坑

第1号土坑（第13図、第22図版）

〔検出状況〕 F～G、10～11グリッドに位置し、第5号住居跡を切り、第3号溝に切られている。検出面は第4層面であり、第5号住居跡の平面プランの検出作業によって検出した土坑である。

〔プラン・規模・方向〕 第5号住居跡、第3号溝との重複によって測定は困難だが、残存の大きさは2.9m×2.0mを測る不整形を呈する。最大深部は検出面から50cmである。

〔覆土〕 4層からなり、自然堆積状態を呈する。第1層は黄黒褐色土、第2層はほとんど砂質の灰褐色土、3層は暗黒褐色土、4層は砂粒混入の黄褐色土である。

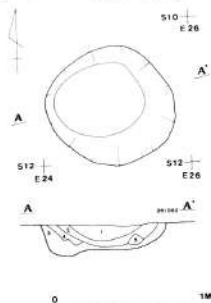
〔壁・底面〕 底面は比較的平坦で叩きしめられた様子はない。壁の立ち上がりは緩やかで鍋底状を呈する。東側は第5号住居跡との近接によって、急な立ち上がりを示し、住居跡との関連からみて、貯蔵穴とも考えられるが、出土遺物が殆どなく、土坑の性格づけは困難である。

〔遺物〕 出土していない。

第2号土坑（第52図）

〔検出状況〕 E-4グリッドに位置する遺構である。検出面は第4層面の黒褐色土である。第7号住居跡の近く、南西側に当り、始めは住居跡の可能性が強く、遺構の確認作業を続けた結果、本遺構のみの検出に終わった。

〔プラン・規模・方向〕 82cm×88cmを測る円形の焼土である。



1. 黒褐色土（粘土粒混入）粘土っぽい
2. 赤褐色土（灰・焼土・多量混入）
3. 黄褐色土
4. 黄黒褐色土
5. 粘土ブロック

第52図 第2号土坑

〔覆土〕 断面観察では大別して3層に分けられ、自然堆積を呈し、2層面から多量の炭、焼土が出土した。底面は叩きしめられた様子はない。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

第3号土坑（第53図、第22図版）

〔検出状況〕 F-3グリッドに位置する。検出面は3層面上において遺構の検出作業中焼土を検出し、カマドの煙道を想定し、確認作業を行った結果、本遺構のみで終わった。

〔プラン・規模・方向〕 42cm×78cmを測る隅丸長方形を呈し、深部は19cmあり、断面形はカマド煙出部とも考えられる。煙道先端ピットは38cm×40cmを測る不整形円形を呈し、長軸線はN-23°Eである。

第3章 第4節土坑

〔覆土〕 5層からなり、自然堆積を呈する。第3層面で焼土、灰、と鳥骨と思われるものが多量に出土した。本遺構は全体的に、焼土、炭化物が多く検出された状態からみて長期間にわたって、火を焚いた施設と思われる。

〔遺物〕 細かい鳥骨が出土しているがその他は何も出土していない。



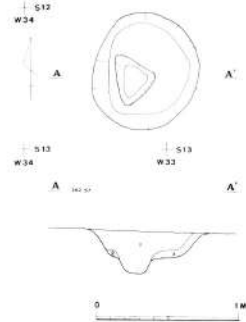
第53図 第3号土坑

〔検出状況〕 D-4グリッドに検出された遺構で、検出面は第3層面である。

〔プラン・規模・方向〕 平面形は楕円形を呈し、底部に三角形のビット1個を持つ。プランの大きさは82cm×73cm、深さは浅い所で18cm、中心ビットの深部は30cmを測り、内部、底部共叩きしめられており、底部は平坦である。

〔覆土〕 2層からなり、自然堆積を呈する。

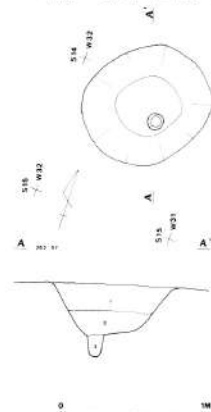
〔遺物〕 遺物は出土していない。



第54図 第4号土坑

第5号土坑 (第55図、第22図版)

〔検出状況〕 D-5グリッドに位置し、第4号土坑より1.6m東南の距離に当る。検出面は第3層面である。



1. 黄褐色土 (粘土粒・細粒・若干炭入)
2. 黄褐色土 (粘土粒・細粒・多量炭入)
3. 黄褐色土 (粘土粒・細粒・粘性あり)

第55図 第5号土坑

〔プラン・規模・方向〕 91cm×79cm、深さ52cmを測る。平面形は楕円形を呈する。底部に小ビット1個を持ち径12cm、深さ34cmを測る。

〔覆土〕 3層からなり、1層2層共黒褐色土を呈し、3層、ビット内の覆土は黄褐色土で自然堆積の状態を呈する。

〔壁・底面〕 壁の立ち上がりの角度は118°と緩やかであり、内面、底部は固く叩きしめられ、すり鉢状を呈している。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

第6号土坑 (第56図、第22図版)

〔検出状況〕 D-5グリッドに位置し、第5号土坑より1.65m東南の距離に当る。検出面は第3層面である。第4号土

第3章 第4節土坑

坑、第5号土坑、第6号土坑の距離は同間隔である。

〔プラン・規模・方向〕 上面は1.2m×0.8m、底面は1m×0.7m、深さは12cm～25cmを測り不整形を呈している。

〔覆土〕 2層からなり、自然堆積らしい層位を示す。

〔壁・底面〕 壁の立ち上がりは一部直角に近い急な立ち上がりを示すが、その他の角度は150°と緩やかである。底面は、ほぼ平坦であるが、片側に65cm×74cmのピット状のくぼみを呈する。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

第7号土坑（第57図、第22図版）

〔検出状況〕 E-5グリッドに位置し、検出面は第4層面である。

〔プラン・規模・方向〕 上面は90cm×62cm、底面は66cm×44cm、深さ10cmと浅い。プランは隅丸長方形を呈している。

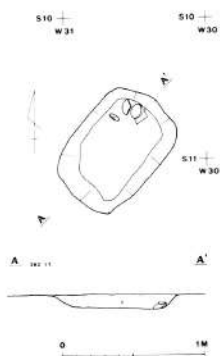
〔壁・底面〕 壁面の立ち上がりは150°の角度をもち「逆台形」を呈している。底面は平坦であり、固く叩きしめられている。遺物は底面に貼り付いた状態で、2点検出された。

〔覆土〕 1層であるが自然堆積を呈している。

〔遺物〕 底面より、土師器の杯、甕の底部が出土した。

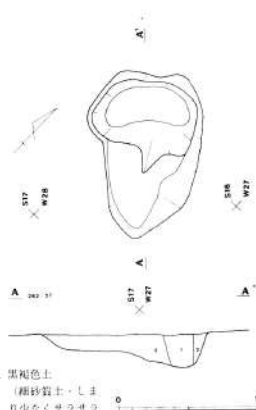
土師器（第58図、第35図版）

甕（1） 土坑内より出土した甕の底部である。底部が突出し体部との境にくびれを有し、体部は



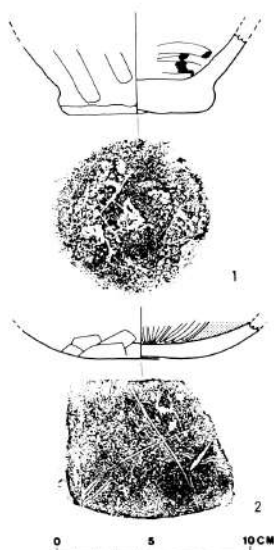
1. 黒褐色土（軽微粒・砂粒・若干混入）

第57図 第7号土坑実測図



1. 黒褐色土
（軽微粒・砂粒・し
り少なくサラサラ
している）
2. 黄黒褐色土
（粘土質・粘性は
弱く砂粒含む）

第56図 第6号土坑



第58図 第7号土坑出土遺物

第3章 第4節土坑

直線的に外反すると思われる。外面底部には木葉痕が見られ、体部下半には手持ちヘラケズリの後、ヨコナデが施されている。内面は全体に手持ちヘラケズリ、ナデが施されているが、概して作りは粗い。底径 7.8cmを測る。

杯(2) 土坑内より出土した杯の底部である。底部は丸底風平底を呈し、外面には手持ちヘラケズリが観察される。内面には放射状のヘラミガキが観察され、その後、黒色処理が施されている。非ロクロ成形である。底部に「×」の線刻が見られる。焼成は良好。胎土は密で堅緻である。外面色調は灰褐色を呈する。

第25表 第7号土坑跡出土土器一覧表

名称	器形	図	写真位置	層位	口径	胴径	底径	脚高	高さ	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	甕	58-1	35-3		覆土		7.8			非ロクロ	手持ちヘラケズリヨコナデ	手持ちヘラケズリヘラナデ	本葉痕
々	杯	58-2	35-7		々					々	手持ちヘラケズリ	ミガキ	内面「メ」印 丸底風平底付

第8号土坑(第59図、第5図版)

〔検出状況〕 Cーグリッドに位置し、第4号住居跡、北東コーナー床面上に検出された遺構である。住居跡内床面上の焼土を除去し、柱穴検出作業中において、焼土直下に検出された。

〔プラン・規模・方向〕 第6号溝に切られ、測定は困難であるが、残存の大きさは 2.2m × 2.5m、深さは60cmを測る不整形を呈する土坑である。

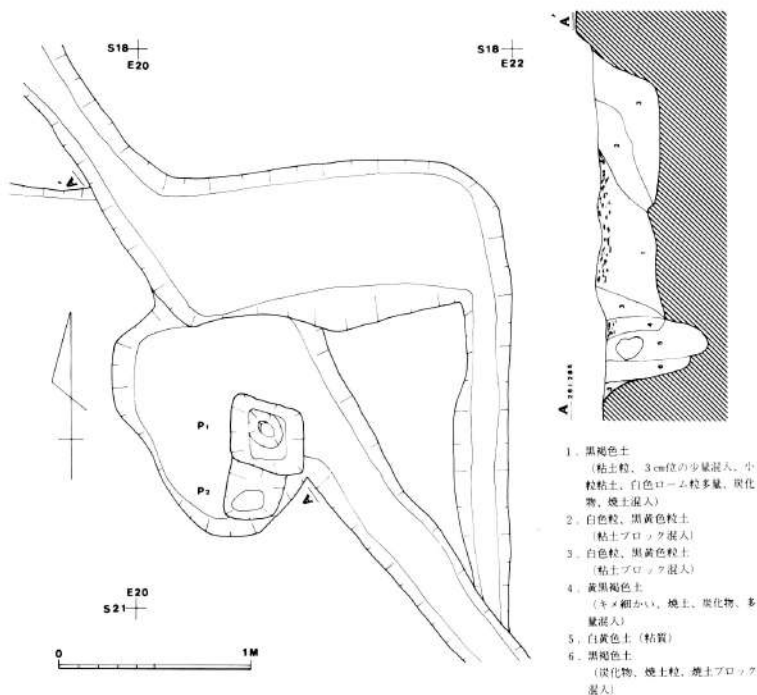
〔覆土〕 大別して5層に分けられ、自然堆積を呈する。土坑内に掘り方を持った柱穴が2個検出され、断面観察によると、ある時期に、土坑を埋土し柱を構築したものと考えられる。

〔壁・底面〕 壁は急な立ち上がりを呈し、底面は平坦であり、叩きしめられた様子はない。住居跡の北東コーナー部の施設であり、関連からみてある時期の第4号住居跡に付随する貯蔵穴とも考えられる。

〔ピット〕 2個検出され、いずれも掘り方をもつ柱穴であり、第4号住居跡のある時期の主柱痕と考えられる。P₁は掘り方が70cm×80cmを測る不整形長方形を呈し、柱痕が30cm位の丸柱と考えられる。柱穴の深部は 1.1mを測る。P₂は掘り方が55cm×60cm、深部は65cmを測る不整形長方形を呈する。

〔遺物〕 遺物は出土していない。

第3章 第5節その他の遺構



第59図 第8号土坑

第5節 その他の遺構

第1号遺構（第4図、第23図版）

〔検出状況〕 遺跡の西南部に位置し、B-4～5、C-4～5グリッドより検出した円形遺構で、第1号住居跡を切った状態で検出された。検出面は耕作土の直下暗黄褐色土の第3層である。この遺構は前回試掘調査（昭和54年）によって、近代以後の稲堆の排水溝跡と確認されたものである。

〔プラン・規模・方向〕 径が4.4m×4.9m、溝幅45cm、深さ15cmを測る楕円形を呈する環

第3章 第5節その他の遺構

状遺構である。

〔覆土〕 2層からなり、第1層が黄黒褐色土、第2層が黒褐色土を呈し、自然堆積である。

〔ビット〕 中心に柱穴状のビットが1個検出している。1m×0.4mの不整形を呈し、深さ55cmを測る。ビットの覆土は4層に分けられるが攪乱状態で観察されたもので稲堆の中心杭跡を埋戻した土と考えられる。ビット底部に機械油と思われる液体がわずかに観察された。

〔断面形〕 溝断面はU字状を呈し、底面は平坦であり法面は角度が120°となだらかな立ち上がりである。

〔遺物〕 溝内より3点の土師器が出土しているが、いずれも小片であり図化できるものではない。

第2号遺構（第60図、第23図版、第26表、第27表）

〔検出状況〕 D-11、12グリッドにかけて検出した環状遺構である。検出面は黄黒褐色土の第3層である。第1号遺構同様に稲堆の排水溝とも考えられるが、規模も大きく、疑問が残る。

〔プラン・規模・方向〕 外径が6.4m×6.3m、溝幅が0.5m×1m、深さ28cmを測り不整形円形を呈している。

〔覆土〕 2層からなり、第1層は砂粒が多量に混入された黒褐色土、第2層が砂礫を含む黄褐色土で、自然堆積を呈している。

〔ビット〕 柱穴と思われるビットが12個、土坑状のビットが2個検出した。P₁～P₅までの柱穴は柱痕も観察され、掘り方をもち柱間が約1.8mとほぼ等しく建物跡とも考えられるが、対応する柱穴は検出する事ができなかった。P₁₂、P₁₃は厚い粘土層が覆いかぶった状態に堆積されており、大きさは未確認で終った。

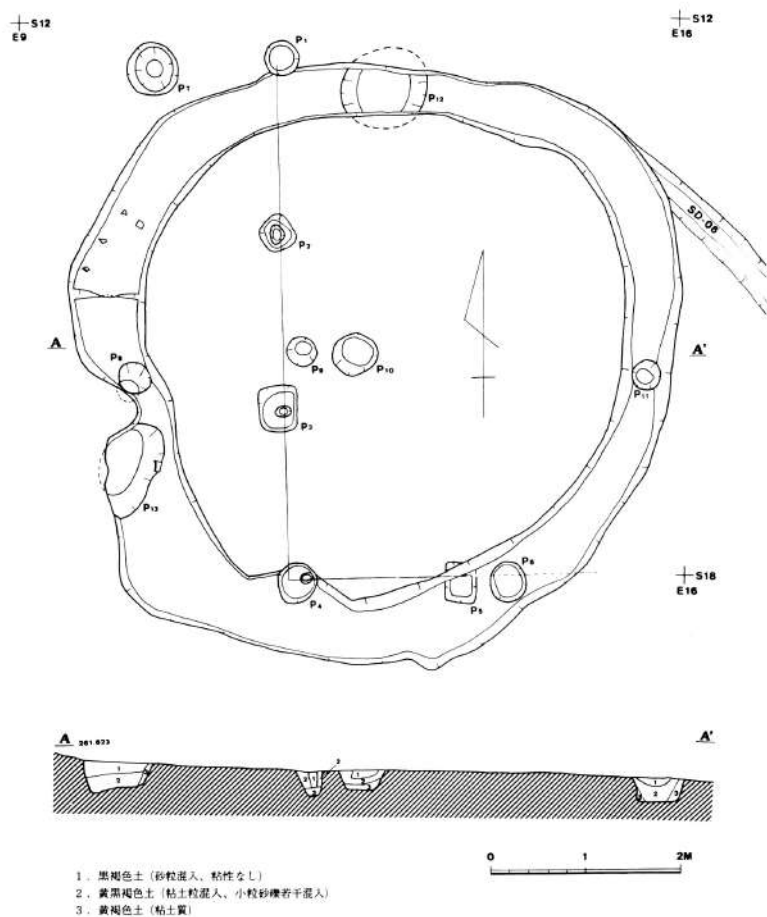
〔断面形〕 ほぼ「逆台形」状を呈している。西側では法面の角度は100°、東側では法面の角度が110°とやや直角に立ち上がっている。

〔遺物〕 溝覆土中の第1層から45点出土しているが、いずれも小片であり図化できたものは4点である。

土師器（第61図、第35図版）

甕（1） 遺構溝内上層より出土した甕の口縁部、約 $\frac{1}{6}$ を図上復元実測した。非クロロ成形である。頸部で垂直に立ち上がり、口縁部で大きく直線的に外反する。外面口縁部にはヨコナデ、手持ちヘラケズリが施され、頸部にはハケ目が巡らされているのが観察される。内面には、かすかにヨコナデ、手持ちヘラケズリが見られ、ヘラ調整がなされている。焼成は普通、明橙褐色を呈し胎土はやや荒いが、まざり気はない。推定口径21.5cm、推定頸径16.5cmを測る。

第3章 第5節その他の遺構



第60図 第2号遺構

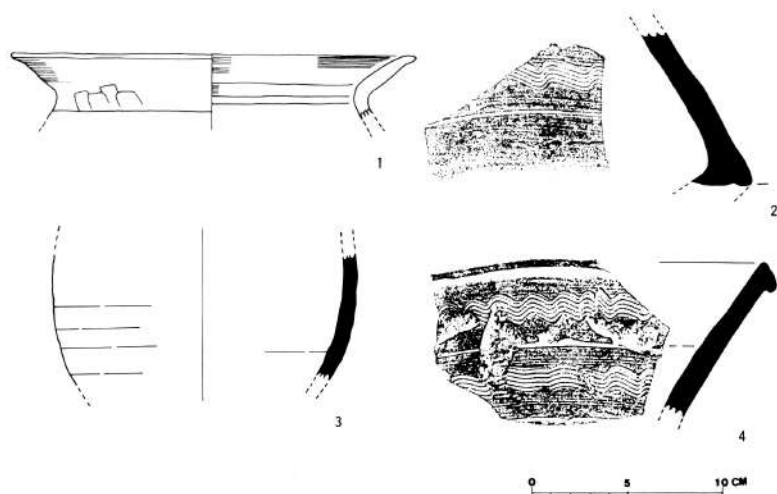
第3章 第5節その他の遺構

須恵器（第61図、第35図版）

甕（2） 遺構溝内より出土した大甕と思われる肩部から頸部にかけての破片で、ロクロ成形である。肩部との貼付部が観察できる。外面には6本の波状紋が、またその下方には一条の線が巡らされている。内面には内面貼付調整が施されている。

壺（3） 遺構溝2層面より出土した壺の破片を図上復元実測した。体部中央の一部と考えられ内外面共にロクロ成形である。外面に緑色の釉が、かけられている。焼成は良好胎土は荒く砂粒を含む。外面は緑褐色、内面は灰褐色を呈する。

甕（4） 遺構溝内より出土した（2）と同形の大甕と思われる口縁部破片を図上実測した。頸部から直線的に急な外反を呈している。口縁端部に下方返りがあり口唇部に一条の線が見られる。外面体部には6本の波状紋が巡らされ2本の沈線が施されている。内面はロクロ成形の後、ヘラ調整が施されている。焼成は良好、胎土は緻密で堅い。色調は灰色を呈する。推定口径32.5cmを測る。



第61図 第2号遺構出土遺物

第26表 第2号遺構跡出土土器一覧表

名称	器形	図写	真位置	層位	口径	胴径	底径	高さ	胴高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	甕	61-1		上部	21.5(測定)					非ロクロ	ヘラ目、ヨコナデナ 手持ちヘラヤスリ	手持ちヘラヤスリ	釉付(無定) 32.5cm
須恵器	壺	61-2	35-4	覆土						ロクロ	波状紋	貼付調整	
々	壺	61-3	35-5	2層						々	々	々	緑色釉
々	甕	61-4	35-6	覆土	32.5(測定)					々	々	ヘラ調整	

第27表 第2号遺構ビット形態表

No.	計測値単位 (cm)				柱痕単位 (cm)		柱間距離 (m)
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P ₁	円形	37×38	26×27	19	—	—	1.8
P ₂	隅丸方形	40×40	30×30	35	22×16	40	1.9
P ₃	〃	50×42	38×34	30	12×18	34	1.8
P ₄	楕円形	44×43	34×35	40	12×15	45	1.8
P ₅	隅丸方形	43×35	22×24	38	—	—	
P ₆	楕円形	43×38	35×28	51	—	—	
P ₇	〃	55×57	18×18	24	—	—	
P ₈	〃	33×35	23×23	30	—	—	
P ₉	〃	32×35	15×18	26	10×10	17	
P ₁₀	〃	45×47	30×32	22	26×26	10	
P ₁₁	〃	33×30	15×17	33	—	—	
P ₁₂	不整楕円形	87×89(推定)	53×53(推定)	54	—	—	
P ₁₃	不整楕円形	104×58	75×40	50	—	—	

第3号遺構 (第62図、第28表)

〔検出状況〕 遺跡の西端部のD-3グリッドに位置し、第9号建物跡と重複関係に当る。

検出面は第4層上面の黄黒褐色土である。

〔プラン・規模・方向〕 3.7m×2.3m、溝の深さ20cm～40cmを測る不整形を呈する遺構である。周囲が溝状を呈した環状遺構である。

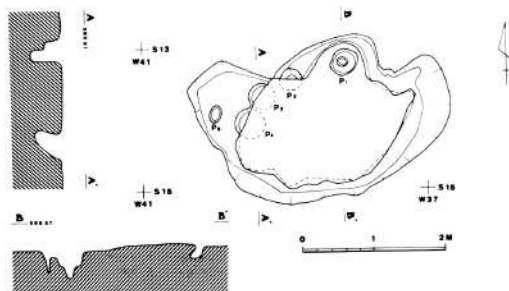
〔覆土〕 分層することが困難な土であり、黒褐色土に黄色粘土ブロックが混入した土が堆積している。

〔ビット〕 遺構上に5個の柱穴と思われるビットが検出されたが、P₁、P₃、P₄は第9号建物跡に該当するが、その他は配置が不統一である。P₃、P₄の柱穴の大きさは未確認である。

〔断面形〕 中心の土が

溝内に覆いかぶさるような状態を呈している。外側の溝では法面が30°の角度で立ち上がり、内側では奥壁にめり込んだ状態を呈する。

〔遺物〕 遺物はなにも出土していない。



第62図 第3号遺構 ▶

第3章 第5節その他の遺構

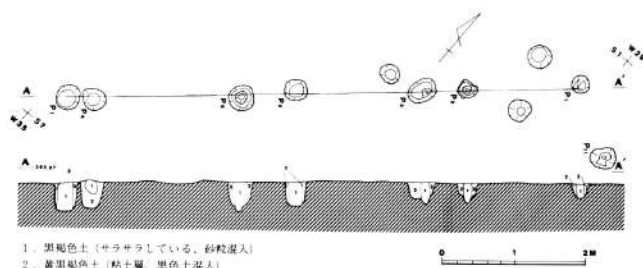
第28表 第3号遺構ピット形態表

No.	計 測 値 単 位 (cm)				柱痕単位 (cm)		備 考
	形 状	上面径	底面径	深 さ	径	深 さ	
P ₁	円 形	37×38	28×31	20	14×17	37	S B 09—柱穴
P ₂	〃	30×30(推定)	10×15(推定)	32	—	—	
P ₃	楕 円 形	35×40(推定)	25×25(推定)	40	—	—	S B 09—柱穴
P ₄	円 形	45×45(推定)	30×30(推定)	38	—	—	S B 09—柱穴
P ₅	楕 円 形	25×18(推定)	17×12(推定)	15	—	—	

第1号棚列跡 (第63図、第21図版、第29表)

E～F、4～5グリッドにかけて検出された柱列で、北西へ 5.3m 離れて農道に沿って検出された柱列と相対し、まったく平行に位置する。P₁～P₇までの内、P₅は第10号住居跡の柱穴と重複関係にある。柱穴距離は不統一であるが、鮮明な掘り方様を呈し、一直線上に並ぶ為、一応、第1号棚列として説明することにした。掘り方埋土は2層からなり、1層は砂粒混入のサラサラした黒褐色土で、2層は黒色土に粘土混りの黄黒褐色土である。

遺構の南北軸方向はN-50°-Eを示す。



第63図 第1号棚列

第29表 第1号棚列跡ピット形態表

No.	計 測 値 単 位 (cm)				柱痕単位 (cm)		柱 間 距 離 (m)
	形 状	上面径	底面径	深 さ	径	深 さ	
P ₁	円 形	24×25	9×15	20	—	—	1.6
P ₂	不 整 形	27×27	22×18	21	12×12	27	0.6
P ₃	楕 円 形	42×31	31×20	23	15×11	30	1.8
P ₄	円 形	31×30	20×18	34	—	—	(P ₄ —P ₆) 2.8
P ₅	〃	37×35	29×27	34	18×16	42	—
P ₆	〃	34×31	19×17	40	—	—	0.4
P ₇	〃	35×36	25×25	40	—	—	

第3章 第6節 遺構外出土遺物

第6節 遺構外出土遺物

表土及び、包含層から出土した土器片の数は74点とかなり多いが、いずれも小片のため図化、実測できた物は少なく、E-4グリッド、C-8グリッド付近から出土した甕片2点、また第3層遺構確認面精査作業中に出土した石1点の、わずかに3点のみが実測可能な物であった。しかしこれら3点とも、住居跡との関連は不明である。

土師器（第64図、第35図版、第30表）

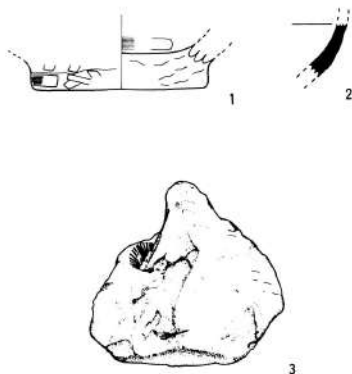
甕（1） E-4グリッド付近より出土した甕の底部、約 $\frac{1}{3}$ を図上復元実測した。底部は平で垂直に立ち上り、体部は外反する形を呈すると思われる。外面底部には全面にナデ調整が施されている為、仕上りが丁寧である。底部と体部との境に稜線を有し、手持ちヘラケズリ痕とヨコナデが観察される。内面には、浅い手持ちヘラケズリ痕とヨコナデが入念に施されているため器面の仕上りは外面同様に丁寧である。推定底径約9.8cmを測る。

須恵器（第64図、第35図版、第30表）

甕（2） C-8グリッド付近の確認面より出土したロクロ成形による中世陶器と思われる。小破片のため器種の判断は困難である。陶土の中に微粒黒石砂粒が見られる。外面色調は灰色、内面は黒褐色を呈する。

その他の出土遺物

石（3） 第3層遺構確認面精査作業中に出土した石である。一部に幅1.8cm×1.5cmの二枚貝の化石の跡が見られる。幅9.9cm、長さ10.4cmを測る。



第64図 遺構に伴わない
出土遺物

第30表 遺構外出土土器一覧表

名称	器形	図	写真	位置	層位	口徑	底徑	高さ	脚高	成形	外面調整	内面調整	その他
土師器	甕	64-1	64		覆土		9.8			非ロクロ	手持ちヘラケズリ ヘラナデ、ヨコナデ	手持ちヘラケズリ ヨコナデ	
須恵器	×	64-2			確認面					ロクロ			中世陶器
石	×	64-3				幅	9.9		長	10.4			二枚貝の化石

第3章 第6節遺構外出土遺物

第31表-1 ビット形態表

No	計測値				単位 (cm)	No	計測値				単位 (cm)
	形状	上面径	底面径	深さ			形状	上面径	底面径	深さ	
P ₁	楕円形	25×20	21×12	8		P ₅₆	楕円形	23×35	14×25	32	
P ₂	〃	18×25	14×18	10		P ₅₇	〃	28×40	20×30	26	
P ₃	〃	32×22	12×12	12		P ₅₈	円形	32×32	18×16	21	
P ₄	隅丸方形	26×26	14×13	12		P ₅₉	〃	27×28	13×15	21	
P ₅	不整楕円形	36×25	24×20	14		P ₆₀	不整形	50×35	40×23	30	
P ₆	楕円形	30×20	15×7	14		P ₆₁	円形	30×34	18×14	33	
P ₇	円形	26×25	15×16	12		P ₆₂	〃	30×30	17×18	37	
P ₈	不整楕円形	35×26	23×18	15		P ₆₃	〃	30×32	12×12	40	
P ₉	不整形	26×18	20×10	9		P ₆₄	〃	37×34	28×22	18	
P ₁₀	円形	24×24	20×20	14		P ₆₅	不整円形	42×42	32×30	20	
P ₁₁	不整形	22×22	15×12	12		P ₆₆	円形	32×32	23×23	15	
P ₁₂	〃	50×26	45×18	13		P ₆₇	〃	30×32	23×24	13	
P ₁₃	不整楕円形	45×66	36×55	16		P ₆₈	不整形	35×35	25×23	12	
P ₁₄	円形	33×30	26×20	15		P ₆₉	楕円形	30×20	23×10	19	
P ₁₅	〃	25×23	18×16	11		P ₇₀	不整円形	20×20	10×10	19	
P ₁₆	〃	35×35	25×25	11		P ₇₁	〃	25×25	15×12	16	
P ₁₇	楕円形	82×56	65×42	17		P ₇₂	方形	28×30	15×18	22	
P ₁₈	不整楕円形	53×42	38×30	26		P ₇₃	楕円形	30×23	27×13	22	
P ₁₉	〃	50×62	40×45	12		P ₇₄	〃	24×15	8×6	12	
P ₂₀	不整形	67×52	55×42	25		P ₇₅	円形	28×30	25×22	20	
P ₂₁	不整円形	47×42	38×33	29		P ₇₆	〃	35×35	22×22	33	
P ₂₂	円形	17×17	13×12	11		P ₇₇	〃	38×32	18×18	30	
P ₂₃	〃	20×18	11×10	20		P ₇₈	楕円形	24×32	12×15	20	
P ₂₄	〃	33×32	25×22	22		P ₇₉	円形	34×33	15×13	49	
P ₂₅	不整形	103×75	87×62	16		P ₈₀	方形	32×25	22×20	12	
P ₂₆	円形	32×32	23×25	30		P ₈₁	円形	32×35	22×25	17	
P ₂₇	〃	35×30	16×15	21		P ₈₂	不整形	30×25	18×18	23	
P ₂₈	不整形	105×80	90×57	29		P ₈₃	方形	35×32	27×23	22	
P ₂₉	〃	35×33	17×16	28		P ₈₄	円形	30×30	21×20	14	
P ₃₀	楕円形	25×22	18×15	17		P ₈₅	不整方形	42×40	32×30	24	
P ₃₁	〃	46×34	32×25	19		P ₈₆	不整形	100×95	90×78	22	
P ₃₂	不整形	85×55	60×42	17		P ₈₇	楕円形	35×30	27×27	23	
P ₃₃	楕円形	25×32	22×25	9		P ₈₈	不整形	55×25	20×20	20	
P ₃₄	隅丸長方形	57×75	48×60	14		P ₈₉	〃	28×48	18×40	34	
P ₃₅	円形	25×30	12×15	21		P ₉₀	楕円形	75×55	45×30	28	
P ₃₆	〃	26×28	14×16	23		P ₉₁	円形	30×35	15×18	20	
P ₃₇	〃	27×25	18×15	11		P ₉₂	〃	30×28	20×20	23	
P ₃₈	〃	32×27	8×8	22		P ₉₃	〃	18×20	8×10	11	
P ₃₉	隅丸長方形	25×37	15×20	30		P ₉₄	不整形	75×30	35×20	18	
P ₄₀	円形	28×33	20×25	35		P ₉₅	円形	25×28	15×15	24	
P ₄₁	楕円形	25×35	15×20	33		P ₉₆	方形	35×35	25×25	33	
P ₄₂	不整形	20×35	15×25	18		P ₉₇	楕円形	35×30	25×18	31	
P ₄₃	円形	28×22	—	42		P ₉₈	不整楕円形	38×28	30×16	22	
P ₄₄	〃	30×32	18×18	20		P ₉₉	楕円形	28×25	12×10	35	
P ₄₅	〃	22×22	—	57		P ₁₀₀	〃	23×20	13×10	26	
P ₄₆	不整形	68×43	55×30	20		P ₁₀₁	不整形	65×35	50×25	28	
P ₄₇	〃	92×54	80×48	26		P ₁₀₂	円形	35×35	25×20	29	
P ₄₈	楕円形	32×40	25×30	23		P ₁₀₃	〃	30×30	22×22	13	
P ₄₉	円形	28×38	18×20	28		P ₁₀₄	不整形	50×30	40×22	32	

第3章 第6節 遺構外出土遺物

第31表-2 ビット形態表

No.	計測値				単位 (cm)		計測値				単位 (cm)
	形状	上面径	底面径	深さ			形状	上面径	底面径	深さ	
P ₉₀	円形	28×28	18×22	12		P ₁₀₀	楕円形	40×34	25×25	19	
P ₉₁	〃	36×32	25×25	20		P ₁₀₁	不整形	30×32	16×17	19	
P ₉₂	楕円形	30×43	26×35	22		P ₁₀₂	円形	30×32	15×16	20	
P ₉₃	円形	28×25	20×15	11		P ₁₀₃	〃	30×32	15×20	13	
P ₉₄	楕円形	20×23	10×12	10		P ₁₀₄	楕円形	25×25	15×12	22	
P ₉₅	方形	46×40	40×32	25		P ₁₀₅	円形	50×30	40×15	19	
P ₉₆	不整形	41×75	40×52	26		P ₁₀₆	不整形	25×28	20×20	14	
P ₉₇	楕円形	47×40	40×28	28		P ₁₀₇	楕円形	40×25	23×17	10	
P ₉₈	〃	30×25	20×20	13		P ₁₀₈	不整形	37×40	25×25	33	
P ₉₉	方形	35×28	28×20	20		P ₁₀₉	楕円形	43×45	20×25	21	
P ₁₀₀	円形	35×35	25×22	11		P ₁₁₀	〃	55×50	42×35	8	
P ₁₀₁	楕円形	25×32	18×25	17		P ₁₁₁	不整形	45×60	25×50	17	
P ₁₀₂	〃	45×40	35×28	40		P ₁₁₂	円形	32×40	22×26	22	
P ₁₀₃	不整形	50×42	40×35	40		P ₁₁₃	不整形	30×45	25×30	18	
P ₁₀₄	隅丸長方形	58×45	20×25	18		P ₁₁₄	楕円形	28×25	16×13	15	
P ₁₀₅	円形	60×60	13×45	23		P ₁₁₅	円形	25×22	16×15	7	
P ₁₀₆	〃	35×38	12×25	23		P ₁₁₆	〃	26×28	20×17	10	
P ₁₀₇	〃	33×35	33×18	28		P ₁₁₇	〃	25×28	15×15	8	
P ₁₀₈	不整形	32×32	30×12	38		P ₁₁₈	〃	26×30	13×17	12	
P ₁₀₉	円形	42×42	45×31	24		P ₁₁₉	〃	32×32	18×16	22	
P ₁₁₀	不整形	42×42	20×30	26		P ₁₂₀	〃	30×30	21×18	7	
P ₁₁₁	円形	55×57	40×52	20		P ₁₂₁	〃	26×25	15×14	6	
P ₁₁₂	不整形	33×35	17×15	20		P ₁₂₂	不整形	33×28	22×15	60	
P ₁₁₃	楕円形	58×42	15×25	20		P ₁₂₃	不整形	32×40	25×28	8	
P ₁₁₄	不整形	33×32	18×17	32		P ₁₂₄	楕円形	20×25	12×17	19	
P ₁₁₅	楕円形	26×34	20×12	16		P ₁₂₅	円形	32×32	21×20	12	
P ₁₁₆	不整形	30×30	25×17	24		P ₁₂₆	方形	25×26	26×17	13	
P ₁₁₇	楕円形	32×30	32×22	34		P ₁₂₇	円形	25×22	13×17	12	
P ₁₁₈	円形	42×44	26×25	42		P ₁₂₈	楕円形	26×40	16×32	7	
P ₁₁₉	〃	38×37	30×20	59		P ₁₂₉	〃	38×49	30×40	23	
P ₁₂₀	不整形	40×52	56×43	40		P ₁₃₀	円形	40×38	28×23	23	
P ₁₂₁	円形	38×40	30×30	12		P ₁₃₁	〃	30×32	10×10	24	
P ₁₂₂	不整形	65×45	33×35	29		P ₁₃₂	隅丸方形	32×28	25×22	10	
P ₁₂₃	〃	43×55	20×35	15		P ₁₃₃	不整形	53×112	42×100	23	
P ₁₂₄	〃	45×35	20×25	34		P ₁₃₄	円形	60×50	42×35	33	
P ₁₂₅	円形	30×30	15×20	21		P ₁₃₅	不整形	105×45	65×25	47	
P ₁₂₆	方形	35×33	28×23	22		P ₁₃₆	円形	30×28	22×20	17	
P ₁₂₇	楕円形	35×30	22×10	32		P ₁₃₇	楕円形	28×25	22×16	18	
P ₁₂₈	円形	35×40	15×32	18		P ₁₃₈	〃	50×40	33×28	18	
P ₁₂₉	〃	35×38	18×27	18		P ₁₃₉	円形	36×36	40×22	24	
P ₁₃₀	〃	30×30	25×15	23		P ₁₄₀	〃	50×45	26×26	22	
P ₁₃₁	〃	28×27	40×15	22		P ₁₄₁	〃	35×32	26×23	30	
P ₁₃₂	不整形	35×40	17×28	18		P ₁₄₂	〃	30×30	20×20	31	
P ₁₃₃	〃	35×42	35×32	34		P ₁₄₃	不整形	38×40	25×22	27	
P ₁₃₄	〃	30×35	55×25	21		P ₁₄₄	〃	58×63	50×55	35	
P ₁₃₅	〃	52×45	23×36	27		P ₁₄₅	円形	44×45	32×32	33	
P ₁₃₆	〃	65×70	52×60	14		P ₁₄₆	〃	30×30	17×20	20	
P ₁₃₇	隅丸方形	35×40	23×25	25		P ₁₄₇	隅丸方形	33×30	22×23	13	
P ₁₃₈	不整形	70×40	52×30	18		P ₁₄₈	楕円形	70×78	42×44	33	

第3章 第6節遺構外出土遺物

第31表-3 ビット形態表

No.	計測値				No.	計測値			
	形状	上面径	底面径	深さ		形状	上面径	底面径	深さ
P ₁₈₁	隅丸長方形	68×40	50×33	27	P ₂₀₁	不整形	45×30	25×22	21
P ₁₈₆	隅丸方形	42×36	30×26	23	P ₂₀₄	不整円形	32×25	22×15	12
P ₁₈₈	円形	47×47	37×40	15	P ₂₀₇	円形	30×30	14×16	39
P ₁₉₀	不整形	70×45	57×32	18	P ₂₀₈	方形	30×32	20×22	13
P ₁₉₁	隅丸方形	46×45	36×33	14	P ₂₀₉	円形	26×20	26×15	21
P ₁₉₂	不整形	55×50	45×38	18	P ₂₁₀	＊	35×34	22×22	45
P ₁₉₃	隅丸方形	35×37	27×22	17	P ₂₁₁	隅丸長方形	20×30	10×13	24
P ₁₉₄	不整形	50×56	36×48	17	P ₂₁₂	円形	30×30	20×22	15
P ₁₉₅	隅丸方形	37×42	30×32	14	P ₂₁₃	＊	25×25	15×12	15
P ₁₉₆	隅丸長方形	32×38	26×26	29	P ₂₁₄	＊	43×28	25×15	31
P ₁₉₇	隅丸方形	30×26	20×18	25	P ₂₁₅	＊	30×30	22×24	17
P ₁₉₈	円形	30×30	17×17	9	P ₂₁₆	＊	20×20	12×12	23
P ₁₉₉	隅丸方形	32×32	23×23	52	P ₂₁₇	＊	30×30	18×14	17
P ₂₀₀	不整形	75×45	60×33	15	P ₂₁₈	＊	18×18	10×9	10
P ₂₀₁	円形	23×28	15×22	75	P ₂₁₉	不整円形	27×25	15×15	19
P ₂₀₂	＊	26×28	18×20	19	P ₂₂₀	楕円形	35×40	15×18	38
P ₂₀₃	楕円形	23×25	12×13	17	P ₂₂₁	＊	62×52	48×45	14
P ₂₀₄	円形	35×40	28×27	27	P ₂₂₂	円形	26×15	25×13	18
P ₂₀₅	＊	40×38	32×30	20	P ₂₂₃	＊	30×30	15×15	59
P ₂₀₆	楕円形	70×45	55×40	49	P ₂₂₄	不整円形	48×35	29×30	20
P ₂₀₇	円形	35×38	15×15	32	P ₂₂₅	円形	30×30	22×25	28
P ₂₀₈	不整形	120×53	110×45	26	P ₂₂₆	楕円形	32×34	22×22	28
P ₂₀₉	円形	42×45	32×36	24	P ₂₂₇	不整形	20×22	12×15	14
P ₂₁₀	不整形	58×38	50×30	17	P ₂₂₈	円形	20×18	10×10	24
P ₂₁₁	＊	40×53	32×40	25	P ₂₂₉	＊	30×32	19×25	11
P ₂₁₂	隅丸方形	45×48	50×42	20	P ₂₃₀	＊	58×58	48×42	24
P ₂₁₃	円形	38×33	32×23	42	P ₂₃₁	不整形	45×35	40×28	38
P ₂₁₄	隅丸方形	43×44	37×32	32	P ₂₃₂	＊	60×60	22×25	15
P ₂₁₅	円形	35×35	32×22	42	P ₂₃₃	楕円形	110×85	85×62	37
P ₂₁₆	隅丸方形	60×55	20×43	38	P ₂₃₄	隅丸方形	40×40	32×30	39
P ₂₁₇	不整形	72×35	24×30	40	P ₂₃₅	円形	45×48	33×32	43
P ₂₁₈	隅丸方形	37×36	46×28	14	P ₂₃₆	隅丸方形	44×48	30×35	13
P ₂₁₉	不整形	105×60	65×50	22	P ₂₃₇	＊	30×32	20×22	23
P ₂₂₀	楕円形	80×65	32×55	14	P ₂₃₈	円形	38×36	30×26	57
P ₂₂₁	円形	30×32	95×22	28	P ₂₃₉	楕円形	38×26	25×18	18
P ₂₂₂	＊	25×26	72×18	14					

ま と め

南町E遺跡は、西白河郡矢吹町大字柿ノ内字南町にある。古代の土器が表面採集されるところから、矢吹地区国営総合農地開発事業に伴って、分布調査が行われ、南町B、C、D、Eの遺跡が検出された。

この度、隈戸川、河川局部改良工事に係ることになり、南町E遺跡の緊急調査が実施された。遺跡はゆるやかな東斜面を程し、隈戸川に面している。

この地域は戦後の開拓ブームにより、昭和30年～40年頃、ブルドーザーにより開田され、今回の調査前から遺構は破壊されていることが予測されていた。

調査は昭和61年7月14日～10月6日まで行われ、堅穴住居11軒、掘立柱建物11軒が検出されたが完形な遺構は少なく特に堅穴住居は6号、7号、9号のみが完形であったが他は破壊がはげしく、遺構の残存は $\frac{2}{3}$ 以下である。土坑は8基、溝跡6条が認められる。現代の遺構ではあるが「桶推」などが認められた。

今回の調査で検出された遺構の時期は、遺構に伴う土師器から栗罎式～表杉ノ入式の時期である。これは7世紀前半から10世紀頃と考えられる。集落は堅穴住居と掘立柱からなっており、堅穴住居跡はⅠ期(栗罎式)6基、Ⅱ期(国分寺下層式)2基、Ⅲ期(表杉ノ入式)2基となっている。各時期の遺構は、第Ⅰ期の栗罎式が多く、石背国設置の時期と同一期と考えられる。

掘立柱建物は11基あるが時代は堅穴住居より新しいと考えられる。4号建物跡(3間×4間)、7号建物跡(3間×5間)、9号建物跡(3間×3間)などの中型建物を中心とし、その他に掘立柱建物が認められるが、表杉ノ入式以降の遺物が認められないところから、11世紀以降にはすでに消滅したものと考えられる。

8号堅穴住居跡出土の硬玉製小玉について、この玉は栗罎式の土器と共存して発見され、律令制下の住居跡とされる堅穴住居からの発見は、古墳時代以降にも位階の表徴として使用されたものであろうか、不明である。

この集落は律令時代には、石背国石背郡広戸郷に属したが、現在は西白河郡矢吹町大字柿ノ内に所属している。

最後に、今回の調査にご協力下さいました地元柿ノ内の皆様に深く感謝申し上げます。

圖

版

第1図版



調査前の遠景（西北より）



中央ベルト（北より）

第2図版



遺跡全景（南東より）

第3図版



第1号住居跡（東より）

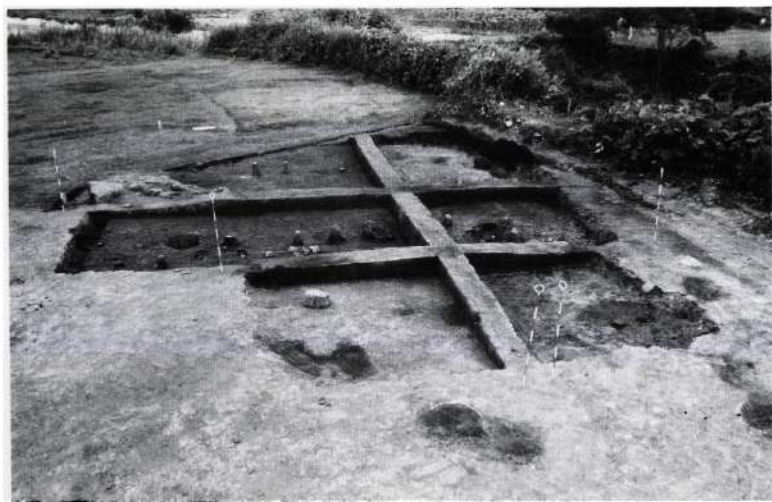


第2号住居跡（東より）

第4図版



第2号住居跡柱穴（P₂）



第3号、4号調査状況

第5図版



第3号、4号住居跡（西より）



第8号土坑（S1-04内）

第6図版

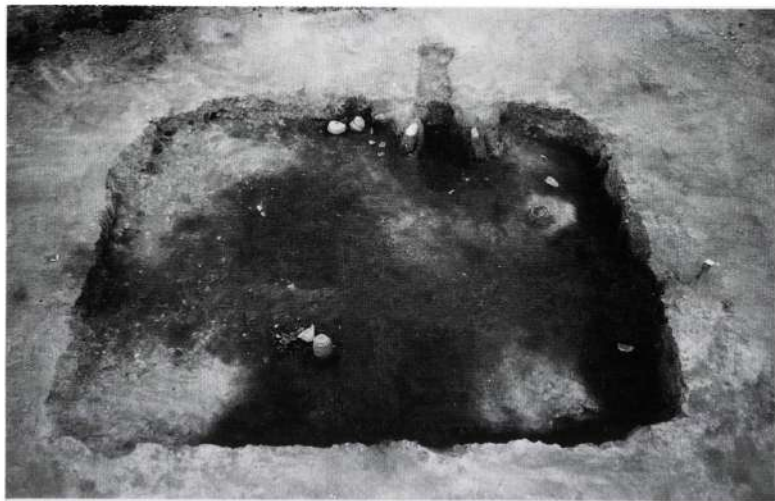


第5号住居跡（南より）

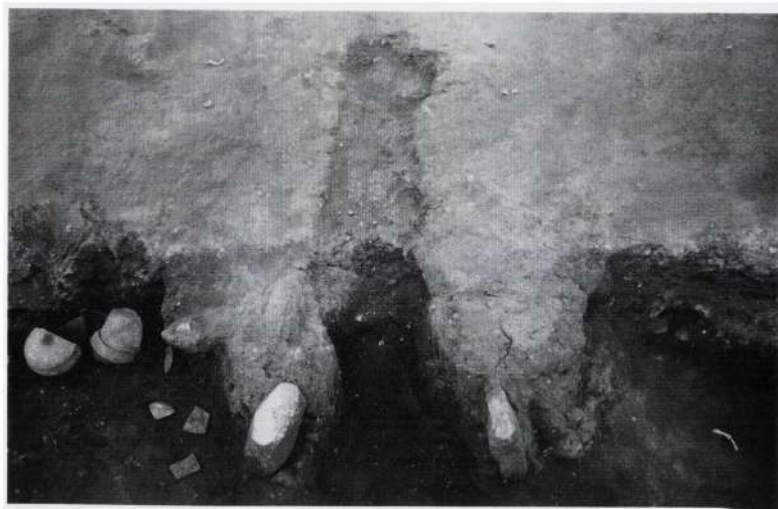


第5号住居跡カマド

第7図版



第6号住居（西より）



第6号住居跡カマド

第8図版



第7号住居跡（南より）



第7号住居跡カマド

第9図版



第8号住居跡（南より）



第8号、第11号住居跡調査状況

第10図版



第9号住居跡（南より）



第9号住居跡カマド調査状況

第11図版



第10号住居跡カマド（南より）



第10号住居跡カマド（北より）



第1号溝跡（南より）



第2号溝跡（北より）

第13図版



第3号溝跡（南より）



第3号、第4号、第5号溝跡（東より）



第6号溝跡（東より）



第5号溝セクション

第4号溝セクション

第15図版



第1号建物跡（東より）



第1号建物跡柱穴

第16図版



第2号建物跡（東より）



第2号建物跡柱穴

第17図版



第3号建物跡（南より）



第3号建物跡柱穴



第4号建物跡（南より）



第4号建物跡柱穴

第19図版



第5号建物跡（東より）



第6号建物跡（東より）

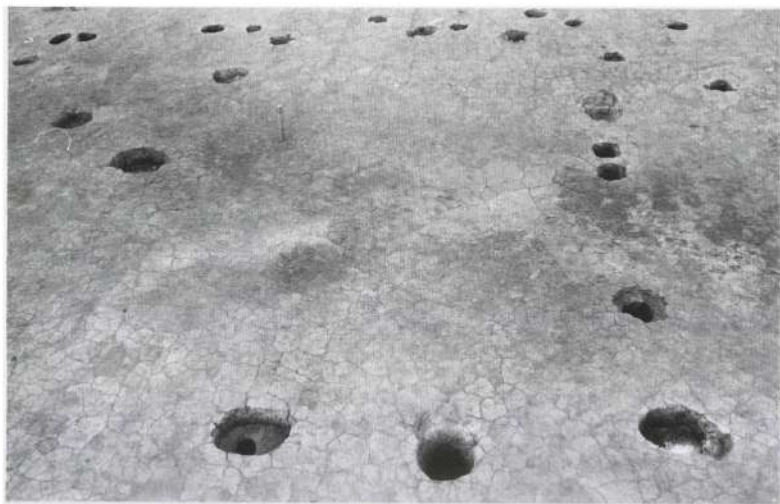


第7号建物跡（南より）



第8号、第9号建物跡・第3号遺構

第21図版



第10号建物跡（第1号柵列も含む）（南東より）

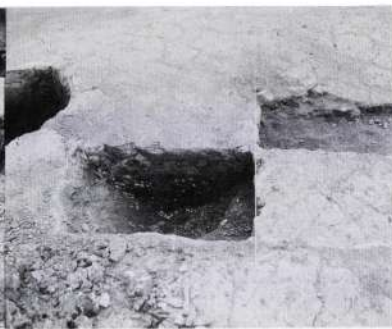


第11号建物跡（南より）

第22図版



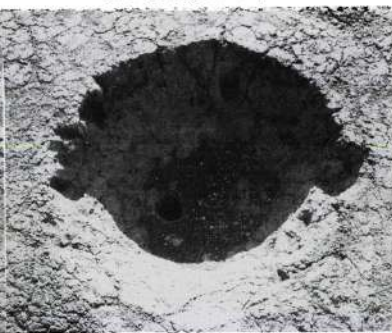
第1号土坑



第3号土坑セクション



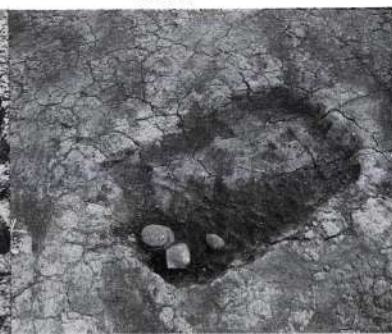
第4号土坑



第5号



第6号土坑セクション



第7号土坑セクション

第23図版



第1号遺構（南東より）



第2号遺構（東より）



第2号遺構セクション



第3号遺構

第25図版



1



2



3



4



5



6



7

第1号住居跡出土遺物(1～5)・第2号住居跡出土遺物(6～7)

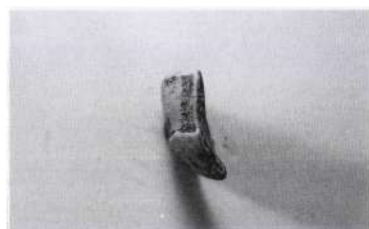
第26図版



1



2



3



4



5



6



7



8

第3・4号住居跡出土遺物

第27図版



1



2



3



4



5



6・7

第3・4号住居跡出土遺物

第28図版



1



2



3



4



5



6



7



8

第6号住居跡出土遺物

第29図版



1



2



3



4



5



6



7



8

第7号住居跡出土遺物

第30図版



1



2



3



4



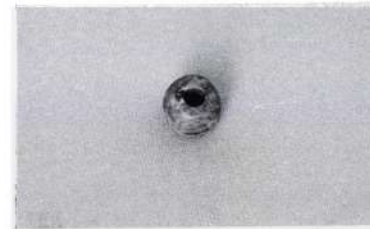
5



6



7



8

第7号住居跡出土遺物(1～6)・第8号住居跡出土遺物(7～8)

第31図版



1



2



3



4



5



6



7



8

第9号住居跡出土遺物

第32図版



1



2



3



4



5

第9号住居跡出土遺物

第33図版



1



2



3



4



5

第10号住居跡出土遺物

第34図版



1



2



3



4



5



6



7



8

第1号溝跡出土遺物

第35図版



1



2



3



4



5



6



7

第2号建物跡出土遺物 (1～2)

第7号土坑出土遺物 (3・7)

第2号遺構出土遺物 (4～6)

南町E 遺跡発掘調査報告書

昭和63年2月29日発行

編集・発行 福島県矢吹町一本木101番地
矢吹町教育委員会
印刷 矢吹タイムス印刷